The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	カラバルガスン碑文漢文版の新校訂と訳註
Author(s)	森安，孝夫；吉田，豊
Citation	内陸アジア言語の研究. 2019, 34, p. 1-59
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/73676
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

内陸アジア言語の研究 34, 2019.9, 1–59, +1 pl.

カラバルガスン碑文漢文版の新校訂と訳註

森 安 孝 夫*
吉 田　　豊**

目　次

1. 序文
2. 漢文面の字数復元問題
3. 天可汗問題と碑文の建造年代
　3.1. 天可汗とは誰か
　3.2. 12 行目の合毗伽可汗（＝保義可汗）と 13 行目以下の関係および懐信可汗の死亡記事
　3.3. 碑文の建造年代
4. 漢文テキストの校訂
5. 漢文テキストの書き下しと英訳
6. 訳註
附録１　ソグド文テキストと和訳
附録２　大阪大学所蔵ビチェース隊収集カラバルガスン碑文拓本画像データ一覧
参考文献
カラバルガスン碑文漢文断片の復元と縦書き移録文（稿末折り込み）

1. 序文

カラバルガスン Karabalgasun とは東ウイグル帝国（西暦 744–840 年）の中心的な都市（首都というのは正確ではないが一般的にそう言われる）であるオルドゥ=バリク Ordu-balïq の遺跡であり，カラバルガスン碑文とはそこに残っていたルーン文字ウイグル語・ソグド文字ソグド語・漢字漢文の三言語併用による巨大碑文である．オルドゥ=バリクの建設とカラバルガスン碑文の建造年代については諸説があるが，碑文の被記念者が東ウイグル帝国第 8 代君主・保義可汗（在位 808–821 年）であることにはもはや異論はない．その所在地は現モンゴル国のほぼ中央部（ウランバートルの西方約 350km）にあるオルホン河中流域のオルホン平原で，ホトント Хотонт の東方，ハルホリン Хархорин の北方である．同じ平原内のホショーツァイダムには突厥のキョルテギン碑文を持つキョルテギン廟の遺跡，ビルゲ可汗碑文を持つビルゲ可汗廟の遺跡があり，さらにハルホリンにはモンゴル帝国の首都であったカラコルムの都市遺跡とそれに隣接するエルデニ=ジョー

* 大阪大学名誉教授（MORIYASU Takao. Professor Emeritus, Osaka University）
** 京都大学大学院文学研究科教授（YOSHIDA Yutaka. Professor, Graduate School of Letters, Kyoto University）

仏教寺院が存在する[(1)].

カラバルガスン遺跡の発見・調査の経緯と三言語による碑文の解読研究の歴史については多数の論著があるが，そのほとんどを本稿では末尾の参考文献に掲載する．その概要は，日本語では1990 年代に森安孝夫が率いた日本モンゴル学術調査隊（通称ビチェース隊）の報告書［森安／オチル（編）1999, pp. 199–224］，中国語では林梅村／陳凌／王海城 3 氏による共同論文［林／陳／王 1999］，そして英語ではビチェース隊の参加メンバーであった林俊雄・吉田豊の両名が *Encyclopaedia Iranica* にそれぞれ執筆した事典項目［Hayashi 2010; Yoshida 2010］によって知ることができる．カラバルガスン碑文（以下 KB 碑文と略称）は三言語からなり，その碑文研究に最もよく利用されてきたのはラドロフのアトラス［Radloff 1892, *Atlas der Alterthümer der Mongolei*；以下 *Atlas*／アトラスと略称］に掲載された拓本である．ソグド語版については吉田 1988 を基礎にして Yoshida 1990, Yoshida 2009, Yoshida 2011b での新見解を取り込んだ吉田の最新の研究［吉田 forthcoming］があり，ウイグル語版については森安の解読［森安／吉田／片山 1999, pp. 219–224］が今なお有効である．本稿はウイグル帝国史に関する従来の諸研究で最もよく利用されてきた漢文版を主として扱うものであり，その最新の研究成果によるテキストと註釈を学界に提供することを目的とする．テキストには文字註を付し，書き下し文には英訳を添え，訳註をほどこす．なお KB 碑文研究における我々の最大の貢献は，漢文面とソグド語面の行数を大幅に拡大したこと，及び漢文面の 1 行の文字数を従来の推定より遙かに多く，90 字と決定したことである[(2)]．そのようにした根拠については次節で詳述する．

上述のビチェース隊はカラバルガスン遺跡の表面調査とヘリコプターからの写真撮影，及び KB 碑文の採拓と精査に終始したが，21 世紀に入ってからのドイツ=モンゴル学術調査隊はまず空中よりレーザー光線による写真を撮影して，地上の目視ではほとんど見えない遺跡の全容をくっきりと浮かびあがらせた上で，いわゆる宮城とその周辺で本格的な発掘に着手したのであり，その成果がさまざまな論著となって出版されている[(3)]．カラバルガスンは都市遺跡であり，その範囲は少なくとも東西 4 km × 南北 8 km の 32 km^2，大きく見積もれば 5×10 km（50 km^2）に及ぶが，その東北寄りのところにいわゆる「宮城」[(4)]があり，それがカラバルガスンの中心的遺構である[(5)]．そ

---

(1) Cf. 森安／オチル（編）1999, p. 15; Hüttel / Erdenebat 2010, p. 63 (fig. 1); Dähne 2017, p. 12 (fig. 2); 鈴木／齊藤 2014, p. 14.

(2) 吉田 2011a, pp. 8–9 を参照.

(3) Cf. Hüttel/Erdenebat 2010; Hüttel/Dähne 2012; Hüttel/Dähne 2013; Franken/Erdenebat/Batbayar 2014; Bemmann 2014; Franken 2016; Arden-Wong 2012; Arden-Wong 2015; Arden-Wong 2016; Dähne 2016; Dähne 2017.

(4) 最近のドイツ=モンゴル隊にはこの中心的遺構を palace「宮城」と決めるのではなく,「寺院」の可能性も残して so-called palace or temple complex「いわゆる宮城ないし寺院複合体」とする慎重論もあるが，ここからは唐王朝がウイグル可汗を正式に冊立するために贈ったと思しき玉冊の断片がわずか 3 つながら出土しており［cf. Arden-Wong 2015, pp. 75–76, p. 90 (n. 3), pp. 96–97 (figs. 1–2); Franken 2016, p. 33 (fig. 9)］,「宮城」とする従来の見方に問題はなかろう.

(5) Cf. *Atlas*, pls. XXVII–XXVIII; Hüttel/Erdenebat 2010, p. 17, pp. 75–77 (figs. 32, 33, 35, 36); Hüttel/Dähne 2012, pp. 420–421 (pls. 61–63); Franken 2016, p. 27 (fig. 1), p. 28 (fig. 2); Dähne 2017, p. 13 (fig. 3), p. 14 (fig. 4), p. 88 (figs. 54–55).

の「宮城」の主要部は縦横がおよそ 420 x 340 m であり［cf. 森安／オチル（編）1999, pl. 13b; 白石 2005, p. 144］，板築の城壁は雨で溶けて低くなっているが，それでもなお 7–10 m 程度の高さを残している．KB 碑文は「宮城」から南南西へ約 450 m 離れた地点に散在しているが，ドイツ=モンゴル隊は KB 碑文のあった場所が実はほぼ正方形で二重の壁を持つ建築物遺構の中央部に当たることを明らかにして，その建築物遺構をマニ教寺院とみなしている(6)．第 2 節の末尾で言及するように，森安は早くより KB 碑文がマニ教的性格を色濃く有していると主張してきており，それに応じて我々両名も本碑文を擁する建築遺構がマニ教寺院であった可能性が高いと想定してきたのであるが，残念ながら近年のドイツ=モンゴル隊の発掘調査によってもなお KB 碑文の建設場所がマニ教寺院であったという考古学的証拠は得られていない．

KB 碑文は，本来は，碑額を持つ龍頭（螭首）と，銘文のある碑身本体と，台座である亀趺が別々に製作され，碑身の上下両端に作り出された凸部を龍頭の下端と亀趺上端の凹部に差し込む構造になっていた．三言語を刻した碑身本体は推定で高さが 4 m 前後，横幅も推定で約 176 cm，厚さのみほぼ確実で，なんと約 70 cm もある巨大さであったが，恐らく 840 年の東ウイグル帝国滅亡時に破壊されて 30 個以上の大中小の断片になってしまった．中断片のうち漢文が記された 2 個［*Atlas,* pl. XXXIV-2 & 3］はラドロフ隊のヤドリンツェフによってサンクトペテルブルクへ持ち去られ［cf. Koch 1891; Dähne 2017, n. 74 on p. 17］，現在は多分エルミタージュ美術館に所蔵されているが，20 世紀初頭までは確実に現地に存在していた 3 つの大断片［*Atlas,* pl. XXXI, pl. XXXII-1］は 1990 年代に我々が現地調査した時には行方不明になっており，わずかに 1 つの大断片の一部が割れて残っていただけであった(7)．碑文の復元サイズを含め，ビチェース隊による現地調査の詳細については，森安／オチル（編）1999, pp. 43–44, 209–212, pls. 14a, 14b, 14c, 14f, 14g を参照されたい．

しかるに 2013 年 9 月に森安が三菱財団人文科学研究助成金を得てモンゴル国に派遣した齊藤茂雄氏（当時，大阪大学文学研究科特任研究員）が A. オチル氏と共にホトントを訪問し，郡長のバトバートル Д. Батбаатар 氏が KB 碑文のやや大きな 2 断片を所蔵していることを突きとめ，拓本を採って大阪大学に持ち帰ったところ，これらの 2 断片の 1 つは漢文面の大断片［*Atlas,* pl. XXXI］に含まれた 20–22 行目の上部と，ソグド語面の大断片［*Atlas,* pl. XXXII-1］に含まれた 13–16 行目の上端から 2–6 行目の下端まで斜めに走る部分に相当することが判明した．齊藤氏がバトバートル氏から得た情報によると［鈴木／齊藤 2014, pp. 17–18］，この 2 断片は約 50 年前に建てられた古い家屋を 8 年前に取り壊した際に，基礎の部分から発見されたおよそ 20 個の断片のうちに含まれていたものであった．齊藤氏が採拓した 2 断片以外もおそらく KB 碑文のものであったと思われるが，ほとんどの断片は 2013 年までの間に墓碑にするため周辺住民に分配してしまったという．齊藤氏によれば，両断片はいずれも細長い直方体状であり，漢文銘文を持つ断片は縦 110 cm（文字がある面の長さ 100 cm），横 14 cm，厚さ 35 cm，面取り面の幅 5 cm，ソグド銘文を持つ断片は縦

(6) Cf. Hüttel / Dähne 2012, p. 422b; Arden-Wong 2016; Dähne 2016, p. 36a, p. 37 (fig. 2); Dähne 2017, pp. 27–85, especially p. 68.

(7) それが森安／オチル（編）1999, plate 14b の断片 No. 8 である．この No. 8 を含め，ビチェース隊収集の KB 碑文拓本の画像データは大阪大学のオンラインデータベースで公開されている．附録２を参照．

122 cm，横 27 cm，厚さ 32 cm である．つまり 20 世紀初頭までは存在した 3 つの大断片は，その後，現地の住民によって適当な大きさに切断・加工され建材として再利用され，姿を消してしまったらしいということである．幸運にも再発見された件の 2 断片は，オチル氏の薦めもあって，バトバートル氏よりハルホリン博物館に寄贈されたようである．

以上のような次第で，目下のところ遺跡現地には，ほぼ原形を留める大きな龍頭（縦横 ca. 150 ×220 cm）と恐らくその上に置かれた帽子状の石のほかには，碑身の小さな断片が十数個散在しているのみである．亀趺の断片も 20 世紀前半には存在していたが(8)，今ではほとんど見つからない(9)．龍頭（高さ約 1.5 m）と碑身本体（推定の高さ約 4 m）と亀趺（推定不可であるが常識的に高さ 1 m 以上）を合体した本来の高さは優に 6.5 m を越え，7 m に近づいていたであろうと推定される．10 世紀以前においては，かの高句麗広開土王碑文以外に類例を見ないほどの稀なる巨碑であり，そこに東ウイグル帝国の威勢が現われていたとみても決して過言ではなかろう．

本体の三言語面のうち 20 世紀前半まで最もよく残っていたのは漢文面であるが，それでも欠損部が大きく，復元できるテキストは全体の半ばにも満たず，漢文面全体の構成とストーリーを考え直すのは至難の業である．とはいえ我々は相当の年月をかけて，ソグド語面とウイグル語面も参照しながら，その作業に取り組んできた．もちろんこの作業は，東ウイグル帝国の西方進出とマニ教の歴史とも密接に絡んでいる．なお，この作業についてはパリの故ハミルトン博士 J. Hamilton が我々とは別に長年の課題としており(10)，欧米の学者がこれを活用できるようにフランス語で発表する準備をしていたのであるが，奇しくも我々二人が 2003 年 5 月にパリのコレージュ=ド=フランスで連続講演をした最終日に会場入り口付近で昏倒され，救急病院に運ばれたが昏睡状態のまま翌日に逝去された(11)．本稿において我々は，生前に博士より頂戴していた未完成原稿のコピーを利用し得たので，その旨は随所で明記するが，それとは別に本稿で言及することになる先学の KB 碑文漢文テキストの移録文と翻訳に関わる主要な論著を年代順に列挙しておく．

ドヴェリア本＝Devéria 1892 in Société Finno-Ougrienne 189. XXVIII–XXXVIII.（1890 年に KB 碑文を再発見したフィンランドのヘイケル A. Heikel が将来した写真に基づいて，G. Devéria が中国公使館書記 Che-tseng の全面的協力のもとに作成した漢文移録文；フランス語訳あり）

許本＝許景澄 (Shu King-Cheng) in Radloff 1895, *Die alttürkischen Inschriften der Mongolei,* 3. Lieferung, extra sheets between p. 291 and p. 292.（1891 年にロシアのラドロフ隊が作成した拓本に依拠；pp. 286–291 に W. P. Wassiljeff のドイツ語訳あり）

シュレーゲル本＝Schlegel 1896.（ラドロフの委嘱を受けたオランダのシュレーゲルによる最初

(8) Cf. *Atlas*, pl. XXX-2, 3, 6, 7; 野村 1937, p. 468.

(9) 亀趺のうち残っているのはビチェース報告書の断片 No. 1 だけである［cf. 森安／吉田 1998, p. 158；森安／オチル（編）1999, pp. 48, 212］.

(10) Hamilton 1990 はその成果の一部である．

(11) この経緯については森安孝夫「ハミルトン博士の訃」(『内陸アジア言語の研究』18, 2003, pp. i–vi）参照．

の本格的な註釈付きテキストであり，シュレーゲル自身のドイツ語訳あり）

和林録＝李文田『和林金石録』（『靈鵜閣叢書』1897 年所収）

Chavannes / Pelliot 1913, pp. 177–199.（マニ教にかかわる部分のフランス語訳註あり）

王国維本＝王国維「唐回鶻毗伽可汗聖文神武碑圖」（宣統己未年＝1919 年作成），『古石圖録』（上海・廣倉學窘印行『芸術叢編』）所収.

羅振玉本＝李文田（撰），羅振玉（校定）『和林金石録』1929，『石刻史料新編』第二集，15，台北，新文豊出版公司，1979，pp. 11465–11469.

――王国維も羅振玉も 1910 年頃に清朝の高級官僚であった三多が採らせた拓本を利用――

野村本＝野村 1937＝『新西域記』pp. 465–467.（1908 年に現地で採拓した大谷探検隊の野村栄三郎による移録文）

羽田本＝羽田 1957a, pp. 305–314.(12)

Hamilton 1990.（ハミルトンが出版準備をしていた KB 碑文研究の一部である）

林／陳／王本＝林／陳／王 1999.

Palumbo 2003.（マニ教にかかわる部分のイタリア語訳註あり）

Moriyasu 2003, figs. 1–2.（2003 年のコレージュ=ド=フランスで行なった連続講演の際に初めて公表した漢文テキストであり，本稿の基礎になったものである）

KB 碑文の漢文面のテキストとして，欧米ではシュレーゲル本が，日本と中国では羽田本がよく利用されてきた．しかしシュレーゲル本は，原碑の欠損している所を大胆に補い，しかもそれを含めて独訳したため，しばしば誤解を招く元凶となってきたものであり，取り扱いには多大の注意を要する．これに対する羽田本は，シュレーゲル本を的確に批判・改善しているものの，移録に際してはなおシュレーゲルの録文を底本として傍行に校訂を添えるという形をとったため，羽田自身の読解案が一見では認識しづらく，やはり研究者の誤解を生むもととなっている．新しい漢文テキストが必要とされる所以である．

ところで羽田本作成にあたって羽田亨は，2 種の拓本を利用したというから，日本には少なくとも 2 セットの拓本があったはずである．そのうちの 1 セットは，現在，京都大学並びに立命館大学に分蔵されるものである(13)．しかしもう 1 セットの，大谷探検隊の野村栄三郎が現地で採ったという拓本は，行方不明である．一方，中国では，北京図書館善本部（1996 年当時，現・中国国家図書館）と北京の中央民族学院（現・中央民族大学）図書館の両者がこの碑文の拓本を所蔵している．前者については，我々は 1996 年に瞥見する機会があったが，サイズなどを計測しただけで，詳しいメモを取ることは許されなかった．後者については，程溯洛 1993 がこれを参照しつつ新たなテキストを作ったというが，そのテキストはかつてシュレーゲルが全くの想像で補った部分をほとんどそのまま受け継ぐなどしていて，使用に堪えない．

---

(12) なお Камалов 2001, pp. 194–197 には羽田本テキストからのロシア語訳あり.

(13) 森安／吉田／片山 1999, p. 211 参照.

ここに我々が提出する漢文テキストは，アトラスに収載された拓本（英語 rubbing；フランス語 encrage）の写真，京都大学並びに立命館大学に分蔵される拓本，そして現地に残るわずかの碑文断片（森安／吉田／片山 1999, p. 212 の編号の Nos. 5, 8, 9）の三者をベースに，上に列挙した従来の録文ないし碑文研究を全て参照しながら，新たに作り直したものである．もちろん，シュレーゲル本の推定補足部［Schlegel 1896 付載別紙テキストの朱字部分］の多くは当然ながら削除した．さらに，こうしてできた原稿を，1998 年 11 月〜1999 年 9 月の森安の在外研究期間中にパリに持参して行って，それまでにハミルトンがド=ラコスト拓本を元に作成していたテキストと比較したところ，互いに啓発するところがあった．このド=ラコスト拓本は，1909 年にド=ラコストが現地で作成した洋式拓本（英語 squeeze or moulding；仏語 estampage）であり，現在はパリのアジア協会（Société Asiatique）の図書館に所蔵されている．森安はこれをハミルトン博士と共に十分に時間をかけて実見する機会を持った．ただし，この拓本にはラドロフ隊が早くにロシアに持ち帰った 2 断片が含まれないばかりか，現存する拓本 6 断片の整理番号が，Nos. 4, 11, 12, 14, 15, 22 と断続的になっており不自然であるから，恐らく行方不明になった部分があるのであろう(14)．ハミルトンによれば既に 1950 年代からこの 6 断片しか見たことがないという．いずれにせよ，現存のド=ラコスト拓本を見て修正できた部分には，その旨の註記をした．ここに改めて天上のハミルトン博士に格別の謝意を表したい．

2. 漢文面の字数復元問題

カラバルガスン遺跡の現状と，KB 碑文の三種の言語によるテキスト部分の大きさ（行数と各行の字数）の復元，さらに新発見の内容の一部については，先ず森安／吉田 1998, pp. 146–156 で言及し，さらに森安／吉田／片山 1999, pp. 210–214 で詳しく考証した．行数については次節でも論及するが，結論のみ述べると，正面とみなすべきルーン文字ウイグル語面が横書きで 129 行程度(15)，裏面中央から左へ向かって縦書きされ左の側面まで連続する漢文面が 34 行，裏面中央から右へ向かって縦書きされ右の側面まで連続するソグド語面が 45 行である．ただし，1999 年の段階では漢文面の 1 行の字数を従来の見解（シュレーゲル本も羽田本も 75 字とする）よりやや長く，78〜82 字程度と見積もっていた［森安／吉田／片山 1999, pp. 212–213］．偶々同じ 1999 年に出た林／陳／王本でも 1 行を 80 字とする見解が示された［林／陳／王 1999, p. 164］．しかし，その後も研究を進めた結果，我々は，従来の推計案にさらに字数を加えて，1 行 90 字として漢文テキストを復元すべきであると確信するに至った(16)．この点は，ハミルトンも含む従来の見方と大きく異なるので，以下にその根拠を述べることとする．

---

(14) Hamilton 1990, p. 127 及び林／陳／王 1999, p. 157 によれば拓片は 15 件あったはずという．

(15) ビチェース報告書で漢文面 1 行の字数が 80 字程度であり，碑身本体の高さが 360 cm と想定していた段階では，ルーン文字面の行数を 116 行程度としていた［森安／吉田／片山 1999, p. 213］．

(16) この結論に基づく復元テキストは Moriyasu 2003, figs. 1 & 2 として公表済みであり，90 字とする結論のみは既に Yoshida 2010, p. 531a 及び吉田 2011a, p. 8 で発表されている．ただしその根拠を詳しく表明するのは本稿が初めてである．

漢文面の 1 行を 90 字と決定した根拠の第一は，我々が現地調査によって拓本を採ることのできた 1 断片，すなわち森安／吉田／片山 1999, pp. 212–213 で断片 No. 5 とした断片の収まるべき位置が判明したことである(17)．この断片自体の存在は，ヘイケル隊やラドロフ隊の調査では見すごされたが，清朝の王国維や羅振玉は気付いているし，立命館大学所蔵拓本にも含まれている．それは恐らく王国維や羅振玉が利用した拓本が，清朝の高級官僚で庫倫（クーロン）辨事大臣を務めたサンドー（Sandau, 三多）が独自に幾セットも採拓させたものであって，そのうちの 1 セットが日本に渡来して京都大学と立命館大学に分蔵され，その他の中国に留まった幾つかのセットがその後，北京図書館や中央民族大学図書館などに所蔵されるに至ったからであろう(18)．

森安／吉田／片山 1999, pp. 213–214 では，小断片とはいえ横幅が 73–74 cm はあり，漢文 13 行分は残っているこの断片 No. 5 の入るべき位置は不明としており，またその時点では判読できた文字は僅かに 6–7 文字であった．然るにその後，10 行目の「黙俀悉德」というマニ教高僧の称号マヒスタク（maxistak / mahistag）と 15 行目の「狐媚磧」という地名のところでこの断片 No. 5 とアトラス拓影の XXXIV-1 がぴたりと接合することに気付き，必然的に当該断片 No. 5 がアトラス拓影の XXXI の下に入るべきことが判明した［文字註 73, 92 も参照］．そこで改めてこの断片 No. 5 について，阪大拓本と立命館拓本を子細に比較対照しつつ解読し直した結果，本断片上で読める文字は倍増した．そして従来はアトラス拓影の XXXI と XXXIV-1 の間は 4 文字分の破損しかないと考えられてきたものが，この断片 No. 5 がその間に入ることが判明したおかげで，8 文字以上の破損を認めなければならなくなったのである．その一方で，その破損は 8 文字分であってそれ以上でないことも，以下のような理由から論証できたのである．

それはまず可汗の継承記事にかかわる．本碑文には，以下で取り上げる 5 代目から 6 代目への継承記事以外に，初代から 2 代目，2 代目から 3 代目（以上第 6 行），3 代目から 4 代目，4 代目から 5 代目（以上第 11 行）の継承記事が残されている．それらを見ると可汗の位を継承したことを意味する，「嗣位（父子関係の場合）」あるいは「襲位（父子関係ではない場合）」という語句の後に，4 文字の句を二つ連ねていることがわかる．

初 代→2 代目　嗣位．英智〓〓，〓〓經營．子○
2 代目→3 代目　嗣位．〓〓〓〓，奇特異常．（この復元は第 4 節の文字註 46 と連動）
3 代目→4 代目　襲位．雄才勇略，内外脩明．子○
4 代目→5 代目　嗣位．治化國俗，頗有次序．子○

(17) 林／陳／王 1999, p. 167 では，北京図書館所蔵のこの断片拓本の位置を決定できないとしている．

(18) 林／陳／王 1999 によれば，北京大学図書館善本部や天津市歴史博物館にも拓本セットが所蔵されているという．我々はこれらを見る機会を持てなかったが，我々より多くの拓本を見て作成されたらしい林／陳／王本によって，実質的に我々のテキストを改善できた箇所は皆無であった（可能性があるとすれば，16 行目の 26–27 文字を「夷滅」とする箇所であるが，本稿では採用していない）．なお，つい最近になって東京の国立国会図書館にも KB 碑文の拓本が 1 セット所蔵されていることが判明したが，これも三多が採拓させたものであり，第二次大戦後に日本に将来されたようである［cf. 福島 2018］．我々はこれを実見したが，既に完成していたテキストをそれによって改めたところはない．

このことから，第 11 行で，第 5 代から第 6 代可汗への継承を記す際にも，やはり四字句を二つ連ねていたと推定される．我々の推定を従来のテキストと比較して示せば次の通りである．

シュレーゲル本，羽田本	子〇汨咄禄毗伽**可汗嗣位，天性**康樂．崩後〇
王国維本	子〇汨咄禄毗伽〓〓〓〓，〓姓康樂．崩後〇
林／陳／王本	子〇汨咄禄毗伽**可汗嗣位，天性**康樂．崩後〇
森安／吉田（本稿）	子〇汨咄禄毗伽**可汗嗣**位．〓〓〓〓，百姓康樂．崩後〇

「百姓康樂」の位置が決まったことによって，アトラス拓影の XXXIV-1 の最末行の最上段にある「有餘」の位置も自動的に決まってくる．すなわちそれは全体の 19 行目の上から 54・55 文字目である．ところでその 19 行目の上から 39–47 文字目は吉田 1988, p. 28 及び Yoshida 1990, p. 119 においてソグド語面を参考にして「追奔逐北，直至大**食國**」と復元されていた．それゆえ「直至大**食國**」と「有餘」の間の欠字は 6 文字と判明し，「追奔逐北，直至大**食國**．〓〓〓〓，〓〓有餘．」と復元される．この妥当性は，17 行目に見える平行表現「奔逐至真珠河．俘掠人民，萬萬有餘．」によっても認められよう(19)．

以上のように我々は，アトラス拓影の XXXI と XXXIV-1 の間の破損部が従来推定されていたより 4 文字分多いことを論証したわけであるが，これだけで漢文版の 1 行の字数が決まるわけではない．碑文の下端が完全に失われているのであるから，当然のことながら，そこにどれほどの漢字が入るかが分からない限り 1 行全体の字数は分からないのである．

それでは，碑文の下端はどのように復元できるだろうか．この場合，推定復元の根拠になるのは 10 行目から 11 行目にかけてである．10 行目の残存部の最下段（第 74–78 字）には「往來教化」という一句とその後に続く空格がある．とするとその直後には，本碑文の他の箇所の用例からみて，尊敬すべき可汗名か，マニ教の法王ないし慕闍のいずれかが来るはずである．それゆえ，シュレーゲルはここに第 4 代可汗となる「頓莫賀」を補ったのである．しかし本碑文では可汗名には全て即位後の称号が使われており，即位前の名前が使われることはないので，ここには当然，「頓莫賀」が第 4 代可汗として即位後に称した Alp Qutluγ Bilgä (-qaγan) に対応する漢語表記「合骨咄禄毗伽」が来るべきこと，羽田の言う通りである［羽田 1957a, pp. 315–316］．ただし本碑文では qut に当たる語には一貫して「汨」が使われ（第 1, 6, 11 行，計 4 例），qutluγ も骨咄禄ではなく汨咄禄と書かれているから，ここでは「合汨咄禄毗伽」と補うべきである．林／陳／王本では「合」の替わりに「登里」を補うが，各史書に「合」とあり，しかも本碑文のソグド語版 13 行目と比較するなら，我々の復元以外はありえない．

さらに羽田は，ここには少なくとも「頓莫賀」が第 3 代の牟羽可汗にクーデターでとって替わった事情が一言は必要であると考証している．「往來教化」の次の空格に着目すれば，ここに第 3 代可汗の名が来るのが自然であるが，6 行目にある長い正式称号を繰り返したとは思えない．とこ

(19) 因みに 17 行目の「奔逐」は，19 行目と 20 行目に見える「追奔逐北」という表現を縮めたものと解釈されるから，単に「追いかける」ではなく「敗北して逃走する敵対者を追いかける」の意である．

ろが，真に幸いなことに，ソグド語面第 13 行目には，「bögü 可汗が身罷ったとき，alp qutluγ bilgä 可汗が位に即いた」とあるので，この漢文面にも bögü に対応する漢字の「牟羽」を使った「牟羽可汗崩後」などという文句があったと推定されるのである．さらに，次に来るべき「合汨咄禄毗伽可汗」の前にも 1 字分の空格が必要であるから，この第 10 行末には，シュレーゲルの予想よりはるかに多くのスペースがあったはずであり，最低でも，「往來教化○牟羽可汗崩後○合汨咄禄毗」とあって，次行冒頭の「伽可汗」に繋がったはずである．とすれば，これだけでも従来の見方より 12 字ほど多く行末を伸ばさざるをえない．以上のような次第で我々は，漢文面の 1 行の字数として 90 字を提案するのである．無論 90 字以上であった可能性は否定できないのであるが，余りに字数を多く見積もることは，碑身の縦寸と横寸の比率がいびつになることを意味するし，90 字というきりの良い字数であった可能性の方が高いと考えるからである．

なお字数復元に関連して一言追記しておきたい．ウイグルの公式歴史文献ともいうべき KB 碑文がマニ教的性格を色濃く有している点については，既に森安が繰り返し論及したところである．まず森安 1997, pp. 58–65 では KB 碑文のルーン文字の字体に注目し，それが他の突厥・ウイグル・キルギスの残したルーン文字碑文の字体と違っているが，トゥルファン出土のマニ教徒ルーン文字文書の字体とよく似ていることを指摘した．次いで森安 2002, pp. 150–157＝森安 2015a, pp. 30–34 では KB 碑文漢文面におけるマニ教関連記事への字数配分の多さに着目してかなり詳しい論述をした．そして 2003 年にはその日本語論文のエッセンスを，パリのコレージュ=ド=フランスで行なった連続講演の中で英文で発表した［Moriyasu 2003, pp. 59–62］．

3. 天可汗問題と碑文の建造年代

3.1. 天可汗とは誰か

KB 碑文漢文面を東ウイグル帝国史の基礎史料として使おうとする時，最大の難問は 12–18 行目に頻出する天可汗を誰に比定するかである．これについて最も詳しく論じたのは安部 1955, pp. 179–193 と Mackerras 1972, pp. 184–186 であり，そこに研究史もほぼ尽くされているので繰り返さないが，従来の諸説は大きく二つに分けられる．すなわち一つは「天可汗＝現可汗」とみなす立場から天可汗を第 8 代・保義可汗とするものであり，もう一つは天可汗を当時在位の可汗に限定しないという立場から，本碑文に見える天可汗を一種の固有名詞とみなして第 7 代・懐信可汗と特定するものである．

保義可汗説：Chavannes / Pelliot 1913, pp. 179, 199; 王国維 1923, p. 994; 小野川 1943, pp. 413–414; 山田 1951, pp. 96–97 = 山田 1989, p. 114; 羽田 1957a, pp. 225–227, 317–323, n. 18 (p. 324); 根本 1968, pp. 5, 7; Beckwith 1987, pp. 154–166, especially p. 156; 華濤 2000, p. 21.

懐信可汗説：田坂 1940b, pp. 179–180; Abe 1954, pp. 439–442; 安部 1955, pp. 179–193; Mackerras 1972, pp. 184–186; 森安 1972, p. 133; Hamilton 1990, p. 131; Yoshida 2010, p. 532a; 吉田 2011a, p. 16.

KB 碑文の碑題に名前が挙がっている被記念者が保義可汗である点には疑問の余地がないから，天可汗は当時在位の可汗を意味するという前提に立つ研究者たちにとっては保義可汗こそが天可汗であるとするのは当然である．確かに天可汗が「今上陛下」の意味で使われている用例は漢籍では随処に見られ，かつては保義可汗説の方が主流であった．しかし安部健夫が 1955 年に大胆な懐信可汗説を提唱して以来，現在ではその方が優勢になりつつあるが，それでもなお 1987 年にベックウィズが，さらに 2000 年の時点でさえ華濤が保義可汗説を採っていることに注意されたい．我々は安部とは別の観点から懐信可汗説を補強することができると考えているので，その理由を以下に三つ述べよう．

第一に，銘文の分量の問題がある．現在残されている漢文面の銘文（1–24 行）と銘文の本来の分量との関係である．21 行目以降は碑文の側面に書かれているが，側面は大きく破損しており全体で何行あったかは一見分からないように思われる．しかるに，ルーン文字面は下端の部分が残っていて［森安／オチル（編）1999, plate 14g, 拓本断片 No. 10］，その表面は平滑なままで文字が刻まれていないことが知られる．これは，ルーン文字面が銘文全体を刻んだ状態で，下端部分になお余白を残していたことを示している．碑文面の使い方から，ルーン文字面が正面であったことは明らかであり，裏面と側面にソグド語と漢文の銘文が刻まれたのであった．石碑において三言語のテキストそれぞれに与えられたスペースがほぼ同じであったと仮定すると，裏面中央から左側面に及ぶ漢文と裏面中央から右側面に及ぶソグド語の二つの言語のテキストは，それぞれの側面全体を使っていたと推定される．なぜなら，森安／オチル（編）1999, plates 14a & 14b として復元した碑文のサイズから分かるように，ルーン文字面は正面の横幅が 168 cm であるのに対して，漢文面とソグド面の占める横幅は「裏面の半分 84 cm＋面取りされた縁 5.5 cm＋側面 62 cm」で合計 151.5 cm となる．一方，縦の長さは不明ながら，三言語について同じであるから，表面積にすればルーン文字面の方が漢文面並びにソグド面よりかなり広かったはずである．ルーン文字面の下端に余白があったのは，そのためであろう．

ここで視点を変えてソグド面の行数を考察しよう．現存の断片においてソグド語銘文の 1 行の幅を計測すると，裏面ではおおむね 3 cm 強，側面では 3.5–4 cm となっている．その割合で計算すると全体でおよそ 45 行（裏面に 27 行，面取りした角に 1 行，側面に 17 行）を刻むスペースがあったと推定される．そしてソグド語版の側面を残す断片，すなわち森安／吉田／片山 1999, pp. 217–218, No. 7b（＝吉田 1988, Fragment 9）は，推定でソグド語面の 32 行目から 43 行目を残しているから，ソグド語銘文のほぼ最後の部分に対応していて，やはり側面の全面に銘文が刻まれていたことを疑う必要はなくなる．同様の推定を漢文面で行なうと，漢文面の行数は全体で 34 行（裏面に実数で 19 行，面取りした角にも実数で 1 行，側面には推定で 14 行）ほどあったとみて大過なかろう．

さて問題の「天可汗」という称号は 12–18 行の 7 行に亘って現われており（ただし破損の為に 19 行以降に存在しなかったかどうかは確認できない），残存している漢文テキストは 24 行目までであるから，懐信可汗の即位記事のある 11 行以降の 14 行分と比べれば，碑文面の大半が天可汗の

事績の記録であるように見える．上でも述べたように，KB 碑文が保義可汗を記念する碑文であることを考慮すれば，天可汗は保義可汗に他ならないと考えるのがいかにも当然であった．しかし，漢文面全体の行数が 34 行であったとなると，19 行以降に 15 行分のスペースがあることになり，非常に多くの事柄が記録されていたと考えることができる．要するに天可汗が 7 代目の懐信可汗であったとしても，それに続く第 8 代保義可汗独自の事績を記すスペースは十分に残されているわけである．さらにソグド語版の側面の推定 41 行目には確かに ”l-pw pyl-k’ x’γ’n「合毗伽可汗（alp bilgä qaγan）」とあり，まさしく保義可汗の名前が見えているのである．

ちなみに保義可汗の名前が残されていた碑石の拓本は，森安／吉田／片山 1999, p. 212 では No. 7b（＝吉田 1988 の Fragment 9）と呼ばれているが，No. 7a（＝吉田 1988 の Fragment 6）と同じ石の別の面に刻まれていることは，森安が 1994 年 7 月の現地調査で発見したのであった［cf. 吉田 1995, p. 28, fn. 2; 吉田 2011a, p. 9］．従来は，No. 7b = Fragment 9 が右側面に属するものであることが知られていなかったので，吉田 1988 では Fragment 9 は裏面の 14 行目から 25 行目をカバーすると考え，そのような復元図を作成していた．現在は新たなソグド語版テキストを完成させ，まもなく英語で出版する予定である．本稿では読者の便宜のために，註釈抜きのソグド語テキストと和訳を附録 1 として添えている．

第二の理由は，天可汗の行なったこととして記録されている事績の中に，明らかに懐信可汗の功績に属するものが含まれることである．例えば，15 行目に記された吐蕃（チベット）との北庭争奪戦は森安が詳しく研究し明らかにしたとおり［森安 1979＝森安 2015a, pp. 230–274］，791 年もしくは 792 年にウイグルの勝利を以て終息しており，これは頡于伽斯／頡於迦斯（イル=オゲシ）すなわち即位以前の懐信可汗の事績であった．また 16 行目にある天可汗の対チベット戦でのクチャにおける大勝利は，コータン語文書の分析によって 798 年のことであったことを Yoshida 2009 で論証している．これも懐信可汗の支配時代のことである．なおこの問題については吉田 2006, pp. 29–30, 45; 吉田 2011a, p. 19; 吉田 2013, p. 56; De la Vaissière 2007, p. 128; 森安 2015a, pp. 272–273 なども参照されたい．また Yoshida 2009 は，逃走するカルルクとチベット連合軍を西の方向に追ってフェルガナに至ったという漢文 20 行目の記事内容が，同じくコータン語文書の分析によって 802 年の事であった可能性を示した．さらに，コータン東方のダンダン=ウイリク遺跡から，多数のチベット人がカシュガルで殺されたことを伝えるユダヤ=ペルシア語手紙文書が発見された［張／時 2008］．ダンダン=ウイリク遺跡は西暦 800 年頃には放棄されているので，この手紙文書もおそらく 800 年前後に書かれたものであり，これが伝えるカシュガルでのチベット人殺戮とは，KB 碑文にみえる懐信可汗時代のウイグルのフェルガナへの進攻に関連するものと吉田は推定している［吉田 2016; 吉田 2017］．

むろん，798 年のクチャでの戦いや，802 年と推定したカシュガルでの戦闘は，実際には即位前の保義可汗が懐信可汗の命令を受けて遂行したという可能性は否定しない．しかしながら，以上に述べた天可汗をすべて保義可汗だとみなしてしまうと，東ウイグル帝国史上，マニ教を導入した牟羽可汗に比肩するほどの歴史的役割を果たした懐信可汗の事績が KB 碑文のどこにも記録さ

れていないこととなり，いかにも不自然である．なお天可汗問題を複雑化させてきたという点で留意したいのは，懐信可汗と保義可汗の間に一人ないし二人の可汗が在位したという見解が，Chavannes / Pelliot 1913 をはじめとする研究者によって受け入れられ，山田 1951 の論証により明確に否定されたにもかかわらず，今なお強く残っていることである［cf. 村井 2018］．この認識は，懐信可汗から保義可汗への継承の背景の理解とも密接にリンクする天可汗問題に一定の影響を及ぼしていたと思われる．天可汗は懐信可汗であるとする説を組織的に展開した安部が，出版後間もない山田信夫論文に言及する所以でもある．懐信可汗から保義可汗へ直接に可汗位が継承されたとする山田説は，村井 2018 によって改めて確認されたところである．ただし当の山田自身すら天可汗は保義可汗であるという見解を採っていた．

第三の理由は以下の通りである．漢文版 13 行目の「［可］（汗）宰衡之時，与諸相殊異．爲降誕之際，禎祥竒特」，すなわち「某可汗が宰相であった時に，他の諸大臣とはまったく違い際だっていた．彼が誕生した時には，めでたいしるしが特に優れていた」に対応するソグド語版のテキストは 16 行目に見えるが，その部分は次のように読むことができる：

> pr s’t pw(yrw)xty xwy-štr ’yl ’wk’sy ’l-pw xwtl-wγ t(yk)’yn n’m δ’βr ZY xwt(y) [M](N) ”z-y mrts’r MN s’t ’yδ’yty yxwst’y ZY ’ny’z-’nk wm’t
>
> 「すべてのブイルク（pwyrwx < T. buyruq「大臣」）たちの中で尊長のイル=オゲシ（’yl ’wk’sy < il ögäsi「宰相」）たる Alp Qutluγ に，テギン（tyk’yn < tegin「王子」）の名称を与えた．そして彼自身は誕生のとき[から]すべての人たちとは区別され別格であった」[(20)]

ここで最も注目すべき点は，漢文版の某可汗が，もとは buyruq「ブイルク（大臣）」とか il ögasi「イル=オゲシ（宰相）」という家臣の立場であって，可汗の系譜に連なる王族ではなかったのに，後に tegin「王子」の称号が与えられ王族に列せられた事実が判明することである．周知の通り漢文史料によれば，790 年前後の北庭争奪戦でウイグルの宰相として活躍した頡于伽斯／頡於迦斯（イル=オゲシ il ögasi の漢字音写）が，国人に推される形をとった無血革命により 795 年に第 7 代懐信可汗として即位するのであるが，彼は 6 代目までのウイグルの可汗家たるヤグラカル氏出身ではなく，エディズ Ädiz 氏出身であった．吉田はソグド語版に buyruq と tegin という術語を新たに読み取ることによってウイグル王家の血統が変わった事実を漢文以外の一次史料から明らかにしたが［吉田 2011a］，それによって漢文 13 行目の記事は紛れもなく懐信可汗のことを述べていることが確定した．実は安部 1955, pp. 190–192 でも，ハンゼン O. Hansen によるソグド語版の古い解釈に基づきほぼ同じ考証を展開していたのであるが，安部が依拠するハンゼンのテキストは極めて不完全で，xwyštr ’yl ’wk’sy ’lpw xwtlwγ（表記は改めた）“Meister il ugäsi alpu qutluγ” だけしか正しくなかったのである．一方でその安部は，13 行目の「宰衡之時」を保義可汗が宰輔であった時と考えているが，その点はソグド語版に照らせば正しくない．

---

(20) ここでは xwy-štr から n’m までの同格の名詞の意味の切れ目の解釈を，吉田 2011a と少しく変更した．

3.2. 12 行目の合毗伽可汗（＝保義可汗）と 13 行目以下の関係および懐信可汗の死亡記事

前項で天可汗を懐信可汗に比定する三つの根拠を述べたわけだが，それに付随する問題として次の二点がある．その一つは，11 行目に懐信可汗の継承記事があり，その直後の 12 行目に保義可汗がまだ王子であった時代の話が続き，そしてさらに 13 行目で懐信可汗が宰相であった時代の事柄が記されているという，時系列の上ではやや不自然な事態をどう説明するかである．二番目の問題は，懐信可汗から保義可汗への継承記事は存在するのか，そして存在するとすればどこにあったのかという疑問である．

ところで漢文版の 12 行目は，8 代保義可汗がまだ王子であった時代に，王子の中では抜群であるので，臣下たちが彼を特別扱いするように懇願する場面の記述である．11 行目で 7 代懐信可汗の即位を述べ，13 行目は懐信可汗が宰相の時代の事を記しているので，その中間の 12 行目に 8 代保義可汗の王子時代の話が語られるのはいかにも奇妙である．対応するソグド語のテキストは，14 行目に 7 代懐信可汗の即位記事があり，それに続く 14 行目の末尾から 15 行目には次のように記されている：

/14/ [’x]šy-wn’kw s’r m’δ ptyškwy’(n)[t?] /15/ (••••)[ ](’šm)’xprn ’xš’w’nδ’ry w’δy n(y)sty ’skwδ’skwn ZY ’xš’w’ncykw ’rkh šyr γr’n ZY k(w)z-py xcy

「/14/ 彼らは申し上げた（＝奏上した），/15/ …あなた様は支配者の座に座っておられ，国家に関する仕事はきわめてすばらしくかつ精力的です」

これは漢文の 12 行目の「［施］合毗伽可汗，當龍潛之時，於諸王中最長…」の部分にほぼぴたりと対応する場所に置かれているが，残念なことに個人を特定する表現が見えず，’šm’xprn「あなた様」が具体的に誰のことを言っているのかは分からないようになっている．従って，ソグド語版から第一の問題を解決する鍵は得られない．ただこの問題については，天可汗＝懐信可汗説を提唱した安部がすでに「なおこの場合，碑題になったアルプ=ビルゲ=カガンの功業は，大半はその父カガンのそれのうちに含めて語られるとともに，この末尾の一部分においては，それがかれだけのものとして，単独に叙述されていたのではなかったかと考えられる」と言っており［安部 1955, p. 188］，マッケラスや山田と同様［Mackerras 1972, p. 186; 山田 1974, p. 113］，我々もこの見解に従う．すなわち，懐信可汗が即位した当初から，即位前の保義可汗が懐信可汗と共同して国事に当たっていたのであり，それ故にこそ，懐信可汗の即位記事の直後という一見すれば不可思議な位置に，即位以前の保義可汗を特別視するような文言が記されていると考えるのである．なお，安部の「この末尾の一部分」は漢文の 22 行目以降を指しているが，我々はそれ以降も 34 行目まであったと考えているので，保義可汗独自の事績を記すスペースが十分に存在することは上で述べた通りである．

それでは第二の問題はどうであろうか．本稿の附録 1 で引用するソグド語版の和訳を御覧いただきたい．その 23 行目に「［この世界］を（出て）行ってはおられなかった（＝お隠れになっていなかった）．それから神（のごとき）帝王は[…した]とき[＜ある程度破損＞]した」とあるのは，

そこまでの文章の主語であった可汗がまだ崩御していなかったことを示唆しているように思われる．それに先行する部分と漢文版との対応を見てみると，ソグド語版の 19 行目にはクチャでの攻防のことが書かれており，それは漢文版の 16 行目「吐蕃大軍，攻圍龜茲．天可汗領兵救援」に対応する．ソグド語版 20 行目は帰順してきたカルルクの支配者の処分と，トゥルギシュによるセミレチエ地域の支配権の回復が記されていて，漢文版の 21 行目「復與歸順葛禄，册真珠智惠葉護爲主，又十箭三姓突騎施」に対応している．そしてソグド語版 21–22 行にはカリフとホラーサーンのアミールや諸々のアミールたち，土着の支配者たちに命令し，彼らが貢ぎ物を献上したこと，つまり東ウイグル帝国の影響力がイスラム圏すなわちアッバース朝に及んだことが記される．続く 22–23 行にはマニ教寺院の建設やマニ教徒を保護したことが言及される．以上の第 21–23 行は漢文版との対応が明らかではないが，我々は漢文版 19 行目に「大食国」を補った．また，漢文 22 行目には「…寺宇，令僧徒寛泰，聽士安樂」とあるのは，ソグド語版第 22–23 行のマニ教寺院の建設やマニ教徒（「聽士」はマニ教の一般信徒を意味する niγošak「聽衆」の訳語）の保護に対応する．さらにその直後に「悶〓闍名」と読める部分がある．その部分の註釈でも述べるとおり，我々はこの「悶〓闍名」について，カリフを意味するアラビア語 amīr al-mu’minīn（「信徒たちの長」）に由来するソグド語 mwmyn xm’yr の音写語ではないかと考えている．つまりソグド語版と漢文版の記述には出入りがあるものの，おおよその対応は認められる．このように考察してくると，ソグド語版の 23 行目の「お隠れになって（＝崩御して）いなかった」可汗とは懐信可汗以外にありえないと思われる．そして，’βc’np]δy xr’mty L’ wm’t「お隠れになって（＝崩御して）いなかった」という過去完了形は，その後程なくして崩御したことを含意しているのであろう．そのように考えると，ソグド語版でも漢文版でも，このすぐ後に懐信可汗の崩御と保義可汗の正式な即位の記事があったと推定することは自然であろう．

最後に，漢文版の「天可汗」に対応するソグド語の表現について検討してみよう．「可汗」を意味するソグド語は ’xšywny ~ ’xšywn’k「（帝）王」であるが，それが「栄光ある」を意味する prnpδy ないし同義語の prnxwnt’k を伴う場合がある．その組み合わせが現われる 3 例は 21 行目と 22 行目に見え，この部分は懐信可汗の事績を記す部分であると考えられるから，二つの表現はいずれも懐信可汗を特定していたように思われる．つまりソグド語の prnpδy / prnxwnt’k ’xšywn’k こそが漢文の「天可汗」に対応する表現であった可能性が高いのである．

翻って，他の可汗たちがソグド語でどのように呼ばれているかを見てみると，牟羽可汗以外の可汗の場合はソグド語で言及されることがないので確認できない．一方，9 行目から 12 行目の牟羽可汗の事績を記す部分では，一貫して βγy ’xšywny「神（のごとき）帝王」と呼んでいる．従って確実とは言えないまでも，上の推定は正しいように見える．そこで prnpδy / prnxwnt’k ’xšywn’k ＝天可汗＝懐信可汗という前提で，もう一度上で問題にしたソグド語版の 23 行目を見てみると次のようになっている：

’βc’np]δy xr’mty L’ wm’t pts’r c’nkw βγy ’xšy-wn’k [大きな破損]

「この世界を（出て）行ってはおられなかった（＝お隠れになっていなかった）．それから神（のごとき）帝王は[…した]とき[＜ある程度破損＞]した」

つまり，まだ崩御していなかった天可汗の時代の「神（のごとき）帝王」が話題に上っているわけだが，これは懐信可汗ではなく保義可汗を指していると見なすことができるであろう．なお ’xšywny と ’xšywn’k の違いは，単に綴りのヴァリアントに過ぎないが，何故か 12 行目までは一貫して前者が，14 行目の懐信可汗の即位以降は一貫して後者の綴りが使われている．銘文のもととなる写本原稿の書記が変わったのではないかと考えられる．

このように，碑文の天可汗に対応するソグド語の表現は prnpδy / prnxwnt’k ’xšywn’k であり，その一方で牟羽可汗や保義可汗は βγy ’xšywn’k「神（のごとき）帝王」として言及されている可能性があるのだが，その場合後者はウイグル語の tängri qaγan にまさしく対応する．田坂も推定しているように［田坂 1940b, p. 179］，KB 碑文の漢文版の起草者は，同時代の唐朝の書記官たちの用法を離れ，天可汗とも呼ばれ遊牧民の特別な崇敬対象となった唐の太宗と比肩させるために，この表現を使ったのではないだろうか．実際，唐の太宗は当時既に伝説の英雄ともなっていたようで，敦煌出土のソグド語の「ルスタム物語」の写本には，漢文で「胡秦王伝一巻」と書かれている．ルスタムは実在しないイランの伝説的英雄であるが，それを「胡（＝ソグド）の秦王（＝王子時代の太宗）」と呼んでいる．これに対応するように，本碑文のソグド語版では，天可汗は「天使ヤコブ」の特徴を身に帯びていると言っている．その天使ヤコブは，マニ教の神話では勇ましい軍神なのである［cf. Yoshida 2019a, pp. 138–139］．

3.3. 碑文の建造年代

天可汗を懐信可汗に比定することによって，碑文の建造年代についての従来の見解を見直す必要が出てくる．天可汗は立碑時点で在位していた可汗に対する呼称であるとする立場からは，碑文の碑題に名前が挙がっている被記念者が保義可汗である点に疑問を差し挟む余地はないから，保義可汗を「天可汗」と呼ぶことが出来る時代に碑文は建造されたことになる．それ故，彼の在位期間である 808 年から 821 年の間に建造されたという結論になる．シャヴァンヌはこの考え方であった［Chavannes 1897, p. 44］．羽田は「碑石建設の年代」という一節を設けて，この問題に関する先行研究をまとめるとともに自説を論じた．彼が取り上げた先行研究は，ラドロフの懐信可汗時代説［Radloff 1895, p. 285］，シュレーゲルの昭礼可汗（在位 825–832）時代説［Schlegel 1896, pp. 6–7］，シャヴァンヌの保義可汗時代説［Chavannes 1897, p. 44; see also Chavannes / Pelliot 1913, p. 180］であった．このうちラドロフとシュレーゲルの説は現在では全く問題にならない．羽田はシャヴァンヌに従うとした上で，次のように結論した：「此等の理由によれば XII 以下に記さるる天可汗の事績は保義可汗に就きて記せるものなること疑無かるべく，従て碑の建設せられたるも，此の可汗の時代にして，然もかく諸方の征伐の記されたるよりすれば，其の治世（808–821）中の末年に近き時なりしなるべきを信じて疑はず」［羽田 1957a, pp. 322–323］．ハミルトンは，やはり

保義可汗の治世時代の 815 年に建造されたとしている［Hamilton 1990, p. 125］．この極めて具体的な年次がどのようにして導き出されたのか，それについて彼はついに論じることなく他界したが，推測するに多分 808 年と 821 年のちょうど中間の年次を選んだだけではないだろうか．

一方，ミノルスキー V. Minorsky はその論文の中でこの問題に関するハロウン G. Haloun の説に言及したが，それによればハロウンは保義可汗の死後に碑文は立てられたと考えていたことがわかる［Minorsky 1948, p. 300］．ハロウン自身は自説を論じることがなかったので，碑文の天可汗が誰を指すのかについてどのような見解を持っていたのかはわからない．保義可汗の紀功碑として，碑文は当然彼の死後に建造されたはずであるというような単純な理由であったのかもしれない．

天可汗を懐信可汗と考える安部健夫の見解は「アルプ=ビルゲ【＝保義可汗：筆者】の生前と限るまでもない．生前であったかも知れぬと同時に，その死後間ぢか，若しくは程へてのことであったかも知れない」［安部 1955, p. 188］というやや曖昧なものであった．同じく天可汗を懐信可汗と考える我々は，本碑文が保義可汗に捧げられた記念碑であるという定説に従いつつも，本碑文は保義可汗の功績を称える「聖文神武碑」なのであるから，それが建造された時期は即位後すぐではおかしくて，やはり一定程度の年数が経ってからで，恐らくはその治世末年に近かったと考えたい．もし保義可汗の即位直後，すなわち前代の懐信可汗の逝去直後の建造だとしたら，むしろ碑題に懐信可汗の名を掲げ，彼の功績を称える聖文神武碑として建造する方がふさわしかろう．同じ東ウイグル帝国の 2 代目可汗である磨延啜を記念する三つの碑文（テス・タリアト・シネウス）が全て本人の在位中で，その最大規模のシネウス碑文の建設もやはり彼の治世晩年のことであったことを考慮すれば，やはり保義可汗の治世（808–821）の末年に近い時と見なすのが妥当ではなかろうか．

4. 漢文テキストの校訂

凡 例

太字	完全に破損した文字の推補 Suggested restorations of wholly damaged letters.
文字	残画に基づく推補 Letters partly damaged but restored with certainty.
＝	1 文字分の破損 One character damaged and lost.
○	空格 A space of one character deliberately left blank.

碑 額

1） **九姓迴**鶻愛登
2） **里囉汨没**蜜施
3） **合毗伽可汗聖**
4） **文神武碑并序**

01）　九(21)姓(22)迴鶻愛(23)登里囉汨没蜜施合毗伽可汗聖文神武碑并序○○○(24)○○(25)内宰相頡于伽思藥羅杙(26)〓〓○○〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓頡于伽思合伊難主莫賀達干(27)〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓

02）　○○○○(28)莫賀達干○紆伽哩伽(29)思訖(30)○○○○○○○○○(31)紆伽〓〓〓〓莫賀達干○紆伽(32)迭億也(33)〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓○○○○○○○(34)〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓

03）　聞，夫乾(35)坤開闢，日月照臨．受命之君，光宅天下．徳化昭明，四方輻湊．〓〓〓〓，八表歸仁(36)．〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓，表裏山河，中建都

---

(21) 王国維本・羅振玉本ではいずれも欠字であるが，もとの和林録には「九」の残画である「ノ」が採録されている．

(22) 和林録には女偏のみしかないが，王国維本・羅振玉本とも「姓」としている．5 行目に「九姓迴鶻」とあるのを参照しての復元であろうが，異論はない．

(23) ここに入るべき 1 字がウイグル語の ay「月」の音写でなければならないことは，ソグド文面の第 1 行目との比較より分かる．一方，ウイグル語 ay「月」は唐代の漢籍では多く「愛」で音写されている．ラドロフの拓本の図版，及び京大拓本に見える残画は「愛」字の右下の部分と矛盾しないので，ここにこの字を復元することをためらう必要はない．和林録・許本では欠字であるが，王国維本・羅振玉本では共に「愛」としている．さらに，cf. Chavannes / Pelliot 1913, p. 179, n. 1.

(24) ハミルトンはド=ラコスト拓本によって，1 行目上段にある漢文の碑題の下には約 22 cm の空白部があり，中段の「内宰相頡于伽思」につながるという［Hamilton 1990, p. 129］．この空白部は，本碑文の他の箇所の拓本と比較して字数を計算すると，およそ 5 文字分に相当する．5 文字分ともおそらく空格であって，残欠部ではなかろう．

(25) 林／陳／王本では，ソグド語版を参照してここに多くの文字を補うが，吉田豊のソグド語版を誤解しており，まったく容認できない．

(26) 「藥羅杙」（ヤグラカル Yaγlaqar, ウイグルの支配氏族名）の読みはまず吉田が復元に成功し，それと独立にハミルトンも同じ結論にいたったものである［吉田 1988, p. 41; Yoshida 1990, p. 118; Hamilton 1990, p. 129］．ただし吉田は「藥羅紇」としている．*Atlas*, pl. XXXIII のリタッチや王国維本・羅振玉本では「杙」を「教」としていたが，誤り．羽田本は「杙」かとしていた．現地に残るこの部分の碑文断片とその拓本（森安／吉田／片山 1999, p. 212, No.9a）によれば，確かに「藥」字は上段の草冠のほか，中段の左側半分までが明白に読みとれ，疑問の余地はない．

(27) この「達干」もソグド文 3 行目より確実に補える．Chavannes / Pelliot 1913, p. 184 では全般的にシュレーゲルの恣意的推測を非難しているが，ここはシュレーゲルの推測がたまたま当たった例である．

(28) 諸拓本により，行頭には 4 文字分の空格があったと見てよい．ただしこの空格は単に行下げのためであって，それに続く「莫賀達干」だけで独立した 1 人の人物を指すわけではなく，1 行目の末尾から連続するある人物の称号の末尾部分とみなすべきである．

(29) Hamilton 1990, p. 130 では「紆伽哩伽」を ögälig と推定復元している．

(30) Hamilton 1990, p. 130 では Chavannes / Pelliot 1913, pp. 185–186 に従って「思訖」と読み，ハミルトンはそれを部族名 Sïqïr / Sïqar「思結」が人名として使われたものと解釈する．

(31) ここはもともと空格部であったと思われる．

(32) 「紆」の後ろの「伽」はハミルトンが補ったものである［Hamilton 1990, p. 130］．森安はド=ラコスト拓本より，「紆」の前に確かに 1 字分のスペースがあることは確認した．

(33) *Atlas*, pl. XXXII の拓影では「億也」は見え，その前の残画は読めないが，王国維本・羅振玉本では「迭億也」とする．Chavannes / Pelliot 1913, p. 186 は「億也」については同意見であるが，「迭」については「造・遠・達」のいずれかと推測する．この部分の立命館拓本は全く読めない．

(34) 少なくともこの 7 文字分は空格である．この前後にどのくらい空格があるかは不明．

(35) 「乾」は異体字「乹」である．

(36) ハミルトン原稿では「信」となっていたが，ド=ラコスト拓本を一緒に見て森安の「仁」案を受け入れて

焉．■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

04）襲國於[37]北方之隅，建都於嗢崑之野．以明智治國，積有歲年．子○■■■■[38]嗣位．天生英斷，萬姓賓伏．■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■○可汗在位，撫育百姓，若■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■阿

05）史那[39]革命．數歲之間，復[40]得[41]我舊國．于時，九姓迴鶻・冊姓拔悉蜜・三姓葛禄諸異姓，僉曰，「前代中興，可汗並是[42]■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■至高祖○闕毗伽可汗．■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■子○登里

06）囉[43]没蜜施頡翳德蜜施毗伽可汗嗣位．英智■■，■■經營．子○君[44]登里囉汨没蜜施頡咄登蜜施合俱録■■毗伽可汗嗣位[45]．■■■■[46]，竒[47]特異常．宇内[48]諸邦，欽伏自■．

くれた．「信」はシュレーゲルの読みであるが，それ以前の和林録では正しく「仁」となっていた．

(37) 本碑文中の「於」は，全て例外なく，方偏が「扌」に見える異体字の「扵」である．

(38) この缺字 4 文字をシュレーゲル本では朱字で「骨力可汗」と推定するが，それはありえない．最初の文字だけ上部の残画があるが，Chavannes / Pelliot 1913, pp. 187–188 はアトラス拓影とド=ラコストの拓本とに基づいて，それを「骨」ではないと述べている．なお，ドヴェリア本（p. XXXIII）は「骨」のところを「撫」と読むがそれも不可．ド=ラコスト拓本を精査したハミルトンは，ヘンが土偏か縦に細長い十（例えば博という字の偏と同じ），旁は上から見て横棒 1 本ないし二点，その下に田，その下に横棒 1 本か「冖」，以下は欠損と見ている．

(39) 「那」は異体字「郍」である．

(40) 本碑文中の漢字の行人偏（彳）は，ほとんどの場合「⺧」に見える．

(41) 和林録・許本・野村本・王国維本・羅振玉本は全て欠字である．しかし京大拓本では直前の字と同じ行人偏（彳）が判読できるので，シュレーゲル本に従って「得」としておきたい．ド=ラコスト拓本では見えなかった

(42) 王国維本・羅振玉本は「見」とするが，むしろ「是」に見える．ハミルトンも「見」としていたが，ド=ラコスト拓本を一緒に見直した結果，森安の「是」案も可能であると同意してくれた．

(43) これは第 2 代の葛勒可汗（磨延啜）を指し，その正式称号はシネウス・タリアト両碑文から知られる通り tängridä で始まるから，冒頭（すなわち前行末尾）に tängri に当たる「登里」を補うのは問題ない．

(44) シュレーゲル本はここに「愛」を推定して入れ，羽田 1957a, pp. 202, 300 でもそれを踏襲したが，大きな誤解である．もしかしたら空格が二つ連続していたかとも思われるが，ド=ラコスト拓本を見ているシャヴァンヌ／ペリオはそれを否定し，1 字分の空格の次に確実に 1 文字はあり，しかもそれは他のウイグル可汗の称号中で「登里囉」の直前に来る「愛」でも「君」でもなく，むしろ 4 行目のシュレーゲルが誤って「骨」と読んだ字と彼此対照すべきものという［Chavannes / Pelliot 1913, p. 187］．さらにペリオは，“kün” の可能性を模索するが，通常の漢字音写形の「君」ではないとして当惑している［Pelliot 1929, pp. 216–217］．しかるにド=ラコスト拓本を再精査したハミルトンは，*Atlas* の pl. XXXII-1 も援用して，ここの残画は第 3 行の 14 文字目の「君」と全く同じだから，「君」と復元すべきであると力説する［Hamilton 1990, p. 130］．その点はド=ラコスト拓本及び国会図書館所蔵拓本の両方を実見して森安も納得したのであり，もはや「君」という復元に疑問の余地はない．

(45) ここに「嗣位」を補うのは，羽田 1957a, pp. 315–316 によるが，阪大拓本では「嗣」字の残画が見え，その直前の「汗」字の偏（⺧）の下端も見える．

(46) 「…俱録」と「汗嗣位…」と「竒特…」とは別々の断片上に残る文字である．第 3 代牟羽可汗の正式称号［cf. 羽田 1957a, p. 300; 森安 1991, p. 182］と本碑文の書式よりみて，「俱録」の後にはシュレーゲルが推定した通り「毗伽可汗」の継承記事があったのだろうと思うが，さらにその後がシュレーゲルの推定のように 2 文字分だけのスペースだったかどうかは，7–19 行目の 45–46 文字目から 49–50 文字目までのスペース全体にかかわる大きな問題である．このスペースの取り方は王国維本でも同じであるが，動かぬ根拠があるわけではない．我々は第 2 節で述べたように，森安／吉田／片山 1999, pp. 213–214 の断片 No. 5 がここに入ると確信し，従来のテキストの 45–46 文字目までの断片と 49–50 文字目以下の断片とは

○〓〓皇[49]帝蒙塵[50]，史思明之子朝義〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓

07） 使，幣重言甘乞師，併力欲滅唐社．○可汗忿彼孤恩[51]竊弄神器，親統[52]驍雄，與王師犄角，合勢齊駈，剋復京[53]洛．○皇帝〓〓〓〓〓〓〓〓〓爲兄弟之邦，永爲〓〓〓〓．○可汗乃頓軍東都，因觀風〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓法

08） 師，將睿息等四僧入國．闡揚二祀，洞徹三際．况[54]法師妙達明門，精通七部，才高海岳，辯若懸河．故能開正[55]教於迴鶻．〓〓〓〓〓〓〓〓應對[56]爲法[57]，立大功績，乃爲黙傒悉徳[58]．于時，都督[59]・刺[60]史[61]・内外宰相〓〓〓〓〓〓「〓〓〓〓〓〓〓〓〓

09） 〓今悔前非，願[62]事正教．」奉○旨宣示，「此法微妙，難可受持．」再三懇請[63]．「往者無

もっと離すべきであると考えた次第である．

(47) 「竒」をシュレーゲルは「傑」と推定し，ハミルトン原稿では「殊？」としていたが，和林録・王国維本では「竒」と読んでおり，ド=ラコスト拓本でも「竒」と見て問題ない．林／陳／王本も「竒」とする．

(48) 「…字内」と「諸邦…」とは別の断片に残る文字である．許本では 1 文字分，王国維本・羅振玉本では 2 文字分のスペースを空けるのに対し，シュレーゲル本では直接連続させている．一応，後者に従っておくが，2–4 文字があった可能性は残されており，もしそうであれば，1–5 行目の下段のテキストの位置も微妙に違ってくる．

(49) 「帝」に先行する 4 文字分としてシュレーゲルは「大唐玄宗」を推定するが，むしろ空格 1 文字と「大唐皇」の 3 文字と見なす方がよかろう．安禄山が反乱を起こした時に「蒙塵」したのは玄宗であるが，史思明が反乱側のリーダーとなった時点で蒙塵していた皇帝は粛宗なのだから，曖昧な表現の方がふさわしいのではないかと思う．この箇所の直後に見えるのが史思明であって安禄山ではない事にも注意すべきである．

(50) 「帝蒙塵」の 3 文字は許本にはなく，シュレーゲル本でも推定を意味する朱字で表わすが，和林録・王国維本・羅振玉本のいずれもこれを採録する．実際，*Atlas*, pl. XXXIV-2 でも十分判読可能である．

(51) 「恩」は異体字の「恩」である．

(52) 「統」字は上部に残格があるのみであるが，糸偏の上部（幺）と旁の上部（「亠」）が見えている．シュレーゲルの推定する「逞」は不可．和林録・王国維本・羅振玉本はいずれも欠字のままであるが，森安は 15 行目の「親統」の「統」と同じであるとみて間違いないと思う．「親統」で文脈はよく通ずる．一方，ハミルトン原稿では「親杖」としていたが，ド=ラコスト拓本を一緒に見直して森安の読みの可能性を認めてくれた．

(53) ここと，16 行目の「京觀」の「京」は，実際には異体字「亰」が使われている．

(54) 羽田本のみ「泥」とするが，あとは全員「况」としている．旁は「兄」ではなく，「口」と「儿」との間に横棒が 1 本あるが，「况」の異体字とみて問題ない．

(55) この「正」は異体字が使われる．

(56) 「爲」の前の字を羽田本は「野か」とするが，*Atlas* 拓影や京大拓本ではそのように読むのは不可能である．森安にはむしろ 14 行目の「對敵」の「對」字の下部の残画のように見える．そこでとりあえず「對」と復元し，さらにここに「應對」と書かれていたのではないかと推測しておく．

(57) 「爲法」は従来のように「法（法規）をつくりて」ではなく，「應對」に続けて「（教）法の為に」と読むこととする．

(58) Chavannes / Pelliot 1913, p. 192 では「〓傒悉徳」となっていたが，〓の箇所に「黙」を補って「黙傒悉徳」とし，これをマニ教第 3 位の高僧マヒスタク（maxistak / mahistag）に比定したのは石田幹之助が最初である［石田 1925, p. 171 = 石田 1973, pp. 296–298］．この点については訳註 08:63–66 も参照．左下部の残画は「火」の左半分らしく見えるので，「黙」字の部首レッカは四点の「灬」ではなく，「火」で書かれていたに違いない．そのような実例は次行の「藝」でも見られる．

(59) 実際には異体字である．

(60) 「刺」は異体字の「刺」である．

(61) 羽田本のみ「使」とするのは誤植であろう．

(62) シュレーゲル本も林／陳／王本も「崇」とするが，アトラス拓影からは王国維本の「願」が支持される．

識，謂鬼爲佛．今已悞(64)真(65)，不可復事．特望〓〓，〓〓〓〓．」〓〓〓曰，「既有志誠，任(66)即持賣(67)應有刻畫魔形，悉令焚藝．祈神拜鬼，並〓〓〓．」〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓

10）〓受明教，薫血異俗，化爲蔬(68)飯之鄉，宰殺邦家，變爲勸善之國．故〓(69)〓之在(70)人，上行下效．○法王(71)聞受正(72)教，深讃虔〓，〓〓〓〓，〓黙傒悉徳(73)領諸僧尼，入國闡揚．自後○慕闍徒衆，東西循環，往來教化．○牟羽可汗崩後○合汨咄禄毗

11）伽可汗襲位．雄才勇略，内外脩明．子○登里囉没蜜施俱録毗伽可汗嗣位．治化國俗，頗有次序．子○汨咄禄毗伽可汗嗣位．〓〓〓〓(74)，百(75)姓康樂．崩後○登里囉羽録没蜜施合汨咄

---

(63) シュレーゲルは 4 文字目がほとんど残っていない「再三懇〓」を「再三懇惻」と復元して “Wiederholt (bedauerten Wir dass ...) ...” と独訳し，「惻」を “to feel for deeply” の意味に取っている［Schlegel 1896, pp. 57, 130］．しかしながら，「再三懇〓」すなわち「再三再四にわたってねんごろに～する」という文脈にうまくはまる 1 文字の動詞として相応しいのは「請・求・乞」などである．ここの残画が 12 行目の「允臣等所請」の「請」字の上端と矛盾しないので，やはり「懇請」と復元すべきである．因みにパルンボは「懇禱」と復元する（この情報は同氏が京都で講演した時の配布ペーパーによるもので，Palumbo 2003 には掲載されていない）．「懇禱」は「ねんごろに祈り求める」意であるから，不可能ではない．

(64) 原文は「悞」である．一般にそれは「誤」の異体字のはずである．しかしそれでは文脈に合致しないので，Chavannes / Pelliot 1913 以来，それを「悟」の異体字とみなして解釈してきた．もし異体字でなければ，単なる誤刻であろう．

(65) 「真」であって「眞」ではない．

(66) 王国維本・羅振玉本では勿論，シュレーゲルが参考にした許本でも正しく「任」としてあるのを，シュレーゲル本では敢えて「往」と読むべきであると主張する［Schlegel 1896, pp. 57–58］．しかし，ここの「任」字は，次行の「往來教化」の「往」字の形と違って旁の上端に 1 点がない（和林録も参照）．草書体風ではあるが，これが「任」であることに間違いはない．シャヴァンヌ／ペリオ，羽田も「任」としている．

(67) Chavannes / Pelliot 1913, pp. 193–194, 198 並びに王国維本・羅振玉本ではいずれも「受」とする．しかし羽田はこれを退け，さらにシュレーゲル本に「賚」（ライ；賜う，与える）とあるのも批判し，手元の拓本から自信をもって「賣」であると断言する［羽田 1957a, pp. 312–313］．結果的には許本に従ったことになる．森安もこの読みに従う．拓本を見たはずの林／陳／王本で相変わらず「受」としているのは納得がいかない．

(68) シュレーゲル本のみが「蒸」とするが，他は全て「蔬」で一致している．拓本を精査しても，それで問題はない．

(69) 残画は糸偏らしい．シュレーゲル本の「聖」はありえない．ド=ラコスト拓本では糸偏と矛盾しないが，糸偏であることまでは分からない．

(70) 「在」は和林録・王国維本・羅振玉本による．ド=ラコスト拓本でもそう見える．

(71) 「法主」ではなく「法王」である［cf. Chavannes / Pelliot 1911, pp. 581–582, fn. 4］．この点は諸拓本でも確認できた．

(72) この「正」も異体字が使われる．

(73) 王国維本・羅振玉本ともに「徳」字を読んでいる．アトラスの拓影には文字の下部のみが残っているが，その残画はそれと矛盾しない（和林録の残画も参照）．Chavannes / Pelliot 1913, p. 195, fn. 2 & p. 196, fn. 1 ではシュレーゲルの「愿」を退けて，「徳」に相違なかろうといい，且つこれを僧侶の称号（例えば「大徳」など）か名前の一部であろうと想定している．さらに Pelliot 1929, p. 249 では，かなり慎重にではあるが，これも 8 行目の「黙傒悉徳」（マヒスタク）と同じ称号である可能性を示唆している．幸い阪大拓本には「傒」字の残画が見えるので，我々もこの考えを支持する．

(74) シュレーゲル本では正しく「可汗」を補った後に，「嗣位」を推補する．確かにここは第 6 代可汗の即位継承の記事であるから，「可汗」の後には少なくとも「嗣位」・「継承」・「襲位」などの 2 文字が必要である．羽田 1957a, pp. 315–316 の指摘の通り，可汗が死んで実子が継承する時には「嗣位」と書くのが本碑文の特徴であるならば，ここでもシュレーゲルは正しかったことになる．阪大拓本では「位」の残画が見える．大きな問題は「可汗嗣位」の後，次の「百姓康樂」までの間に，どれだけのスペースがあった

禄胡禄毗伽可汗継承．〓〓〓○[76]愛登里囉汨没蜜

12） 施合毗伽可汗，當龍潛之時，於諸王中最[77]長．都督・刺史・内外宰相・親信[78]官等奏曰，「○○天可汗，垂拱寶位，輔弼須得賢人[79]．〓〓〓〓〓〓〓佐治之才，海岳之量．國家體大[80]，法令須明．特望○天恩允臣等所請．」〓〓〓〓〓〓〓〓○○天

13） 可汗宰衡之時，与[81]諸相殊異．爲降誕之際，禎祥竒特[82]．自幼及長，英雄[83]神[84]武．坐籌帷幄之下，決勝千里之外．温柔惠化，撫育〓〓，〓〓〓〓，爲[85]世作則，爲國經營，算莫能紀．初，北方堅昆之國，控弦冊[86]餘萬．彼〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓

14） 〓〓英雄智勇，神武威力，一發便中．堅昆可汗，應弦殂落．牛馬谷量，器[87]械山積，國業

と考えるかである．我々は，ここを連続させるシュレーゲル本と違って，さらに 4 文字のスペースを入れるべきだと考える．その根拠は，この第 11 行の上方に見える第 4 代と第 5 代の可汗の事績が，四字句二つずつで片付けられていることである．問題の第 6 代可汗も含め，この 3 人はいずれもマニ教史にとっては重要でない人物（というよりむしろ牟羽可汗がクーデタによって倒されて以後の，マニ教迫害時代の可汗たち）であり，第 6 代のみが四字句一つ分しか与えられないいわれはない．句作りのバランスから考えても，四字句二つあったと考えてよかろう．この推定は，第 2 節で述べたように，我々がビチェース報告書の断片 No. 5 の位置比定を確定したことによって疑問の余地がなくなった．

(75) 阪大拓本では「百」の残画が見える．つまり森安／吉田／片山 1999 の断片 No. 5 とアトラス拓影の XXXIV-1 とはこの「百＋姓康樂」の箇所でぴたりと接合するのである．

(76) 少なくともここに 1 文字の空格が必要であるが，2 文字空格の可能性もある．

(77) 「最」は異体字の「𢿱」である．

(78) 「信」字を補うのは，Chavannes / Pelliot 1913, pp. 192–193 による．直前にある残画は「親」字の上端と矛盾しないので，この読みを支持すると思われる．ペリオは別の箇所で親信官をウイグル語の ïnanč に充てているが［Pelliot 1914, p. 234, fn. 2］，その方向性は正しかろう．ïnanč は動詞 ïnan-「信頼する」より派生した実詞であり，「信頼；信頼に値する」の意であるが，突厥・ウイグルではそれなりの高位者の称号としても使われている．ただしルーン文字碑文では称号の場合には ïnanču / ïnančï という形でも現われ［cf. Clauson 1972, p. 187］，それに対応する漢字音写としては伊難殊／伊難支や本 KB 碑文の伊難主が知られているので，やはり親信官は ïnanč よりは ïnanču / ïnančï と見なす方がよかろう．ソグド語版 3 行目には ’l-p’yn’ncw という表記があるから，確かに ’yn’ncw が在証される．

(79) 「賢人」は羽田の推定であるが［羽田 1957a, p. 313］，「賢」については羽田以前に既にドヴェリア本（p. XXXI）・王国維本・羅振玉本でもそのように読んでいる．

(80) 和林録では「入」，ドヴェリア本（p. XXXIII）・王国維本・羅振玉本では「大」である．

(81) ママ．以下の 14, 17, 18 行目も含め，本碑文には「与」が 4 回現われる．ただし 7, 11 行目では「與」が使われており，両者が併存している．この点は，和林録・野村本・王国維本・羅振玉本は正しいのに，かえって活字印刷の許本・シュレーゲル本・羽田本が全て「與」に作って誤解を招いている．

(82) 和林録・許本・シュレーゲル本は「可持」とし，ドヴェリア本（p. XXXI）・王国維本・羅振玉本・羽田本は「竒特」とする．もちろん，後者が正しい．

(83) 和林録では欠字であるが，ドヴェリア本（p. XXXI）・王国維本・羅振玉本では「雄」である．残画が 14 行目第 4 字の「雄」の上端とほぼ同じに見えるので，疑いない．羽田本の「達」ではありえない．

(84) 「神」はシュレーゲル本の推測に従う．

(85) 王国維本によって「爲」を補う．阪大拓本の残画とも矛盾しない．

(86) 実際には残画は右半分だけであるが，シュレーゲルはおそらく同じ字が 5 行目にも見えると考えて復元したのであろう．その意味は「四十」であり，シュレーゲルが正しかったことは，ソグド文第 18 行［cf. 吉田 1988, p. 39; 本稿附録 1］から確認される．

(87) ドヴェリア本（p. XXXI）は「器」とするが，Société Finno-Ougrienne 1892, Inscriptions de l’Orkhon の pl. 53 と pl. 54 の原碑の写真を精査してもここは欠落しているから，推補したにすぎない．一方，シュレーゲル本は「仗」と推測する．ここではドヴェリアの推測に従う．

蕩盡，地無居人．復，葛禄[88]与吐蕃連衡○○天可汗〓以[89]偏師於匀曷戸對敵．智謀弘遠，
〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓

15） 〓北庭[90]半収，半圍之．次○○天可汗親統大軍，討滅元兇，却復城邑．〓[91]土黎庶，含氣之類，純善者撫育，悖戻者屏除．遂〓〓〓〓〓〓〓狐媚磧[92]．凡諸行人，及於畜産[93]〓〓
〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓

16） 〓甲冑[94]遺弃[95]．復[96]，吐蕃大軍，攻圍龜茲．○○天可汗領兵救援．吐蕃〓[97]〓奔入于術．四面合圍，一時撲滅．屍骸臭穢，非人〓〓．〓〓〓山，以爲京觀．敗没餘燼，〓〓〓〓〓〓
〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓

17） 〓〓〓百姓与狂寇[98]合從，有虧職貢．○○天可汗躬惣師旅，大敗賊兵[99]，奔逐至真珠河．俘掠人民[100]，萬萬有餘．駞馬畜乘，〓〓〓〓[101]．〓進部〓，餘衆來歸．〓〓〓〓〓〓〓

---

(88) カルルクはこの字の通り 2 文字の「葛禄」であり，葛邏禄ではない．この事実が持つ意義については，吉田 2007, p.p. 51–52 を参照されたい．

(89) 阪大拓本によれば第 16 行第 52 字の「以」と左半分は一致する．『四庫全書』をコンピュータ検索した結果によると，「偏師」の直前に来る文字で，且つ画数の少ないものとしては「以」が圧倒的に多いことと併せて，ここは「以」とみて間違いなかろう．その直前の 1 字には「率いる」などを意味する動詞が入っていたのであろう．

(90) ここに有名な地名「北庭」が来るべきであると最初に推測したのはワシリエフであるが［Wassiljeff *apud* Radloff 1895, p. 289］，それと同じ見解を示したシュレーゲル本が流布して以来，誰もそれを疑っていない．歴史学的に見ても，それは妥当である．京大拓本では，「北」字の最下端の残画があるような気もするが，確実ではない．ド=ラコスト拓本では完全につぶれている．

(91) ドヴェリア本（p. XXXI）は「率」とするが，Société Finno-Ougrienne 1892, *Inscriptions de l'Orkhon*, pls. 53–54 の原碑の写真を精査してもここは欠落しているから，推補したにすぎない．一方，シュレーゲル本は「食」を補う．森安 2003, figs. 1 & 2 ではドヴェリアと同じく「率」と推補したが，今はそれを撤回して不明のままとする．

(92) 狐媚磧：「媚磧」の前に「狐」を補って「狐媚磧」と最初に復元したのは華濤・陳得芝両氏の功績であり，林／陳／王本もそれに従う［cf. 林／陳／王 1999, pp. 155, 165; 華濤 2000a, p. 6］．にもかかわらず，林／陳／王本では，これまで位置不明とされてきた「狐」の字が残る 1 小断片，すなわち森安／吉田／片山 1999, pp. 213–214 の断片 No. 5 が，二つの大断片，即ちアトラス拓影の XXXI と XXXIV-1 との間にぴたりと納まることには気付いていない．これに初めて気付いたのは我々であり，それによって新たに 10 文字以上が我々のテキストに加えられた．それだけでなく，この小断片の位置比定が可能になったことで，二つの大断片の間のスペースが従来の考えより少なくとも 4 文字以上大きいことが明らかになり，他の箇所においてもそれぞれの文脈による復元が容易になった．

(93) 王国維本・羅振玉本では「産」とし，羽田本では「産」か「乗」であるとする．

(94) 王国維本・羅振玉本による．「冑」は下半部の「月」のみ残っている．

(95) 「棄」の避諱字．唐の太宗李世民の諱を避けて，「棄」の替わりにこの字が使われているのである．

(96) 林／陳／王本では「後」と読むが，京大拓本では「復」と見えるから，羅振玉本や王国維本を疑う必要はない．

(97) 和林録・許本・野村本・王国維本・羅振玉本はいずれも欠字にする．上端に残画があるが，シュレーゲル本の「落」ではありえない．Chavannes / Pelliot 1913, p. 178, fn. 1 では「事」の残画ではないかとする．林／陳／王本では「夷」と読み，後続の第 27 字と併せて「夷滅」と推定復元する．森安も「亠」らしき部分だけは認めてよいと思うが，適当な文字を推補できない．なお，森安 2003, figs. 1 & 2 では「畜」と推補したが，今はそれを撤回して不明のままとする．

(98) 「寇」は異体字「寇」である．

(99) 「兵」はシュレーゲルの推測による．

(100) 「民」には欠筆あり．李世民の民を避諱．ただし 20 行目第 29 字の「民」は欠筆していない．この点は

〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓

18）〓〓〓(102)〓知罪咎，哀請祈訴．〇〇天可汗矜其至誠，赦其罪戻．遂与其(103)王，令百姓復業．自茲已降，王自〇朝覲，進奉方物．〓〓〓〓〓〓〓廂(104)沓實力〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓

19）〓〓〓〓〓軍，將供奉官，並皆親覩．至於賊境，長駈横入，自將數騎，發(105)號施令，取其必勝，勍敵畢摧．追奔逐北，直至大食(106)國〓〓〓〓〓〓有餘〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓

20）〓〓〓〓〓攻伐葛禄・吐蕃，搴旗斬馘．追奔逐北，西至抜賀那國．剋(107)獲人民，及其畜産．葉(108)護爲不受教令，離其土壤．〓〓

21）〓〓〓〓〓〓〓黒姓(109)毗伽可汗．復，與歸順葛禄，册真珠智惠葉(110)護，爲主(111)．又十箭三姓突騎施(112)〓〓

22）〓〓〓〓〓〓〓〓〓寺宇，令僧徒寛泰，聴士安樂．自開法來，悶〓闇名(113)，未曾降伏〓〓〓

23）〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓中〓有〓〓〓〓〓世之土，中外國〓，〓〓委付，〓〓里〓〓〓〓〓〓

既に Chavannes / Pelliot 1913, p. 178 に指摘されている．

(101) この 4 字分に対しシュレーゲルは「不可勝計」と推測する．我々も意味としてはほぼ同様に考える．

(102) 林／陳／王本では，ソグド語版を参照してここに「龜茲王」を補ったというが，吉田豊のソグド語版にそれに対応する箇所はなく，とうてい容認できない．

(103) シュレーゲルの推補に従う．

(104) 「廂」の前にシュレーゲルは「左右」を推補する．

(105) ドヴェリア本・シュレーゲル本ともにこの字を推補する．

(106) ソグド文によって「大」の後ろに「食」を補う．さらにこの「大食」の後に「國」もあったとみられる．これらのアイディアは吉田豊による［吉田 1988, p. 28; Yoshida 1990, p. 119］．

(107) 王国維本・羅振玉本では明確に「剋」としている．拓本の残画も完全にそれを支持する．羽田本はやや奇妙である．

(108) 「葉」は李世民の「世」字を避諱して唐代に頻用される異体字を使用している．

(109) シュレーゲル本では「九姓」とするが，王国維本・羅振玉本では「黒姓」とする．アトラス拓影からも「黒姓」の読みは支持される．林／陳／王 1999, p. 166 では「黄姓」とすべきと主張するが，従えない．

(110) 前行と同じく，李世民を避諱して特殊な字を使用している．

(111) 和林録のみ「王」とする．

(112) 「突騎施」は羽田本による．王国維本・羅振玉本では 2 文字目の旁の残画として「奇」を採録しており，この箇所に対応するソグド文第 20 行目には「十の矢における三つのトゥルギシュ」とある［cf. 吉田 1988, pp. 40, 48］から，この復元は確実である．ただし同じ箇所を本稿の附録 1 では「10 の矢の 3 つのトゥルギシュ（＝十箭三姓突騎施）」と和訳している．その意味は「十箭（＝西突厥）出身の三姓（＝三部族）で構成されるトゥルギシュ」である．

(113) この 4 文字についてペリオは 1 文字目を「聞」，3 文字目を「闇」と読み，「闇」の前に「慕」を補って「慕闇の名を聞く」とすべきかと言いつつも，10 行目の慕闇の前のように尊敬の空格がないことを訝っている［Pelliot 1929, p. 249, fn. 1］．

24) 武定禍

25)

26)

27)

28)

29)

30)

31)

32)

33)

34)

5. 漢文テキストの書き下しと英訳

凡　例

①～⑧　Succession order of the Uighur qaghans ウイグル可汗の継承順位.

[words]　Translation of the restored parts. 推定復元した箇所の翻訳.

(words)　Words not in the text but added to improve the English, or explanatory remarks by the editors. 翻訳を分かり易くするために原文に補った箇所，あるいは翻訳者による説明や言い替え.

[…]　Damaged, illegible, or incomprehensible part which is short. 短い欠損部.

[… …]　Damaged, illegible, or incomprehensible part which is considerably long to make it impossible to restore the context. 文脈がとれないほど長い欠損部.

§1 (lines 1–2)：碑題と碑文撰者

01 九姓迴鶻愛登里囉汨没蜜施合毗伽可汗聖文神武碑，并びに序．内宰相頡于伽思藥羅［杚］〓〓，［… … 頡于伽］思合伊難主莫賀［達干，… … 02 莫］賀達干，紆伽哩伽思［跂］，紆伽［…］莫賀達干，紆［伽］迭億也［… …］，［… …］.

§1 (lines 1–2): Title of the inscription and its composers

01 Inscription accompanied by a preface dedicated to the qaghan who is wise like a saint and brave like Mars (by the name of) Ay Tangridä Qut Bulmiš Alp Bilgä of the Uighurs (representing) Nine Tribes (= Toquzoghuz).

(Composed by) the prime minister of the inside, (i.e. royal court, with the title of) *il ögäsi* (named) Yaghlaqar [...], [*il ögä*]*si* of [Oghuz? (tribe)] (named) Alp Inanču *baγa* [*tarqan*, ... 02 *ba*]*γa tarqan*, Ögälig Sïqïr(?), Ögä [...] *baγa tarqan*, Ö[gä] *die-yi-ye*[... ...], [... ...].

§2 (line 3)：導入部

03 聞くならく，夫(そ)れ乾坤開闢し，日月照臨し，受命の君は，天下に光宅す．徳化は昭明にして，四方より輻湊し，［…］，八表は仁に歸す．［…］

§2 (line 3): Introduction

03 We have heard as follows: Since the universe was created, the sun and the moon have been shedding light on the entire world. (In the same way) the ruler, who has received the mandate of Heaven, illuminates the whole world. When his edification is splendent, the people themselves will come to pay homage to him from all quarters of the world. [...] From every quarter of the remotest world come the inhabitants to submit to his benevolence. [...]

§3 (lines 3–4)：ウイグル帝国建国以前の歴史

［… …］，山河を表裏として，中に都を建つ．［… …］04 國を北方の隅に襲い，都を嗢崑(オルコン)の野に建

つ．明智を以て國を治め，積みて歳年有り．子の［…］位を嗣ぐに，天生英斷にして，萬姓は賓伏す．［… … 可］汗在位し，百姓を撫育すること，［…］の若し．［… …］

§3 (lines 3–4): History of the Uighur rulers before the Uighur qaghanate

[... ...] (One of our ancestors) founded the capital of their country, with rivers (flowing) in front and mountains (rising) behind. [... ...] 04 (Another one of our ancestors) came to possess the country in the northern part of the world and founded its capital on the plain of Orkhon. He ruled the country for a number of years with his brilliant wisdom. (Later) his son (by the name of) [...] succeeded to the throne. By nature, he possessed the excellent ability to decide and judge matters, (so that) all the other tribes tendered their submission to him. [... ...] While the qaghan was on the throne, he nurtured his people with benevolence just as [... ...].

§4 (lines 4–6)：ウイグル帝国建国と初代・第 2 代可汗

［… … 阿］05 史那革命す．數歳の間，復た我が舊國を［得］たり．時に九姓迴鶻・卌姓拔悉蜜・三姓［葛禄］（および）諸異姓は僉な曰く，「前代に中興せし可汗は並な是れ［… …］高祖の①闕毗伽可汗に至る．［… … 子の②登里］06 囉没蜜施頡翳德蜜施毗伽可汗，嗣位す．英智［…］經營．

§4 (lines 4–6) Foundation of the Uighur qaghanate and the first two qaghans

05 During several years after the [A]shina clan was deprived of its celestial mandate, (our ancestors) [recovered] our original country. At that time, the Uighurs (representing) Nine Tribes (= Toquzoghuz), the Basmils (consisting) of forty tribes, the [Qarluqs] (consisting) of three tribes, and other various tribes said with one voice: “Previously, when (our ancestors) restored our rule, the qaghans were all [... ...” In this way the qaghanship] came to the founder of the empire (by the name of) ① Köl Bilgä Qaghan. [... ... His son ② Tängri]06dä Bolmïš Il Itmiš Bilgä Qaghan succeeded to the throne. (With his) excellent wisdom [... (the qaghanate was)] well managed.

§5 (lines 6–7)：第 3 代牟羽可汗の即位とその事績（1）

子の③君登里囉汨没蜜施頡咄登蜜施合俱録〓〓［毗伽］可汗，嗣位す．［…］奇特異常なり．宇内の諸邦は，欽伏自〓．［…皇］帝蒙塵して，史思明［の子の朝義は … …］07 使いし，幣は重く言は甘くして師を乞い，力を併せて唐社を滅ぼさんと欲す．可汗は彼の恩に孤き神器を竊弄せんことを忿り，親ら驍雄を統べ，王師と犄角し，合勢して齊駈し，京洛（＝洛陽）を剋復す．皇帝［… …］兄弟の邦と爲り，永に［…］爲らんとす．

§5 (lines 6–7): The third qaghan Bögü and his achievements (1)

His son ③ Kün Tangridä Qut Bulmïš Il Tutmïš Alp Külüg [... Bilgä] Qaghan succeeded to the throne. [Since he was ...] wonderful and distinguished, all the countries in the world submitted themselves humbly to him. [When the Chinese] emperor was forced to evacuate (the capital), 史思明 Shi Siming’s [son (by the name of) Zhaoyi 朝義 ... ... sent] 07 an ambassador, who pleaded by means of (Zhaoyi’s) rich presents and

honeyed words for the dispatch of troops to join forces (with them), (because) he (= Zhaoyi) wished to overthrow the foundations of the state of Tang. The qaghan was outraged by his ingratitude for (Chinese) imperial favour and by his intention to steal and abuse the imperial regalia (i.e., to usurp the throne). Taking personal command of his brave cavalrymen, the qaghan took part in a joint combat operation with the (Chinese) emperor's forces, and advancing with united strength he recaptured the capital of Luoyang (*jing-luo* 京洛). The Chinese emperor [was delighted ... ...] they (= Uighur and China) became brother states and became [...] eternally.

§6 (lines 7–8)：牟羽可汗の事績（2）＝マニ教導入（1）

可汗は乃ち軍を東都に頓し，因りて觀風して［… … 法］08 師は睿息ら四僧を將いて入國し，二祀を闡揚し，三際に洞徹す．況んや法師は明門に妙達し，七部に精通し，才は海岳より高く，辯は懸河の若し．故に能く正教を迴鶻に開く．［… … 應］對して法の爲に大いなる功績を立て，乃ち（法師？は）黙俟悉德と［爲る］．

§6 (lines 7–8): Bögü qaghan's achievements (2) = Introduction of Manichaeism to Uighurs (1)

Thereupon, the qaghan stationed the army in the eastern capital (*Dong-du* 東都 = Luoyang). On that occasion the qaghan observed the people's lives (there) [... ...]. 08 A master [of the law by the name of ...] brought four monks headed by Ruixi 睿息 to our country. They clearly showed (the doctrine of) the two sacrifices and were thoroughly acquainted with (the teaching of) the three times, to say nothing of the master of the law, who was marvelously learned in the Doctrine of Light (*Ming-men* 明門 = Manichaeism) and understood the seven scriptures (*qi-bu* 七部) perfectly. His abilities were deep like an ocean and high like a mountain, while his eloquence was like a torrent. That is why they were able to propagate the right teachings (*zheng-jiao* 正教 = Manichaeism) in the land of the Uighurs. [... ...] what he [did] for the religion, i.e., his great accomplishment and accumulation of merit [made] him (= the master of the law?) a *mahistag* ([黙]俟悉德 = presbyter).

§7 (lines 8–10)：牟羽可汗の事績（3）＝マニ教導入（2）

時に都督・刺史・内外宰相らは［… …］「［… …］09 今は前非を悔い，正教に事えんことを願う」と．旨を奉ずるに宣示すらく，「此の法は微妙にして，受持す可きこと難し」と．（都督・刺史・内外宰相らは）再三懇請すらく，「往者は識る無く，鬼を謂いて佛と爲す．今や已に真を悞り，復び事える可からず．特だ（＝ひたすら）［…］を望む」と．（可汗は）曰く，「既にして志誠有り，即ち應有刻畫魔形を持賫して，悉く焚爇せ令むるに任す．神を祈り鬼を拜するは，並な［…］（中止せよ）」と．［… …］10［… …］明教を受け，薫血の異俗は化して蔬飯の郷と爲り，宰殺の邦家は變じて勸善の國と爲れり．故に［…］の人に在りては，上行なえば下效いたり．法王は（ウイグルが）正教を受けたるを聞きて，深く虔〓を讃え，［… …］，黙俟悉德は諸僧尼を領して，入國し闡揚す．自後，慕闍と徒衆は東西に循環し，往來して教化す．

§7 (lines 8–10): Bögü qaghan's achievements (3) = Introduction of Manichaeism to Uighurs (2)

At that time, the governors-general (*dudu* 都督, Uig. *totoq*), the prefects (*cishi* 刺史, Uig. *čigši*), the internal and external ministers [... ... begged and requested, saying]: "[... ...] 09 Now we repent of our former faults and desire to serve the right teachings." An edict (of Bögü Qaghan was issued and it) announced the following proclamation: "This law is subtle and marvelous and it is difficult for you to accept and observe it." (But) twice and thrice they begged and requested, saying: "In the past we were ignorant and regarded (evil) spirits as deities. Now that we have accepted the truth, we can no longer serve these spirits. Single-mindedly we wish [...]." (The qaghan) said: "Now that you have resolve and sincerity (towards Manichaeism), I entrust you to go immediately and fetch whatever sculptures, paintings, and images of demons you have and to have them burnt and cremated. Both praying to ghosts and worshipping (evil) spirits [(ought to be abandoned by you?) ...]." [... ...] 10 since they accepted the Teaching of Light (*ming-jiao* 明教), their barbarous practices full of bloodshed changed and their state became a country of vegetarians; the country where cattle were slaughtered was transformed into a place where good deeds were encouraged. Therefore, as for the people under [the right teachings?], when those above practiced (what is good), those below imitated it. When the lord of the law (法王 = *archegos* in Babylon) heard that the Uighurs had accepted the right teachings (*zheng-jiao* 正教 = Manichaeism), he strongly praised their pious [... ...] (Another?) *mahistag* (= presbyter) led monks and nuns into the country of the Uighurs and elucidated the Manichaean teaching clearly. Thereafter, the Teacher (*možak*) and his disciples traversed the land in all directions from east to west, and shuttling (between the Uighurs and their homeland) they edified the people.

§8 (lines 10–11)：第 4 代～第 6 代可汗

［牟羽可汗崩後，④合汨咄禄毗 11 伽］可汗，襲位す．雄才勇略にして，内外脩明す．子の⑤登里囉没蜜施倶録毗伽可汗，嗣位す．國俗を治化し，頗(すこぶ)る次序(しじょ)有り．子の⑥汨咄禄毗伽［可汗，嗣］位す．［…］，百姓康樂なり．

§8 (lines 10–11): The fourth, fifth, and sixth qaghans

[When Bögü Qaghan passed away, ④ Alp Qutluγ Bil11gä] Qaghan succeeded to the throne. He was brave and valiant, talented and astute. (During his reign) the country was well organized both inside and outside. His son, ⑤ Tängridä Bolmïš Külüg Bilgä Qaghan, succeeded to the throne. He governed the country and civilized the people, and in the country there was much order. His son, ⑥ Qutluγ Bilgä [Qaghan, succeeded to the throne. ...] all the people were peaceful and contented.

§9 (lines 11–12)：第 7 代懐信可汗と第 8 代保義可汗の後継指名

崩じたる後，⑦登里囉羽録没蜜施合汨咄禄胡禄毗伽可汗，継承す．［…］（その当時）⑧［愛登里囉汨没蜜 12 施］合毗伽可汗は龍潜の時に當り，諸王中に最長たり．都督・刺史・内外宰相・親信

官等奏して曰く，「天可汗よ！寶位に垂拱せんとすれば輔弼には須(すべから)く賢人を得べし．[… …]（彼すなわち後の保義可汗の）佐治の才たるや海岳の量あり．國家の體大たれば，法令は明なるを須(も)とむ（or 須く明たるべし）．特(た)だ天恩もて臣等の請う所を允(ゆる)さんことを望む」と．[… …]

§9 (lines 11–12): The seventh qaghan Huaixin and the appointment of Baoyi as his successor

After he (= the sixth qaghan) passed away, ⑦ Tängridä Ülüg Bulmïš Alp Qutluγ Uluγ Bilgä Qaghan succeeded to the throne. [At that time, ⑧ Ay Tängridä Qut Bulmï$_{12}$š] Alp Bilgä Qaghan was still “a dragon under water,” and he was the eldest among all the princes. The governors-general (*dudu* 都督, Uig. *totoq*), the prefects (*cishi* 刺史, Uig. *čigši*), the internal and external ministers, and chamberlains submitted a request to the qaghan (saying), “O Heavenly Qaghan! When (an emperor) remains (seated on) his jewelled throne with his robe trailing and his hands folded, he needs a wise [man] who assists and supports (the emperorship). [... ...] (The eighth qaghan’s) competence to help (you) govern the state is as enormous as an ocean or a mountain. As our state is of gigantic structure, (in order to govern it properly) its laws and rules ought to be clearly organized. We earnestly wish you to fulfill with your heavenly favour what your subjects entreat you to do.” [... ...]

§10 (lines 12–13)：第 7 代懐信可汗の即位前の事績（1）

［天 $_{13}$ 可］汗宰衡の時，諸相と殊に異なれり．降誕の際爲(た)るや，禎祥は奇特たり．幼き自(よ)り長ずるに及び，英雄・神武たりて，坐して帷幄の下に籌(はか)り，勝を千里の外に決す．温柔にして惠化し，撫［育… …］，世の爲(ため)に則(のり)を作り，國の爲に經營すること，算(かぞ)うるも能く紀(しる)す莫(な)し．

§10 (lines 12–13): The seventh qaghan’s achievements before mounting the throne (1)

When [the Heavenly $_{13}$ Qa]ghan (= the seventh qaghan) was prime minister, he was matchless and unparalleled among all the ministers, for he was born with an extraordinary auspicious sign. From boyhood to adulthood he was excellent, heroic, and brave like Mars. He planned strategy while sitting in the headquarter camp and won a victory in a battle a thousand miles away. He was a warm and mild-minded man who subjugated the (defeated) people with grace. With benevolence he [governed ... ...]. He established rules for the public and laboured for state affairs. (Therefore,) were one to count up (his achievements), it would be impossible to list them exhaustively.

§11 (lines 13–14)：第 7 代懐信可汗の即位前の事績（2）

初め北方の堅昆の國は，控弦卌餘萬あり．彼［… …］$_{14}$ 英雄の智勇あり，神武の威力あり，一たび發すれば便ち中(あた)る．堅昆の可汗，弦に應(あた)りて殂落せり．牛馬は谷量にして，器械は山積し，國業は蕩盡して，地に居人無し．

§11 (lines 13–14): The seventh qaghan’s achievements before mounting the throne (2)

Firstly, in the land of Khirghiz, which is situated in the north, there were more than 400,000 (cavalry) archers, and their [... ...] $_{14}$ Being excellent and heroic, clever and courageous, and having formidable power

like brave Mars, once he (= the Heavenly Qaghan) shoots an arrow, it never fails to hit its target. The Khirghiz qaghan was shot (by the Heavenly Qaghan) and perished. The (looted) cattle and horses were so numerous as to fill a valley, while the (looted) arms and weapons are so numerous as to form a mountain. The national resources of the Khirghiz state were exhausted completely and the land became uninhabited.

§12 (lines 14–16)：第 7 代懐信可汗の即位前の事績（3）

復た葛禄は吐蕃と連［衡］すれば，天可汗は偏師を以て匀曷戸にて對敵す．智謀弘遠にして，［……］15 北庭をば半ば収め，半ば之を圍む．次いで天可汗は親ら大軍を統べ，元兇を討滅し，城邑を却復す．〓土の黎庶や含氣の類は，純善者をば撫育し，悖戻者をば屏除す．遂に［……］狐媚磧．凡そ諸行人，畜産に及び［……16 甲］冑は遺弃さる．

§12 (lines 14–16): The seventh qaghan's achievements before mounting the throne (3)

Secondly, when the Qarluqs [concluded] an alliance with the Tibetans, the Heavenly Qaghan [led] only a part of the (entire Uighur) army and was confronted with the enemy at Yunhehu (匀曷戸). Since he (= the Heavenly Qaghan) was extremely wise in planning strategy [... ... Arriving in the region of] 15 Beiting (北庭 = Biš-Balïq), he (= the Heavenly Qaghan) occupied one half while besieging the other half. Later, personally commanding his great army, the Heavenly Qaghan defeated and overthrew the great evil and won the walled city (= 北庭) back. As for the ordinary inhabitants and the other living beings of the [...] land, he (= the Heavenly Qaghan) nourished and nurtured the honest and innocent while eliminating the dishonest and malicious. In the end [... ... up to(?)] the Humei desert (狐媚磧). All the travellers and the livestock [... ...] 16 [... suits of] armour and helmets were disposed of and abandoned.

§13 (line 16)：第 7 代懐信可汗の事績（1）

復た吐蕃の大軍は龜茲を攻圍す．天可汗は兵を領して救援するに，吐蕃は［…］して于術に奔入す．四面より合圍して，一時に撲滅したれば，屍骸は臭穢にして，人の［…］するに非ず．［…］山，以て京觀を爲る．敗没せる餘燼は，［……］

§13 (line 16): The seventh qaghan's achievements (1)

Again, a large army of Tibetans besieged Kucha. The Heavenly Qaghan led the soldiers (there) in order to relieve it (= the city of Kucha). Then, the Tibetans [...] fled to Ushu (于術). He (together with his army) surrounded them (= the Tibetans) from four sides and annihilated them at one time. Their corpses were so foul-smelling and horrible that one could not [bear? ... When they were gathered together, their corpses were] mountainous, and so a huge mound of corpses covered with soil was constructed as a monument (of his victory). The rest (of the enemy soldiers) who had been captured and remained alive [... ...]

§14 (lines 17–18)：第 7 代懐信可汗の事績（2）

［……］17 百姓は狂寇と合從し，職貢を虧く有り．天可汗は躬ら師旅を惣べ，大いに賊兵を敗

れば，奔逐して真珠河に至る．人民を俘掠すること，萬萬有餘あり．駝馬畜乘は，［…］進部［…］餘衆は來歸す．［… …］18 罪咎を知り，哀請・祈訴す．天可汗は其の至誠を矜み，其の罪戾を赦す．遂に其の王と与に，百姓をして業に復せ令む．茲れ自り已降，王は自ら朝覲し，方物を進奉す．［… …］廂沓實力［… …］

§14 (lines 17–18): The seventh qaghan's achievements (2)

17 [...] The inhabitants (of the Tarim Basin?) allied with the crazy enemy (in the north) and refused to deliver a tribute (to us). Commanding the whole army, the Heavenly Qaghan himself defeated the rebel soldiers. Chasing and pursuing them, he arrived at the Pearl River (= Syr Darya). He took the local people as captives, more than tens of thousands in number, [while the number of] captured camels, horses, and carts with pack animals [was innumerable. ...] *jin* (進) *bu* (部) [...] the other people came to submit (to us). [... ...] 18 [...] Acknowledging their crimes and offences, they imploringly pleaded and petitioned for pardon. The Heavenly Qaghan showed compassion for their sincerity and forgave their crimes and offences. Eventually, the Heavenly Qaghan helped the kings (of the Tarim Basin?) to bring the people back to their own occupations. Ever since then, the kings have visited the (Uighur) court in person and brought tribute (to the Qaghan) [... ...] Tashili (沓實力), the [right/left] wing (of the Qarluq tribe) [... ...]

§15 (line 19)：第 7 代懐信可汗の事績（3）

［… …］19 軍，供奉官を將い，並びに皆な親覩す．賊境に至り，長駈して横入し，自ら數騎を將い，號を發して令を施せば，其の必勝を取り，勍敵は畢く摧かる．追奔して逐北し，直ちに大食國に至る［… …］有餘［… …］

§15 (line 19): The seventh qaghan's achievements (3)

19 [... When he (= the Heavenly Qaghan) departed with his] army, he led his entourage and inspected them (= soldiers) personally. When he (= the Heavenly Qaghan) reached the enemy's territory, he rode deep into it unrestrictedly. Leading a few cavalrymen by himself and issuing commands, he did not fail to win a victory, (while) the formidable enemy was completely crushed. Pursuing the defeated enemy who were taking flight, he (= the Heavenly Qaghan) directly arrived at [the land of] the Ta[jiks ... ...] more than [... ...]

§16 (lines 20–21)：第 7 代懐信可汗の事績（4）

［… …］20 葛禄・吐蕃を攻伐し，搴旗し斬馘す．追奔して逐北し，西のかた拔賀那國に至る．人民及び其の畜産を剋獲す．葉護教令を受けざる爲に，其の土壤を離る．［… …］21 黒姓の毗伽可汗［…］．復た歸順せる葛禄の與に，真珠智惠葉護に册して主と爲す．又た十箭・三姓突騎施［… …］

§16 (lines 20–21): The seventh qaghan's achievements (4)

20 [... ... (the Heavenly Qaghan)] attacked the Qarluqs and the Tibetans, snatched their banners, and beheaded them. Pursuing the defeated enemy who were taking flight, he advanced westward and arrived in the country of Ferghana. He captured their people and livestock. Since the Yabghu (= the leader of the

Qarluqs) did not follow the teaching and instruction he left his country. [... ...] 21 [... ... (The Heavenly Qaghan selected)] Bilgä Qaghan of the Black Turgish tribe, [...] and moreover, in order to entrust him with (the care of) those Qarluqs who had submitted themselves, he appointed him as their ruler with the title of Inčü Bilgä Yabghu. Furthermore, Turgish consisting of three tribes and belonging to the Ten Arrows [... ...]

§17 (line 22)：第 7 代懐信可汗の事績（5）

［… …］22［… …］寺宇［…］，僧徒をば寛泰に，聴士をば安樂にせ令む．法を開きし自(よ)り（以）来，悶〓闇名は未だかつて降伏せざるも［… …］

§17 (line 22): The seventh qaghan's achievements (5)

22 [... ... (The Heavenly Qaghan restored)] the (Manichaean) temples and made the elects relieved, so that the auditors lived in ease and comfort. Since the time when the (Islamic?) religion was founded, it has never been (heard) that a caliph has surrendered to [... ...]

§18 (lines 23–24)：？？

［… …］23［… …］中〓有［…］世之土，中外國［…］委付，［…］里［… …］24［… …］武定禍［… …］

§18 (lines 23–24): ??

(... untranslatable disjoined characters ...) 23 [... ...] inside [...] there is [... ...] the ground of the world. The countries inside and outside [... ...] entrusting [...] miles [... ...] 24 [... ...] with arms (he) overcame the calamity [... ...]

6. 訳註

以下，見出しの数字は，碑文における語句の出所を示す．コロン（：）に先行する 2 桁は碑文の行数，後続する数字は当該行内における語句の位置（行頭から何文字目か）を表わす．本稿附載の縦書き移録文も参照．

01:01–04，九姓迴鶻：ここの「九姓迴鶻」と同様の「九姓回鶻」で始まる可汗号表現が，『唐大詔令集』巻 129 所収の「大中十一（857）年冊回鶻可汗文」に見えている．冊立の対象者は，東ウイグル帝国滅亡後に安西地区に移住して西ウイグル王国の基礎を固めて可汗となった龐テギンであり，彼に対して「九姓回鶻嗢禄登利邏汨没密施合俱録毗伽懐建可汗」，すなわち九姓回鶻の uluγ tängridä qut bulmïš alp külüg bilgä（おおいなる天より恩寵を見つけし，勇敢にして名高く賢き）懐建可汗という称号が贈られている．このときの正副の冊立使は王端章と李潯であった［cf. 森安 2015a, p. 287 & fn. 11］．ただし注意すべきは，「九姓回鶻」を「9 姓から成るウイグル」と理解すべきではない点である．西ウイグル王国時代の古ウイグル文書には on uyγur ili ないし on uyγur ili ulušï という呼称が頻出するが，これらは「10（の部／氏族から成る）ウイグルの部氏族連合国家」という意味であるから［cf. Moriyasu 2019, COUL no. 173 = Ch/U 3917, Commentary, *17, 20) on uyγur*

ilintä］，本来の狭義のウイグル集団は「十姓回鶻」なのである．言うまでもなくその十姓の筆頭が王族の薬羅葛氏である．然らば本碑文や『唐大詔令集』の「九姓回鶻」は何かと言えば，それは「九姓」すなわち「九姓鉄勒」に属する「回鶻」という意味なのである．実際に東ウイグル帝国は，「九姓（鉄勒）」というトルコ系の大きな集団に属する「回鶻」が「九姓（鉄勒）」全体を率いて建国した部族連合国家なのである．漢文史料に頻出する「九姓（鉄勒）」の原語は古代トルコ語諸碑文に見られる Toquz Oγuz トクズオグズである．東ウイグル帝国はまさしくウイグルが率いる九姓＝ Toquz Oγuz の国なのであり，そのため西側のイスラム史料では，東ウイグル帝国がトクズオグズの転訛であるトグズグズ／タガズガズ（ تغزغز Tughuzghuz ~ Taghazghaz）と呼ばれただけでなく，引き続き西ウイグル王国も同じ名前で呼ばれることとなったのである．一方，東側の漢文史料では西ウイグル王国が「九姓」と呼ばれることは絶無であり，たいていは「回鶻／迴紇」の名で呼ばれている．なお，「九姓」ないし「九姓鉄勒」と「十姓回鶻」の解釈をめぐっては学界でも長らく混乱が見られたが，片山 1981 によって一応の解決が見られた．

01:30–41，内宰相頡于伽思藥羅乞〓〓**：**この「内宰相頡于伽思藥羅乞〓〓」の後ろには少なくとも 2 字分以上の空格があるので，これ全体で 1 人の碑文撰者の称号・人名に相当すると考えられる．漢文碑文の一般的体裁から類推して，これ以下 1–2 行目には，本文の作成者（撰者）や清書人，場合によっては篆額の清書人などの人名がその称号とともに列挙されているはずであるが，ソグド文面と対応させてみても，何人の撰者がいたのかは不明である．しかし「内宰相頡于伽思藥羅乞〓〓」が撰者の筆頭であることは，間違いなかろう．民族名・部氏族名が人名として使われる例は敦煌トゥルファン文書にいくらでも見出されるが，ここでは煩瑣になるので列挙しない．「藥羅乞」の名前を持つ人物が本碑文に現われることの歴史的意義に関する森安の見解は，Bazin 1990, pp. 144–145; 吉田 1988, p. 41 に引用されているが，新たに森安 2015b, pp. 6–7 及び p. 35 の註 10, 13 も参照されたい．

01:60–63，頡于伽思：ソグド文 3 行目［吉田 1988, p. 38; 本稿附録 1］との比較により，確実に「**頡于伽**思」と補える．「思」字だけは *Atlas*, pl. XXXIV-3 でもかなり明らかであり，Chavannes / Pelliot 1913, p. 183 の推定も正しかった．王国維本・羅振玉本では「思」字の下半分の「心」だけを載録している．この部分はヤドリンツェフがロシアに持ち去った碑石断片なので，京大拓本にもド=ラコスト拓本にも欠けている．頡于伽思（イルオゲシ）は「宰相」を意味するウイグル語イル=オゲシ il ögäsi の漢字音写．これでこの 1 行目には 2 人の「頡于伽思（イルオゲシ）」が現われていることになるが，ウイグル帝国宮廷において複数のイル=オゲシ（宰相）が同時に存在し得ることは，保義可汗（在位 808–821 年）時代に完成されたマニ教賛美歌集 Maḫrnāmag の奥書からも既に明らかである［cf. Müller 1913, p. 9; 森安 2015a, pp. 242–243］．

01:64–71，合伊難主莫賀達干：かつてガバインは莫賀達干という称号中の「莫賀」をモンゴル語の baγa「小さい」と結びつけて解釈したが［Gabain 1952, p. 19］，それは無理である．吉田の考えでは，この「莫賀」は，突厥の影響下にあった麹氏高昌国国王の称号に現われる「摩亥」と同じで，ソグド語のブグト碑文に見える mγ’ (maγa) に当たり，後にトルコ語内部で，maγa から baγa

に音韻変化したのであり，本来のトルコ語としての意味はなく，恐らく鮮卑語に遡るのであろう［Yoshida 2000a, pp. 9–11; 吉田 2019b, p. 7］．因みに，今や学界周知の通り，qaγan「可汗」という称号も鮮卑語からトルコ語に借用されたものである．

03:62–04:19：3 行目の「山河を表裏として，中に都を建」てた人物と，4 行目の「國を北方の隅に襲い，都を嗢崑の野に建つ．明智を以て國を治め」た人物とは別人と判断してよかろう．そして「明智を以て國を治め」た後者の子が跡を継いで「可汗」になったという．本節では，恐らくウイグルの本拠がオルホン河流域より北方のセレンゲ河流域にあった 7 世紀の事績が述べられているのであり，問題の 3 人のウイグル君長とは漢籍に見える特健（もしくは時健，称号イルキン）・菩薩（特健の子，薛延陀と組んで強大化，称号イルテベル）・吐迷度（薛延陀を撃破して可汗と自称，唐に朝貢して瀚海都督）・婆閏（吐迷度の子，大イルテベル）・比栗（婆閏の子か姪（おい），称号不明）のいずれかに比定できよう［cf. Gabain 1952, pp. 22–27; 羽田 1957a, pp. 160–174; 佐口 1972, pp. 303–310, 366–371］．王国維は「九姓迴鶻可汗碑跋」において単純に最初の 3 人に比定したが，我々にはむしろ，「山河を表裏として，中に都を建」てた人物を特健イルキンもしくは菩薩イルテベルに，そして「國を北方の隅に襲い，都を嗢崑の野に建つ．明智を以て國を治め，積みて歳年有り」とした人物を，貞観二十（646）年頃に薛延陀を破って可汗と自称したとされる吐迷度に比定し，その子で「天生英斷にして，萬姓は賓伏す．［… … 可］汗として在位し，百姓を撫育」したのが婆閏か比栗であると見なすのがより妥当なように思われる．なお比栗 *pji-l̪ięt は漢籍には比粟毒／比来栗という表記も見られるが，1987 年に出土した「大唐故瀚海都督右領軍衛大将軍経略軍使迴紇府君（迴紇瓊（けい））墓誌銘」に卑栗 *pjię- l̪ięt と書かれていたことにより，比栗が正しいと判明した［cf. 森安 2015b, pp. 10–11］．なおこの漢文の記載に対応する記事は，ソグド語版には見られないようである．

04:90–05:02, 阿史那：シュレーゲル本で「史那」の前に「阿」を補うが，文脈と歴史的事実からみて，ここに突厥の王姓である阿史那を補うことに問題は無い．ただしシュレーゲルや吉田 1988, p. 42 がこの「阿史那」を抜悉蜜（バスミル Basmïl）とみなしたのは考えすぎで，やはり素直に突厥とみなすべきであった．今は吉田もそう考えている．なお漢文史料に頻出する「阿史那」の原語が Ašina ではなく Ašinas であることが，吉田自身によって明らかにされている［cf. 森安／吉田 1998, p. 155; 吉田 2011a, pp. 15–16］．

05:34–39, 前代中興可汗：「前代に中興せし可汗」とは訳註 03:62–04:19 で検討した「可汗」たち，すなわちトルコ民族側から見れば第一突厥帝国と第二突厥帝国の間にある鉄勒優勢時代，唐側から見れば羈縻支配時代のウイグルの君主たちを指すのであろう．

05:89–06:13, 登里囉没蜜施頡翳徳蜜施毗伽可汗：この第 2 代の葛勒可汗（磨延啜）は，領土を拡大し，また唐に対しては安史の乱鎮圧に貢献したにもかかわらず，磨延啜の功績を讃える文言が KB 碑文にほとんどない理由については，森安 2002, pp. 130–132, 138, 150–153 = 森安 2015a, pp. 14–15, 20, 29–31 を参照されたい．一言でいえば，磨延啜はウイグルへのマニ教導入に貢献していなかったから，KB 碑文では顕彰されなかったと考えているのである．

06:26–49, 君登里囉汨没蜜施頡咄登蜜施合俱録〓〓毗伽可汗嗣位：文字註 44 で述べたように，

我々はここに「君」の字を復元した．そしてその「君」に後続する「登里囉汨没蜜施頡咄登蜜施合俱録」はウイグル語の tängridä qut bulmïš il tutmïš alp külüg「天神より恩寵を得た，国を維持した勇敢で名声ある」の音写である．しかるにマニ文字で書かれた中世ペルシア語文書 T II D 135 (= MIK III 6371) に見える牟羽可汗の称号は，uluγ ilig「大王」たる tängridä qut bulmïš ärdämin il tutmïš alp qutluγ külüg bilgä uyγur qaγan「天神より恩寵を得た，男気により国を維持した，勇敢にして天寵あり名声ある賢きウイグル可汗」となっていて［Müller 1912, “Der Hofstaat”, p. 208; J. BeDuhn *apud* Gulácsi 2001, pp. 232–233］，「君」の原語として期待される kün が見当たらない．この事実は一体どう解釈すべきであろうか．本碑文はあくまでエディズ王朝に入ってからの両可汗，すなわち第 7 代懐信可汗・第 8 代保義可汗の功績を称えるものであって，先行するヤグラカル王朝の 6 代の可汗の事績については基本的に冷淡であること，但しマニ教を導入した牟羽可汗だけは例外で，実際には磨延啜の功績さえ牟羽のものとしてまとめている［森安 2002, pp. 150–157 = 森安 2015a, pp. 30–34］．一方，マニ教を保護した可汗たちの称号が「君登里」＝ kün tängri（日神）もしくは「愛登里」＝ ay tängri（月神）で始まる意義については早くに田坂興道が明らかにし，以後の研究者にも認められている［田坂 1940a, pp. 229–231; Mackerras 1972, p. 152; Klimkeit 1993, p. 366; Rybatzki 2000, p. 245; Clark 2009, p. 71, n. 31］．そこで森安は，牟羽の正式称号にも，本来は「君」がなかったのに，後で本碑文を作成した時に意図的に付加された，いわば「追贈」された結果であるという見解を提唱した［森安 2013, pp. 129–128 = 森安 2015a, pp. 551–552］(114)．以上のような見方に対して吉田は，可汗の称号冒頭に来る tängridä が kün tängridä もしくは ay tängridä に変わった理由として，ウイグルがマニ教に改宗してからは単に tängri と言えばマニ教の最高神たるエズルア神（＝偉大なる父，光明の父）を指すことになるから，それから qut を得たと誤解される恐れのある表現を避けたからではないかと考えている．なぜなら，慕闍に宛てた手紙の冒頭では通常の手紙の書式で想定される ’t βγw ...「神なる…へ」という表現ではなく ’t βγ’n ’nγwn ...「神のごとき…へ」という表現を使って，慕闍をマニ教の最高「神」と同一視することを憚っている実例があるからである［Yoshida 2019a, p. 59］．

06:44–45, 毗伽：これまで全ての先行研究がこの 2 文字を「毗伽」と推定してきたが，ハミルトンはそれに異議を唱え，これを「莫賀」とすべきであると主張する［Hamilton 1990, pp. 130–131］．ド=ラコスト拓本を見たところ，確かにここの 1 文字目の残画は，上端にクサカンムリないしは業などの上端部，中央部よりわずか下方の左端に横棒 1 本が見え，「莫」と矛盾しない．しかし他の文字の可能性もある．いずれにせよ「毗伽」は絶対に無理である．翻って考えるに，東ウイグル

(114) 因みに，敦煌出土の 10 世紀のウイグル文書 Pelliot Chinois 3049 に現われる可汗の称号は，kün tängridä qut bulmïš ärdämin il tutmïš alp qutluγ uluγ bilgä uyγur - tängri uyγur xan となっていて［Hamilton 1986, MOTH, No. 5, pp. 42–43］，こちらには冒頭に kün があり，それ以外で T II D 135 の牟羽可汗の称号にあってこちらにないのは külüg の 1 語だけである．これだけの一致を示すのは，従来知られているウイグル可汗の称号［cf. 森安 1991『マニ教史』pp. 182–185］中には見られないから，両者を同一視するハミルトンの考え［Hamilton 1986, MOTH, p. 50, n. 5.47–48］は正しいかもしれない．クラークもこれを是認している［Clark 1997, p. 106 & No. 156; Clark 2000, p. 84, n. 2］．

の可汗の正式名称は，全て「毗伽可汗」で終わっていた［cf. 森安 1991, pp. 182–183］．もしハミルトン説が正しいとすると，この 3 代目の牟羽可汗だけが例外であることになる．我々はむしろこの「莫賀」あるいはその他の適当な 2 文字あるいは 3 文字の後ろに「毗伽可汗」と続いていた可能性を主張したい．その根拠は，前註 06:26–49 で言及した T II D 135 (= MIK III 6371) に，彼の称号がウイグル語で uluγ ilig, tängridä qut bulmïš ärdämin il tutmïš alp qutluγ külüg bilgä uyγur qaγan と明記されており，ここにやはり bilgä が含まれていることである．最初の uluγ ilig は「大王」という意味で，以下の称号全体と同格であり，uyγur「ウイグル」も問題外であるから，KB 碑文漢文面との実質的差異は，下線を引いた 2 語すなわち ärdämin と qutluγ が多い点だけである．qutluγ ならば汨咄禄と書かれたはずで，その 1 文字目は残画とは合わないので，その可能性はない．あるいは uluγ に対応する「胡禄」かもしれない．

06:73–79, 史思明之子朝義：ウイグルが唐を支援して安史の乱の鎮圧に協力するのは，安禄山がリーダーであった時代ではなく，彼が反乱勢力側の内部分裂により正月元旦に暗殺された至徳二（757）年の秋からである．その時にはまだ安禄山の子である安慶緒は生きているが，反乱勢力の実質的な指導者は史思明である．757 年の内に，唐・ウイグル連合軍は長安と洛陽を安慶緒軍から奪回した．一方，史思明は乾元二（759）年三月に安慶緒を殺害，四月には自ら大燕皇帝として即位し，上元元（760）年閏三月には洛陽を占領したものの，後継者問題の混乱により長男の史朝義の部下によって幽閉された．以後，史朝義が洛陽を保持し，上元二（761）年二月には史思明を殺させて，史朝義が即位した．『旧唐書』巻 195・迴紇伝，宝応元（762）年之条［中華書局版 p. 5202; 佐口 1972, p. 324; Mackerras 1972, p. 69］によれば，その史朝義がウイグルの牟羽可汗に一致協力して唐帝国に侵略しようと誘いをかけたのであるから，シュレーゲルがここの「史思明」の直後に「之子朝義」と推補したのは首肯できる．とはいえ，KB 碑文の安史の乱に関わる記事は，磨延啜と牟羽を故意に混同し，ウイグル軍による 756 年・757 年・762 年の 3 次にわたる中国遠征さえ第 7 行の簡潔な文章でひとまとめにしているように見えるので，たとえ漢籍から牟羽可汗を誘ったのが史朝義であることが確認できるにしても，ここだけ敢えて詳しく史朝義の名前を補う必要はないのかもしれない．

07:23–24, 神器：「神器」は帝位の相続に伴う宝物をいうが，転じて帝位をもいう．

07:40–41, 京洛：「京洛」とは洛陽の別称であるが，広義には「国都」を指すこともある．漢文史料からは牟羽可汗の率いた第 3 回中国遠征軍は洛陽には進駐したが，長安には行かなかったことが明らかなので，ここは洛陽とみてよかろう．但し，唐代には長安を「上京＞京」といい，洛陽を「東都＞都」といって区別する用例もあり，さらに前註 06:73–79 で述べたように，KB 碑文では実際には 3 回あったウイグル軍の中国遠征を敢えてひとまとめにしているようにみえるので，ここの「京洛」が「長安と洛陽」を意味している可能性も完全には排除できない．本碑文の次行で牟羽可汗の軍隊が駐屯した場所を「東都」と明示している点にも注意したい．これに対してパルンボは，フォルテ A. Forte 説に従って，本箇所の「京洛」は首都の意であり，具体的には長安を指すという見方をとっている［Palumbo 2003, pp. 256–257, fn. 5］．

07:54–58, 爲兄弟之邦：唐皇帝とウイグル可汗（第 2 代磨延啜および第 3 代牟羽）とが兄弟の関係であることを示す「兄弟之約」「約為兄弟」という表現は『旧唐書』巻 195・迴紇伝［中華書局版 pp. 5200, 5203＝佐口 1972, pp. 318, 328＝Mackerras 1972, pp. 60, 72–74］に見られるが，では具体的にいつの時点で，どういう経緯で兄弟の約が結ばれたのかを示す史料は，管見の限り見つからない．

08:01, 師：和林録・許本・シュレーゲル本は「帥」とするが，それ以外は全て「師」とする．旁の上端がかなり破損しており,「師」と「帥」のいずれであるかはなかなか判断しにくい. Chavannes / Pelliot 1913, p. 196 はいずれとも決めていない．京大拓本では上端が欠けているが，阪大拓本（No. 8）では幸いツクリの上端に僅かながら横棒が残っており，「師」と読むことができる．ド=ラコスト拓本に依拠するハミルトン原稿でも「師」となっている．この読みが正しければ，文脈からみて，二つの可能性が考えられる．第一案は「法師」である．その場合は，ある法師が「睿息等四僧を將いて入國」したと考えられる．もちろん，この法師はこの同じ行の中程に「况法師妙達明門，精通七部，才高海岳，辯若懸河」と称賛されるその法師であり，ここの初出の所では正式の名前まで明記されて「〓〓法師」となっていたことであろう(115).

08:12–13, 二祀：この「二祀」はマニ教学的観点からは「二根」すなわち「二つの根本原理 two radical principles」とある方がふさわしく，かつて Chavannes / Pelliot 1913, pp. 190–191 でもその可能性を示唆していた．漢籍ではマニ教の重要な経典として『二宗経』が知られており，Chavannes / Pelliot 1913, p. 151 ではそれを “Livre des deux principes” と訳していた．しかしアトラスの拓影やヘイケル Heikel の撮影した原碑の写真［Société Finno-Ougrienne 1892, pl. 53］を子細に見ても,「二根」と読むのはやはり無理である．ドヴェリア本では「五祀」（p. XXXI），野村本でも「　祀」となっていて「二祀」の「祀」を疑う必要はない．原文にある「二祀」をシャヴァンヌ／ペリオは “deux sacrifices” と訳し，クラークもそれを追認して英語で “two sacrifices” としており，それ以外の訳語は考えにくいものの，今ひとつすっきりと解釈できないのは残念である．なおパルンボは「二祀」は本来「二根」とすべきところを誤刻したものと推測するが, 訳語はイタリア語で “Due Sacrifici” のまま残している［Palumbo 2003, p. 257］．一方吉田は,「二祀」という表現に問題はなく，それは善悪二つの信仰対象のことで，この文脈ではマニ教の善神と悪神を指すと考えている．

08:19–20, 法師：Chavannes / Pelliot 1913, p. 191, fn. 2 ではこの法師を睿息一人とみる．マッケラスやクラークも同様の見解のようである［Mackerras 1990, pp. 330, 332; Clark 2000, pp. 88, 105］．

08:63–66, 默傒悉德：Chavannes / Pelliot 1913, p. 192 では「〓傒悉德」と読みながらも，傒という字は無視して「完全な徳」とフランス語訳した．しかしこれは全くの誤訳であった．この誤りに気付き，傒の前の缺字に「默」を補って「默傒悉德」とし，これをマニ教団第 3 位の高僧マ

(115) 従来，この睿息等四僧を将いて入国した主語をウイグル可汗とみる説が有力であったが［Chavannes / Pelliot 1913, p. 190; Clark 2000, p. 88］，ウイグル可汗が自分の本国に「入國」するという表現はいささか不自然である．第二案は「班師」である．すなわち，牟羽が中国本土から漠北へと「軍隊をかえした」とみるわけであるが，この場合には睿息等四僧を将いて入国した主語をウイグル可汗とみなければなるまい．それゆえ我々は第一案を採りたい．

ヒスタク（maxistak / mahistag）に比定した功績は，石田幹之助に帰すべきである．この点については文字註 58 を参照されたい．後にペリオも同じ見解を発表しているが［Pelliot 1929, p. 249］，石田の創見を無視しているのは不当である．パルンボが 21 世紀になってさえこの箇所にマヒスタクを読み取ったのは Pelliot 1929 が最初であると註釈しているのは［Palumbo 2003, p. 259, fn. 3］，日本の東洋学界にとって真に遺憾なことである．なお「黙傒悉德」の前の 1 字はおそらく「爲」であって，睿息をはじめとする四僧を率いてモンゴリアに入った法師こそが，単なるマニ僧（dindar）の地位から昇級して，マヒスタクになったのであろう．そしてこのとき初めてモンゴリアにマヒスタクが一人置かれることになったようである．というのは，これからほぼ 30 年後の 795 年に作成されたウイグル語マニ教文献（U 168 II = T II D 173 a[2]）のコロフォンでさえ，モンゴリアにあるウイグル本国の「教義の長」はマヒスタク（「神聖なるマール=ネーウ=マーニー=マヒスタク（tngri mr nyw mani mxistak）」in T II D 173 a[2]）［cf.Le Coq 1912 = *Manichaica* I, p. 12; cf. Clark 1997, p. 105; 森安 2015a, pp. 552–553］であったと言っているからである．次いで，ウイグル歴史書断簡 U 1 より知られるように，803 年になってようやく 3 人のマヒスタクがウイグル本国に置かれることになった［cf. 森安 2015a, pp. 245–246, 549 & fn. on pp. 44–45］．そしてさらに一階級上のアフタダン（avtadan > 拂多誕）の座が設けられたのは 803 年以降で，保義可汗時代に KB 碑文が建設されるまでの間と考えられる［cf. 森安／吉田／片山 1999, p. 223; 森安 2015a, fn. on p. 45］．

09:23–26, 再三懇請：シャヴァンヌ／ペリオは「再三懇〓」を “Par deux et par trois fois, avec sincérité [je l’ai étudiée]”［Chavannes / Pelliot 1913, p. 193］とフランス語訳した．クラークはこれをそのまま受け入れて，単に “Twice and thrice [I have studied it] with sincerity.” と英訳し，しかもこれを牟羽可汗が洛陽で 4 人のマニ僧と会う前から既にマニ教と深い関わりを持ち，一旦はマニ教に改宗したことさえあったとみなす有力な根拠とした［Clark 2000, pp. 88, 101, 105］．しかるに我々は，文字註 63 で述べたような理由により，ここは「再三懇請」，もしくはパルンボ案のように「再三懇禱」と復元する方がはるかに自然であると判断する．

ところで，この「再三懇〓」という文句の主語を牟羽可汗とみる点では，シュレーゲル，シャヴァンヌ／ペリオ，クラークの諸氏はすべて一致していた．然るに「再三懇禱」と読むパルンボはその主語をウイグルの貴族たちであるとする［Palumbo 2003, p. 260, fn. 2］．この点では我々もパルンボと同じ見解であり，「再三懇〓」の一句を地の文とみなし，可汗周辺の高官たち（都督・刺史・内外宰相・等々）が可汗に向かって「何度も何度も心からお願いしている」場面ととるのである．林／陳／王本でもここを地の文ととっているが，シュレーゲルの旧説に従って「再三懇惻」のままであるから，その主語を誰と考えているのか明確ではない．我々の見方からすれば当然，「奉旨宣示」した内容に当たる可汗の言葉は「再三懇〓」より前の「此法微妙，難可受持」のみとなり，その後ろの「往者無識，・・・」は高官たちの請願内容ということになる．なおパルンボは「奉旨宣示」さえもウイグルの貴族たちの発言と見なすが，その点では我々の見解と大きく異なっている．

09:31–34, 謂鬼爲佛：漢語の「鬼」は本来 “spirit, ghost” の意味であって，悪魔の意味はない．

「謂鬼爲佛」とは，遊牧民族ウイグルがもともと持っていたシャーマニズム信仰のことを表現したはずであるから，ここの「鬼」を「悪魔」と解釈するシャヴァンヌ／ペリオ以来の欧文訳は行き過ぎである．しかしながら，ここと対応するソグド語版第 11 行では δywt 即ち δyw “demon” の複数形になっているのも事実である．因みに直後に見える「刻畫魔形」の方にはソグド語版第 11, 12 行では δsty ’krty ptkryt「（人間の）手で作られた（偶）像」が使われている．

09:54, 曰：シャヴァンヌ／ペリオは，「曰く」の後の引用がマニ僧睿息の言葉であることはほぼ間違いないから，「曰」の前に「法師」と補ってよかろうと言う［Chavannes / Pelliot 1913, p. 193, n. 3］．しかし我々はこれに従えない．むしろここは，シュレーゲルが疑問符付きで推測したように［Schlegel 1896, p. 130］，可汗の発言とみなすべきと考える．我々は，ソグド語版第 12 行で，この漢文の内容に対応する発話の主語が「神（のごとき）帝王」すなわちウイグル可汗であることから，この見方を取るに至った．

09:61–62, 持賚：「持賚」の「賚」は「賚」と同じであり，その「賚」は「齎」（セイ／サイ／シ；もたらす，与える，おくる）の異体字である．それ故ここは「持賚」＝「持齎」となる．しかし，「任即持賚」の解釈を羽田のように「其の宗義の信仰を保持するに任す」ととらえるには，「齎」を「齋」（サイ；ものいみ，いつき）の音通とみて，「即（つ）きて齋（戒）を（保）持するに任す」とでも読むしかなかろう．「任即持受」と読んだシャヴァンヌ／ペリオも “vous pouvez immédiatement recevoir et garder [les préceptes]”「君たちは即座に［戒律を］受けて保持してよい」と翻訳している［Chavannes / Pelliot 1913, p. 193］．しかし，それでは直前に実際に使われている「受持」とほとんど同じ意味となるから，不自然さはぬぐえない．

これに対し，後続の「應有（あらゆる）刻畫魔形」という文言（次註 09:63–68 参照）に鑑みれば，本処の「持賚」は「賚持（＝齎持）」に同じく「持参する，もってくる」の意とみなせる．すなわち，「あらゆる彫刻や絵画の偶像をもってきて，それらすべてを焼却させよ」という方向で解釈するわけである．羽田は，「任即持賚」の語を含むこの前後の箇所を，シュレーゲルのように可汗の言葉と推定するのではなく，マニ僧である睿息の語を録したものとみる．シャヴァンヌ／ペリオも睿息＝法師の語とみる．それに対して我々は，ソグド語版第 12 行の内容を参考にして，この箇所の主語は可汗とみなすのが正しいと考えている［cf. 前註 09:54］．

09:63–68, 應有刻畫魔形：欧米の東洋学界では，この「刻畫魔形」や先行する「謂鬼爲佛」の語句などを主な根拠にして，ウイグルがマニ教に改宗する以前は仏教を信仰していたと考えたガバイン由来の説が長らく影響力を維持したが［cf. Gabain 1952, p. 22; Gabain 1954, pp. 168–169; Gabain 1961, pp. 506–507; Klimkeit 1982, p. 21; Elverskog 1997, p. 6; Clark 2000, pp. 88, 101, 105; Tremblay 2001, pp. 107, 108, 110］，もはやそれは謬説として退けられるべきである．因みに漢訳マニ教文献に現われる「佛」は，「摩尼佛」「夷数佛」がそれぞれ預言者マニとイエスを示しているように，マニ教徒の信仰対象や神格を指すのであって，決して仏教の仏陀のことではない．

この「刻畫魔形」とは，中央ユーラシアの遊牧民族に古来より広く流布していたシャーマニズムにおける守護霊の偶像（モンゴル遊牧民のいわゆるオンゴン）であるという見方が護雅夫によ

って示されており［護 1974, p. 4 = 護 1992, p. 184; 護 1977, p. 124］，我々もそれに従う．なお唐の段成式が編んだ『酉陽雑俎』前集，巻 4・境異に次のような文がある：「突厥事祆神，無祠廟，刻氈爲形，盛於皮袋，行動之處，以脂酥[そ]塗之．或繫之于竿上，四時祀之」．ここは祆神とあってもゾロアスター教のことではなく，シャーマニズムとみなすべきである．「氈を刻みて形を為す」とあるのはフェルトから切り出した人形のようなものを伺わせ，まさにオンゴンに相当するものである．なおオンゴンについては護雅夫（訳註）『中央アジア・蒙古旅行記　カルピニ・ルブルク』1965, pp. 11–12, 141, 203 を参照．

10:36–37, 法王：シャヴァンヌ／ペリオはこの「法王」を長らくバビロンにいたマニ教会の最高指導者 archēgos を指すとみなし［Chavannes / Pelliot 1913, p. 195, fn. 1］，以後もほぼその説が受け入れられていたが［cf. タルデュー『マニ教』クセジュ，p. 113］，ズンダーマンはやや慎重にバビロンにいた法王もしくは高昌にいた東方教区の慕闍とした［Sundermann 2001, p. 159 = Sundermann 2016, p. 82］．一方，吉田は，ベゼクリク出土のソグド語の手紙において，慕闍が δrmyk xwt’w「法王」と呼ばれていることから，本処に見える「法王」は，当時の東方教区の慕闍すなわちマール=ネーウ=ルワーン慕闍であると考えたこともあった［吉田 2000b, p. 57; Yoshida 2010, p. 532a］．しかしその後，このベゼクリクの手紙の慕闍が同時に archēgos でもあったことを明らかにすることにより，改めてシャヴァンヌ／ペリオ説に従った［Yoshida 2019a, pp. 43–45］．

10:51–54, 黙傒悉徳：この「黙傒悉徳」（マヒスタク）は，8 行目のマヒスタクとは別人であると思われる．

10:66–67, 慕闍：この「慕闍」はソグド面 12 行目の「神（のごとき）マール=ネーウ=ルワーン慕闍」，ルーン面の tngri mr n- に相当する．この慕闍がウイグル文書 Mainz 345 にも見えることは，森安が論証したところである［森安 2002, pp. 143–144 = 森安 2015a, pp. 25–26, note on v 6–7］．さらに森安は，その慕闍の居所がシャヴァンヌ／ペリオの言うようなウイグル本国ではありえず，東部天山地方の高昌もしくは焉耆であろうとまで推測したが［森安 2002, pp. 145–147 & fn. 34 = 森安 2015a, pp. 26–28 & n. 34］，最新の吉田論文ではそれが焉耆であることを決定付けており［Yoshida 2018, pp. 274–275］，森安もそれに従いたい．

10:68–69, 徒衆：Chavannes / Pelliot 1913, p. 196, fn. 1 で言うとおり，この「徒衆」は 22 行目の「僧徒」と同じで，いずれもマニ僧である Elect を指す．本処の「慕闍徒衆」は Chavannes / Pelliot 1913 以来，ほとんど常に「慕闍の徒衆」と解釈されてきたが，吉田は新たにこれを「慕闍と徒衆」と読むべきであり，その慕闍はマール=ネーウ=ルワーン慕闍であることを提唱した［Yoshida forthcoming, “Bögü Qaghan”］．

12:02–06, 合毗伽可汗：従来も，この「合毗伽可汗」が本碑文の主人公である第 8 代保義可汗を指すとする点では，ほとんど異論はなかった．8 代目までのウイグル可汗の中で，その称号が「合毗伽可汗」で終わる人物は他にいないからである．シュレーゲルは第 11 行末からこの第 12 行冒頭部分を「毗伽可汗継承．前合毗伽可汗」と推定復元する．しかし本処は，本碑文の主人公である保義可汗の初出箇所であるから，彼の正式の称号「愛登里囉汨没蜜施合毗伽可汗（< ay tängridä qut

bulmïš alp bilgä qaγan)」が記され，かつその前には空格も置かれたはずである．従って，シュレーゲルの再構案には従えず，より多くの字を第 11 行末に推補しなければならない．前々行の行末に「往來教化○牟羽可汗崩後○合汨咄禄毗」と補ったと同様，前行末にも少なくとも「愛登里囉汨没蜜」という 7 文字，さらに空格 1 字分，もし保義可汗が懐信可汗の実子（未確認）なら「子」を補わねばならない．林／陳／王本ではここを「羽禄莫蜜施合毗伽可汗」と推定復元するが，そのような可汗号は知られておらず，荒唐無稽である．我々は 11 行目に 7 代目と 8 代目の正式可汗名が一緒に初出するのは，その後の事績がほとんどすべてこれら 2 人によって担われたからと考えている．

12:34–40, 天可汗垂拱寶位：この 12 行目の中ほどに見える「天可汗垂拱寶位」の「天可汗」の場合は直接話法で記された引用文なので，第 3 節で取り上げた天可汗問題において「天可汗＝現可汗」とみなすシャヴァンヌ／ペリオ以下の保義可汗説支持者でさえも，ここだけは例外的に 7 代目の懐信可汗を指すとみなしていて，学界に異論はない．

12:90–13:20, 天可汗宰衡之時，与諸相殊異，爲降誕之際，禎祥奇特：第 3 節で論じたように，漢文面 13 行目冒頭のこの可汗がイル=オゲシ改め懐信可汗を指していることは確実である．それゆえ 13 行目冒頭のこの可汗と 12 行目冒頭に「合毗伽可汗，當龍潛之時，於諸王中最長」とある主語の合毗伽可汗すなわち保義可汗とを同一視するのは誤りである．漢文面だけを見ていたのではこうした誤解に陥りやすく，実際，第 3 節で紹介した保義可汗説をとる先学にこの誤解が多く見られるのである．一方，天可汗問題で懐信説をとる安部はこの 13 行目冒頭の「可汗」の直前（＝第 12 行目の行末）に「天」を推補している［安部 1955, p. 180］．我々もそれに従った．

14:15–22, 堅昆可汗應弦殂落：ソグド語面の 18 行目に「40 万の数のキルギス（族）の可汗を自らの手で（放つ）すばらしい矢によって放り飛ばした」とあるのと対応する．

14:57–59, 匂曷戸：この匂曷戸という地名の原語についてハミルトンはかなり大胆な推定復元をした上で，天山山中にその位置を求めるが［Hamilton 1990, pp. 131–132］，我々はむしろウイグル軍がモンゴルの本拠からアルタイ山脈を越えて北庭に迫る進軍路の途中，すなわち北庭の東側で天山北麓のジュンガル平原のどこかに当てたい．

15:53–55, 狐媚磧：狐媚磧について，『旧唐書』巻 134・渾瑊伝, p. 3703 に「瑊本名曰進，年十餘歳即善騎射，隨父戰伐，破賀魯部，下石堡城，收龍駒島，勇冠諸軍，累授折衝果毅．後，節度使安思順遣瑊提偏師深入葛禄部，經狐媚磧，略特羅斯山，大破阿布思部」とある．この特羅斯山はあるいは『隋書』巻 84・西突厥伝, p. 1878 並びに『資治通鑑』巻 181・大業七年之条, p. 5655 に，処羅可汗が射匱可汗に敗れて高昌の東に逃れ，保持したという時羅漫山かもしれない．時羅漫山がハミ北方の天山東端部のカルリグ=ターグ（Qarlïγ Taγ，トルコ語で「雪山」の意）を指すことは，既に松田 1970, pp. 43–45 に考証されている．狐媚磧の具体的な位置について，林梅村らは北庭と亀茲の中間で，トクスンの西南約 100 km にある銀山磧に比定した［林／陳／王 1999, p. 165］．これは古代トルコ語の kümüš「銀」の音価を狐媚 *γuo-mji と結びつけることによるが，牽強付会である．一方，華濤は天山東端の北庭以北の沙磧とみなしている［華 2000a, p. 6 & p. 27, n. 31］．狐媚

磧は北庭からさほど遠からず，しかも上記『旧唐書』渾瑊伝によれば，唐側の軍団がカルルク部や九姓鉄勒の一つである阿布思部［cf. 羽田 1957b, p. 331］に向かう途中にあるはずだから，地理的には華濤説の方が妥当と思われる．

16:06–14, 復吐蕃大軍攻圍龜茲：吐蕃の大軍が亀茲を包囲攻撃したのに対してウイグル側は天可汗自らが軍隊を率いて救援に赴き，吐蕃軍を壊滅させたという 16 行目の記事を，Chavannes / Pelliot 1913, p. 178, fn. 1 では 790–791 年の出来事，すなわち一連の北庭争奪戦の文脈で捉えたが，羽田はこれを漢籍上に根拠なしとして退けた［羽田 1957a p. 228］．それに対して近年，吉田はこれを 798 年の事件とみなせるという新見解を打ち出しており，森安もそれに従っている［吉田 2006, pp. 29–30, 45; Yoshida 2009, pp. 351–355, 361; 吉田 2011a, p. 19; cf. De la Vaissière 2007, p. 128; 森安 2015a, pp. 272–273］．

16:30–31, 于術：「于術」は亀茲のかなり東方で，焉耆のやや西方にあった地名である［cf. Chavannes / Pelliot 1913, p. 178, fn. 1; 羽田 1957a, p. 286, n. 144］．『新唐書』巻 40・地理志 4, p. 1048 に「焉耆西有于術・榆林・龍泉・東夷僻・西夷僻・赤岸六守捉城」，『新唐書』巻 43・地理志 7 下, p. 1151 に「自焉耆西五十里過鐵門關，又二十里至于術守捉城」とある［cf. Chavannes 1903, p. 7］．また張九齢の『曲江集』に収載される「勅（天山軍使）西州刺史張待賓書」には「鐵關・于術，四鎮咽喉，倘爲賊所守，事乃交切」とある［cf. 熊飛校注『張九齢集校注』北京，中華書局，2008, p. 669］．この文章は開元 24 年（736 年）の作成であるが，ここに見える「賊」も吐蕃を指している．松田壽男／森鹿三（共編）『アジア歴史地図』（平凡社，1966）p. 96 に見える于術の位置はおおよそ妥当ではあるが，もう少し焉耆寄りにすべきかと思う．なお，于術の原音は，マフルナーマグ Maḥrnāmag と呼ばれる中世ペルシア語マニ教賛美歌集（M 1 文書）の奥書に現われるウチュル ’Wcwr（地名から接尾辞 -cyk によって派生した形容詞 ’wcwrcyk のもとの形式）である［Yoshida 1993, pp. 366–367; Yoshida 2009, pp. 350, 353］．ただし吉田がミュラーMüller の旧説に従って ’Wcwrcyk を近現代のショルチュク Šorčuq に比定している点にはまだ疑問が残っていたが［cf. 森安 2015a, pp. 273–274］，吉田の最新論文では漢文版の于術がソグド語版第 19 行の ctβ’r twγr’ystn「四トゥグリ＝Four Twγry」に対応し，それが焉耆地方を指していることを論証している［Yoshida 2018, “Farewell,” pp. 273–274］．

18:27–28, 其王：この 18 行目に二度見える「王」は天山南路を走る西域北道のオアシス都市国家，具体的には亀茲（クチャ）や姑墨（アクス）や温宿（ウッチ）の国王であろうと思われる．

18:55–57, 沓實力：「沓實力」はカルルクの三部族のうちの一つである．『新唐書』巻 217 下・回鶻伝附葛邏禄之条, p. 6143 には，「有三族，一謀落，或爲謀剌，二熾俟，或爲婆匐，三踏實力」とある．

19:45–47, 大食國：我々は最近発見されたウイグル歴史文書を根拠に，この大食国がタラス地方である可能性が大きいと考えている．Zhang / Zieme 2011 で初めて発表されたウイグルの歴史を記した文書一葉（中国文化遺産研究院蔵 xj 222-0661.09 号）には，ウイグル王がタリム盆地の亀茲・焉耆（Tarīm, Solmï）地方を征服した後，タラス（Talas）にまで進軍して，そこを占領したという

記載がある．本文書はウイグル草書体で書かれたモンゴル時代の歴史書の断片であり，年代も不明であるため，ここに伝えられるウイグル王のタラス占領が西ウイグル時代の事件であった可能性も排除できないが，我々はそこに記載された内容がKB碑文漢文面の §§13, 15，並びにソグド語面第19–22行の懐信可汗時代の事績とあまりにもよく似ていることに驚きを禁じ得ない．

20:20–25, 西至拔賀那國：敗走するカルルクと吐蕃の軍団を追撃し，西してフェルガナ国に至ったというこの20行目の記事を，吉田は802年にウイグル軍がカシュガルでチベット軍に勝利したと読み取れるコータン語文書の内容と結び付けた．この点については上記3.1節を参照されたい．

20:39–40, 教令：「教令」の前に空格がないことから，この「教令」は天可汗の命令ではなかったと考えられる．そうであるとすれば，宗教者からの布教・改宗の働きかけであった可能性が高く，ここで言及されているカルルク（葛禄）の葉護（yabγu）がマニ教を信じなかったことを含意しているのかもしれない．吉田は，この葉護こそ，アッバース朝の第3代カリフ al-Mahdī（在位775–785）のときにイスラムに改宗したとされるカルルクの Jabghūya その人かもしれないと考えている．この点については Karev 2015, p. 312 も参照せよ．

21:21–26, 真珠智惠葉護：前行の「葉護」がウイグルに逆らって逃亡したので，ここに新たに帰順したカルルクの集団のために新葉護を任命した．そのことがソグド語版20行目からも分かる．

21:30–36, 十箭・三姓突騎施：この「突騎施」の復元は確実であるが，さらに吉田は，ソグド面20行目の再解読を踏まえ，かつての西部天山地方の正統な支配者は西突厥（＝十箭＝十姓）の流れを汲むトゥルギシュ（突騎施）であるという認識をウイグル支配層が有していたことが判明すると考えている［吉田 2011a, pp. 18–19］．

22:13–16, 僧徒寛泰：パルンボによれば，この「寛泰」は漢文マニ教聖典の1つである『下部讃』に何度も出てくるマニ教用語で，最高で絶対的な平静の状態を示す言葉だという［Palumbo 2003, footnote on pp. 264–265］．

22:17–20, 聴士安樂：本処のマニ教寺院の復活ないし建設と，マニ教僧侶並びに一般信徒（＝聴衆）の安寧を誇示している記事は，ソグド語面の 20–22 行目と対応させれば，ウイグルが西トルキスタンで行なった処置であるらしい．その時期は懐信可汗の最晩年にあたり，802 年以降で808年以前である［吉田 2013, pp. 55–57］．

22:25–28, 悶〓闇名：この四字句は読みも解釈も難しい．王国維本では「門〓闇名」と読み，Pelliot は「聞〓闇名」と読んでいた［Pelliot 1929, p. 249, fn. 1］が，羽田本では「〓〓〓石?」とするに止まり，林／陳／王本では「〓〓大石」としている．3番目の文字は確かに「闇」のように見え，それゆえペリオは「慕闇」の可能性を考えつつ，「聞慕闇名（＝慕闇の名を聞く）」と復元すべきかと言いつつも，慕闇とすれば先行するはずの空格が存在しないことから，「慕闇」の読みはやはり正しくないと考えたのであった．このように漢字の字面から文意が解釈できないという状況は，それが音写語であったことを強く示唆すると言える．この文脈でどのような音写語があったかを推定することは容易ではないが，直前にあるマニ教に関する記事や対応するソグド語版を参考にすれば，この時期のアッバース朝におけるマニ教弾圧との関連を考えることが出来るかも

しれない．弾圧を行なったのは支配者即ちカリフであったから，問題の語はカリフの名前或いは称号を音写していた可能性がある．実際，ソグド語版の 21 行目にはカリフを指す mwmyn xm’yr という表現が見えている．これは究極的にはアラビア語の amīr al-mu’minīn「信者たちの指導者」に由来するが，この要素の順序の違いは明らかではない．今仮に門構えの中の字形が明確ではない 1 番目と 3 番目の漢字をそれぞれ「悶」（中古音 *muən）と「闇」（中古音 *·ə̂m）と推定すると，全体は Karlgren の推定する中古音で *muən-???-·ə̂m-miäng と復元される．Karlgren の -ng は鼻音の [-ŋ] を表すので，これを [mumin amiŋ] のような原語を写そうとした音写形とみなすことができるかもしれない．4 文字目語末の [-ŋ] は奇妙だが，[amir] の [-r] が同化によって鼻音化したことが想定されよう．鼻音ばかりの原語が発音しにくかったからだと考えられる．

附録 1　ソグド文テキストと和訳

ここに提示するテキストは，Y. Yoshida, “Studies of the Karabalgasun Inscription: Edition of the Sogdian version”（『Modern Asian Studies Review／新たなアジア研究に向けて』11, 2020 刊行予定）に基づいている．研究史や詳細な訳注などはそちらを参照されたい．日本語訳は，本稿で新たに提示するものである．

テキスト中の[角括弧]は文字が破損している部分を，(丸括弧)は文字が一部残っている部分である．丸括弧の中の黒丸 (•••) は破損した文字の一部は見えるが判読できない部分を示し．黒丸の数の文字が失われていることを示す．翻訳部分では，[角括弧]は破損した部分を補ったことを示す．(丸括弧)は，訳文を理解しやすくするために補った部分である．

テキスト中の(1), (2), ... (7)及び Fragments 8, 9 は，ソグド語銘文が残っている碑石の断片に対して Hansen 1930 が与えた断片番号（Frag. 1~9）である．これらの碑石の断片の相対的な位置関係については森安／オチル（編）1999, p. 211 及び Plate 14b, 14c, 14d, 14e を参照せよ．Frag. Paris は森安／オチル（編）1999, Plate 14b の No. 10 の小断片であり，Frag. Rus. は 2016 年にロシアで新たに発見された断片である．どちらも小断片であるが Hansen 1930 の Frag. 7 と接合する．なお碑額の部分では /1/, etc. は行数を表す．

テキストと翻訳において，＜大きな破損＞は，碑石が失われ文脈を補うことができない程テキストが大きく断絶している部分を示す．ただし Frag. 3 と Frag. 5 の間や，Frag. 4 と Frag. 6 の間の破損部は相当大きいが，内容のつながりは一定程度推測できるので，＜ある程度破損＞のようにしている．

テキスト

碑額　1/[’yny ”y] tnkry[δ’] xwt-/2/[pwl-mys] (’l-p)w [pyl-]k’ βγy /3/[’wyγwr x’γ-’n] (γwβ)ty’kh /4/[pts’k] np’xš[tw] δ(’r)ym

1 行　(1) ’yny ”y tnkry-δ’ xwtpwl-mys ’l-p pyl-k’ βγy ’wyγwr x’γ-’n γwβty-’kh pts’k np’x(š)[tw δ’rym]

(3) 空白部 (ny-)’k(w ’)[l-(4)]p(yn’ncw) p(γ)[’trx’n ある程度破損 (5)](••) mwnkw ms

βγ(pwr’k) np(’)[yk? 大きな破損]

2 行 (1) (n)y’k γrβ’kw ’xš’wnδ’r MN βγyšty prnβyrty RBkw twrkc’ny ’βc’npδykw ’xšy-wny ’’y tnkryδ’ xwtpwl-mys[’lp pyl-k’ x’γ’n? (3)](•’wy-γ)w(r) tykyn ’wk’ [(4) pr γr](’)n γny ZY m[rt’nyh](•••••)[ある程度破損 (5)](•••) np’xštw δ’rym m’xw sγ[tm’n 大きな破損]

3 行 (1) γw’δwk ’wγwz ’yl ’wk’sy ’l-p’yn’ncw pγ’trx’n 空白部 yγl-’xr ’wk’ ’wtyr pγ’trx’n 空白部 yγl-’xr ’wk’ xwtl-wγ (p)[γ’trx’n? (3)](••)r ’wk’ 空白部 [(4)](••••••••)δ(•δ)s (•••••)[ある程度破損 (5)] ’wk’ 空白部 [大きな破損]

4 行 (1) z-γtw δ’r’nt pr prn ZY prnxwntkyh z-’wr z-γtw δ’r’nt ZY kδ’m ’xš’wnδ’r wm’(t)’y ZY γrβ’kw y’xy ZY γ(nk)yn w(m’t)[’n](t) rt[y (2) sγtm’]n ’xš’wn[δ’r(3)]t ’wts(’)[r (4)](pry)s’nt (prw) z-mnw (••)[ある程度破損 (5)](••)yk ywk [βs’k? 大きな破損]

5 行 (1) ’skw’skwnw pr xypδ γny ZY mrt’nyh γrβ’y ZY ’’p’y z-’wr γrβ srδ ’xš’w’nh z-γtw δ’rt c’nkw xwty tnp’r p’ryc cywyδ γy(rt)r z-’t[’y (2) kwl py]l-k’ x’γ-’n [(3) ny]s(t)y (••mr ••)[(4)](M)N ’yδ(yt)y (y)x(w)st(’)y (γnk)[yn? 大きな破損]

6 行 (1) p(r’)yw ZY ’’šn’s knty twr(k) ’xš’wnδ’r ’(’)st(’n)t xwty ’xš’wnδ’rt ’krt’nt kyZY i (srδ) ’xš’w(’nh) z-γtw δ’r(’n)t (y)w(’)r (β)xt(w)[ny (2) tw](γ?) wm’t cy-wyδ ’xš’[wnδ’rty (4)](’xš’w’n)h δ(β)tykw ’y-tδ(’r’n)t ZY[大きな破損]

7 行 (1) β’tryncw ZY wyspw ’xš’w’nδ’r s’t kw CWRH s’r m(n)x(yr)š ’xš’wnh *šyr ptsγty ’rpst’kw ’krty γrβ srδy ’xš’w’nh z-γtw δ’rt c’(n)[kw (2) kw]l pyl-k’ x’γ-’n tnp’r p(’)[ryc (4) tn]kryδ’ pwl-mys ’yl ’ytmys (’)[wl-wγ pyl-k’ x’γ’n nysty 大きな破損 c’nkw ... x’ γ’n tnp’r p’ryc tnkryδ’ xwt pwlmys ’yl twtmys kwlwk pylk’]

8 行 (1) x’γ-’n (ny)sty c’nkw šxy wyδ’sγwny ’n(y)’z-’nkw wm’t pr s’t β(rγ)nh ZY c’nkw ’xš’wnδ’ry w’δy (ny)sty ZY ctβ’r kyr’n wy(zp)’ ZY pckwyr [wy(2)δ](β’)xs pr prn ZY prnxwntk(yh) p[r (4) py](r’y) ZY γrβ’kyh pr γny ZY [mrt’nyh 大きな破損]

9 行 (1) ZY ptškw’nh ’’γt w’nkw ZY cymyδ t(r)γty’kh β(r’)yδt ZY ZKn z-’wr *δβrδ’ ZY c’nkw βγy ’xšywny ’y(n)y ptškw’(n)h ptyγwš (x)wt(y ‘)M ’rps[t’(2)]kw ’sp’δy p(r)’yw kw βγp(wr)st(n)w s’r x[r’(4)](m)tδ’rt xyδ ’sp’(δy)[’n 大きな破損]

10 行 (1) (δβ)tyk(w) ’nxw(n)cw ’krtw δ’r’nt s’t δynykt ’ *’’z-y<r>’nt ZKw βγy m’rm’ny δynh (w’βr) c’nkw ’yny (n’p)t ’βškrty wβ’ βγy ’xš(’)y-wny ‘M ’r(p)[s(2)]t’kw ’(s)p’δy pr’yw mδy (’w)ytwk’n z-’y(h)[(4) s](’r ’’γ’)z-’nt ’’(γ)t[ ]kw s’t•γ•t (rt)[y ある程度破損 (6)](n) ctβ’r ptšm(’r••••δ•••)[大きな破損]

11 行 (1) [•](p•)yšy-m(s)k(wn)w ZY ptkwnw pδkh δ’rymskwnw ZKn δywty ’spyšymskwnw kδry βγy ’xšy-wny ’rky βynt ’yny δsty ’krty p(tkr’y)t s’t [(2)] ’’try swc(’y) δy(n)h βγy m’rm’ny δynh ptcxš(’)[(4)](y) pts’r βγy ’xšy-wny[ある程度破損 (6)’]šm’xw L’ ptcγt kwnδ’ (p)[’r]ZY[大きな破損 (Frag.Rus.)](•••)t [わずかな破損]

12 行 (1) (wy)δp(’)t (β)γy ’xšy-wny pty-s(yn)t prm’nh pr’m’y w’nkw ZY ptcxšδ cywyδ pyδ’r

δyw(t)y ’sp’s (z-w)šy ZY nm’cw (’’)γtδ’rym xy-(δ) δsty ’krt(y)[(2)] ptkryt ZKwy γr’(m’)kw (n’)m (z-’)yh s’t ’’try (s)[w(4)](c)ym ZY (γr)’n βγy ’x(š)y-[wny ZY](wyspδ)[ryt]••••••• βγy m’rm’ny [δynh ある程度破損 (6)] (’sky) ZY c’δr c’nkw βγy (mry) nyw(rw)’n m(w)z-’k(’)[大きな破損 (Frag.Rus.)](p)wrst’y mrts’r [rty ZKwy (Frag.Paris) ’xš’]w’nty 次行に続く

13行 (1) [w](yδβx)s pw z-r’yš wβ’ c’nkw pwkw x’γ-’n tnp’r pr’γtδ’rt w’nkw ’l-pw xwtl-wγ pyl-k’ x’γ-’n nysty xwty šyr γrβ’kw ZY (γ)[n(2)](k)ynw wm’t (ZY) ’(sky c’δ)r γrβ ’xš’wncykw ’rkh (’)[(4)](k)rtw δ’rt ZY ’x(š’w)[’nh ある程度破損 (6) c’nkw t]np’r p’rycw tnkryδ’ pwl-mys kwl-wk pyl-k’ x(’γ)[-’n nysty 大きな破損 (Frag.Rus.)] ZY mγ-wnw z-γtw δ’rt [(Frag.Paris) c’n]kw 次行に続く

14行 (1) xwtl-wγ pyl-k’ x’γ-’n ’βc’npδy xr’mtδ’rt pts’r tnkryδ’ ’wl-wk pwl-mys ’l-pw xwtl-wγ ’wl-wγ pyl-k’ x’γ-’n [(2) nys]ty pr RBkw p(yr’y) ZY γrβ’kyh γny ZY mrt’ny-’kh (4) prnxwntkyh (ZY) prnpδ[’ky’kh ある程度破損 (6)]šyr xwpw ZY pts’γty z-γtw δ’rt ZY wyδp’(t)[大きな破損 (Frag.Rus.) kw prnxwntk(?) ’x]šy-wn’kw s’r m’δ ptyškwy’(n)[t? 軽微な破損で次行へ]

15行 (1) (••••)[ ](’šm)’xprn ’xš’w’nδ’ry w’δy n(y)sty ’skwδ’skwn ZY ’xš’w’ncykw ’rkh šyr γr’n ZY k(w)z-py xcy kδ’m ’yδ’k pr γ(n)[y (2) Z](Y) mrt’nyh *s’(r) L’ p(t••)nty ZY pr δynh γrβ’kyh [(4) z-]’wr ’xš’w’nδ(’r••••••••) L’ •••••••••y wyspδ(ry)t[ある程度破損 (6) pr γny] (Z)Y mrt’nyh MN s’t ’’z-’tyty yx(ws)t[’y ZY ’ny’z-’nkw? 大きな破損 (Frag.Rus.)](h) ’nβrz-βr’t δ[’r]t [(7)](•)x(y) 次行に続く

16行 (1) [c’](n)kw mwn’kw *ptškw’nh pty-(sy)nt ZY pr s’t pw(yrw)xty xwy-štr ’yl ’wk’sy ’l-pw xwtl-wγ t(yk)’yn n’m δ’βr ZY xwt(y)[(2) M](N) ’’z-y mrts’r MN s’t ’yδ’yty yxwst’y ZY ’ny’z-’nk[(4)] wm’t ZY ’(β)c[’n]pδ[yk](L’) xypδ[ある程度破損 (6)](•) ZY cntr pr δynh cywyδ p’t(••••)[大きな破損 (Frag.Rus.)](yw) rtms (’w)[(7)](k)[••](’)n (’ncm)nw c’nkw 次行に続く

17行 (1) (••••)[ ](p)wkw ’xšy-wn’k z-mnyh ’’xw’š wβ’ ZY wyδp’t δ(yn)m(y)ncw pts’k δ(βty)w k’m ’’(x)w(’š)t rty xwty y(’)xy (’)[(2)x]šy-wn’k wm’t ky pr y’kwβ βr’y-(št)’k ’xšnyrkw xypδ[(4)]CWRH *pystδ’rt (rty δnn γzny ZY γ)[r’m’kw?](••) ’’γ(t••)[ある程度破損 (6)]ty nβ’nt w’št nβyr’k (z-)mn(w)(?) [大きな破損 (Frag.Rus.) ’]xšw’(nδ)[’(7)]ry w’δy nysty L’ wm’t pr

18行 (1) y’k[wβ βr](’yš)ty ’xšn(y)rkw wysprδ γr’n γny ZY mrt’nyh wyn’ncykw ’krtw δ’rt ZKn 40 RYPW ptšm’ry x(r)γyz-y x’γ-’n (pr)[(2) x]ypδ δsty’ pr š(yr) p(’)δ p’š’y rtšy ’xš’w’nh ’’st w’r’kw ZY (pw)[(4)](•)syrk kw(r)δ mr(t)[xm’yt](L’?) [xy]pδ (••)[ある程度破損 (6) ky](m’)k(?) x’γ-’n(y) β’tryncw (••w••••••) [大きな破損 (7) tw]γ ZY krt’k δβr’ntskwnw rtms γrβ 次行に続く

19行 (1) prwrt[’k M]N k(ws)’n γr’n twp’ytc’ny ’sp’δ mnxw’y ZY ctβ’r twγr’y(s)tny ZY γrβ ’(n)y-’ty ’wt’kt wyš’nty (’y)δ(’)yt (x)[ypδ (2) ’x]š’w(’n)h (xw)ty pty-(c)xš (rt)ms ’δry xrl-wγt

n’βt MN γnt’k [s’(4)]n twp(yt)y p[yδ’r?]y t[ある程度破損 (6) γ](rβ) prwrt’kw γ(n’y)[ZY mrt’nyh? 大きな破損 (7)](t)δ’rt ’rt’wty ZY nγ’wš’kty γr’n wrcy-’w(’)kw 次行に続く

20 行 (1) (’)krtw δ’rt (r)[t]y CWRH ptw(y)sty xrl-wγty ’nβr(z)-kr ’l-pw yncw pyl-k’ ypγw nyšyδ twγ ZY n’m δ’βr ZY m(’yδ) (’)’st(ny)k tw[rk(2)y]š x(w)β x’γ-’n ky pr δs’ p’δ ’δry twrkyš ’xš’w’nδ’r wm’t ZY (•)[(4)](••δt) MN [ある程度破損 (6)] (’)mn x’γ-’n (•••)[大きな破損 (7) p](r) wyš’nt ’nβrz-kr w’sty rtms pr mγ-wn t’z-yk’n’y 次行に続く

21 行 (1) [’x]š’w’nyh (pyz)t ZY p(r)šk’r wm’t ZY prnpδy ’xšy-wn’k c’nkw c’δr xr’mtδ’rt kw xwr’s’n xm’yr ZY kw (’n)[y (2) γr](β ’)wt’kcykt xm’yr ZY ’xš’w’nδ’r s’r prm’nh (pr’)šy wyš’nt[ある程度破損 (6)](n)γ’wš’kt [大きな破損 (7)] mwmyn xm’yr prm MN prnxwnt’kw ’xšy-wn’k 次行に続く

22 行 (1) [p’](š) ZY pckwyry [w](’)β prw’rt’k ’rp’st’k (’’z-’ty)t ZY (γr)’n nm’ck’n βšmtw δ’r’nt c’nkw p(rnxw)[nt’k (2)]’xšy-wn’k prw c’δr ’wt’kt wyptm’kw γr’n δynmyncw (p)[ts’k(?) ある程度破損 (6)](•) s’r (•••)[大きな破損 (7)]tδ’rt ZY ZKwy mγ-wnw ’xš’w’nyh pr βγ(y) 次行に続く

23 行 (1) [m’rm’ny δynh wγ](š)y ZY xws’nty-’kh ’krty p’rZY (pry)-myδ ’xš’w’nyh cw δynmyncw pts’k (•••••)[ある程度破損 (2) ’βc’np]δy xr’mty L’ wm’t pts’r c’nkw βγy ’xšy-wn’k [ある程度破損 (6)](δ’)rt [大きな破損 (7)]’(w•)[ ]

24 行 [大きな破損 (2)] c’δr ctβ’r kyr’n p(••••••••••••••)[

Fragment 9 = ビチェース報告書断片 No. 7b

推定 32*行]••••[

推定 33*行](w βγ)y (ZY) δ(w••)[

推定 34*行]••• (pr)’yw γr’n (w’)[

推定 35*行]’sp(t)’kw prβ’yrt[δ’rt?

推定 36*行 γz-](n)y (Z)Y γr’m’kw γrβ 1-(LPw)[’](’p)ryw[n?

推定 37*行](•) w’nkw pr RBkw γrβ’ky’kh cntr δynh ZY[

推定 38*行](•••••t) ypγw mγ-wnw t’z-’yk’n’k ’xš’w’nh[

推定 39*行](•) ZY šyrn’m ky ctβ’r kyr’n wyδβ’xs w’nkw ZY (w•)[

推定 40*行](w)βyw ZY ms MN ctβ’r kyr’nw ’xš’w’nty-(h)[

推定 41*行]’’l-pw pyl-k’ x’γ’n [

推定 42*行](k)y mδy ’skw’nt[

推定 43*行](•) m(•)[ ](••)[

Fragment 8（位置不明）

1 判読不可能

2 c’n](k)w βγy ZY δynh (••••••)[

3](t) γrβ krtr wxš[n’yt?

4](γ)r’n xws’nty’kh ’krty [cyw]yδ sγ[tm’n

5] s’r sytδ’rt ZY pr ’βt’δ’ny’ [

6](••) δβnz pty(’r•••)[

7](••••••)[

8](••••)[

和訳

碑額　この Ay Tängridä Qut Bulmïs Alp Bilgä（という名前の）神のごときウイグルの可汗を賞賛するためのモニュメントを我々は書いた．

1 行　(1) この Ay Tängridä Qut Bulmïs Alp Bilgä（という名前の）神のごときウイグルの可汗を賞賛するためのモニュメントを我々は書いた．(3) 祖父 Alp (4) Ïnanču Baγa Tarqan が[<ある程度破損> (5)] これをまた中国の文に[<大きな破損>]

2 行　(1) 祖父である賢い支配者，神々から栄光（カリスマ）を手に入れた偉大なトルコ世界の帝王，Ay Tängridä Qut Bulmïs [Alp Bilgä 可汗の(?)…(3)ウイ]グル(?)の王子である大臣が[大いなる]技倆と男[らしさにより<ある程度破損>(5)]我々は書いた，我々全員は[＜大きな破損＞]

3 行　(1) 玉座の（そばで仕える？）Oγuz（族の）宰相 Alp Ïnanču Baγa Tarqan＜空白＞Yaγlaqar（族の）大臣 Ötür Baγa Tarqan＜空白＞Yaγlaqar（族の）大臣 Qutluγ B[aγa Tarqan＜空白＞[…]（族の）(3)]大臣＜空白＞(4)[<ある程度破損>(5)]大臣＜空白＞[<大きな破損>]

4 行　(1) （彼らは国を）維持した．栄光と栄光持てることの力により（それを彼らは）維持した．どのような支配者がいようとも，賢く勇敢で雄々しかった．そして[(2)]支配者たち[全員]は[(3)]そちらに[(4)]到達し（適切な）時に[<ある程度破損> (5)]な教えと[教訓？<大きな破損>]

5 行　(1)（彼は…）であった．自分の技倆と男らしさ，智慧と理解力の力で何年もの間領土を維持した．彼が身体を棄てた（＝身罷った）とき，その後に息子[の(2) ① Köl Bi]lgä 可汗が[位に就いた(3) …(4)]（他の）人たちからは区別され雄[々しかった<大きな破損>]

6 行　(1) といっしょに．そして彼らは阿史那氏の支配者を捕らえ，彼ら自身が支配者になり，1 年間領土を維持した．しかし(2)[すぐに(?)]分裂があり，それらの支[配者たち(4)]からもう一度領土を取り上げた．そして[<大きな破損>]

7 行　(1) 彼は降伏させた．そして彼はすべての支配者をみんな自分の方へ引き寄せた．領土はとても整備され強力になった．彼は何年もの間領土を維持した．(2) ①[Kö]l Bilgä 可汗が身体を棄てた（＝身罷った）とき，②Tängridä Bolmïs Il Itmis [Uluγ Bilgä 可汗が位に即いた<大きな破損>[...]可汗が身罷ったとき，③ Kün Tängridä Qut Bulmïs Il Tutmïs Alp Külüg Bilgä]

8 行　(1) 可汗が位についた．彼はすべての側面でとても驚嘆すべきであり格別であったので，（その彼が）支配者の座に即いたとき，四方に驚愕と恐れが(2)[広]まった．（彼は）栄光と

栄光持てること，(4)[信仰]と智慧，技倆と[男らしさ]において[<大きな破損>]

9 行　(1) そして（可汗への）依頼のメッセージが来た：「この逼迫（した状況）から救って下さい．そして彼に援助を与えて下さい．」神（のごとき）帝王はこの依頼のメッセージ聞いたとき，自ら強力な(2)軍隊とともに天子の国（＝中国）へと(4)赴かれた．その軍隊の[<大きな破損>]

10 行　(1) 彼らは再び戦闘を行なった．異教徒たちはみんな神なるマール・マーニーの宗教をそれほど迫害したのでこの人々は追放された．神（のごとき）帝王は(2)強力な軍隊とともに，ここオチュケンの地に連れて来はじめた[<ある程度破損>(6)]数にして四[<大きな破損>]

11 行　(1) 我々は[…]している．そして我々は誤った法（教え）を持っていて，悪魔たちに仕えている．さて，神（のごとき）帝王はこの（人間の）手で作られた（偶）像をみんな(2)火で燃やし，宗教としては神なるマール・マーニーの宗教を受け入れることを（臣下たちに）委託した．(4)それから，神（のごとき）帝王は[＜ある程度破損＞(6)]あなたがた（或いは：帝王である，あなたは）は受け入れる事はできない（或いは：できなかった）．[なぜ]なら[<大きな破損>]

12 行　(1) その時，神（のごとき）帝王は同意して，命令を発した：「受け入れなさい．その故に私たちは，悪魔たちに供養と，犠牲と捧げ物を捧げた．その（人間の）手で作られた(2)（偶）像を富という名前の土地で，みんな火で燃や(4)そう．」そして偉大な神（のごとき）帝[王と]王子たちは…神なるマール・マーニーの[宗教＜ある程度破損＞(6) マニ教徒たちは往来した(?)]上方と下方に（＝東西に）．神（のごとき）マール・ネーウ・ルワーン慕闇は[オルホンの宮廷にやってきた(?)<大きな破損> (Frag.Rus.)]こちらに帰った．そして領土の各地に<次行に続く>

13 行　(1) 広まり，（往来に？）途切れることがなくなった．③牟羽可汗が身体を棄てた（＝身罷った）とき，かくして④Alp Qutluγ Bilgä 可汗が位に即いた．自身はとても賢く(2)[雄々]しかった．そして上方でも下方において（＝東でも西でも）国家に関わる多くの仕事を行ない，領土を[すばらしく(?)維持した＜ある程度破損＞(6)この可汗が] 身体を棄てた（＝身罷った）とき，⑤ Tängridä Bolmïs Külüg Bilgä 可[汗が位に即いた<大きな破損>(Frag.Rus./Paris)]そして全部を保持した．[そして] <次行に続く>

14 行　(1) ⑥ Qutluγ Bilgä 可汗が，（この）世界を（出て）行ったとき（＝崩御したとき），そのとき⑦ Tängridä Ülüg Bulmïs Alp Qutluγ Uluγ Bilgä 可汗（＝第 7 代懐信可汗）が(2)位に[即]いた．偉大な信仰と智慧，技倆と男らしさ，栄光持てることと栄光あることによって[＜ある程度破損＞ (6)領土を]とても良く整備された状態で維持した．そしてその時，[<大きな破損>(Frag.Rus.) 栄光ある(?)]帝王に，次のように彼らは申し上げた（＝奏上した）．[＜軽微な破損で次行へ＞]

15 行　(1) […]あなた様は支配者の座に座っておられ，国家に関する仕事はきわめてすばらしくかつ精力的です．誰も技倆(2)と男らしさにおいてあなたに勝る者はおりません（？）．そし

て宗教の智慧(4)の力で，支配者[…]ない[…]王子たち[＜ある程度破損＞(6) 技倆]と男らしさにおいてすべての貴族たち（＝自由人たち）から区別され[別格だった<大きな破損> (Frag.Rus./7)…を，]彼は世話した（或いは：訪れた）．[…] <次行に続く>

16 行　(1) […]この奏上の言葉に同意して，すべての buyruq「大臣」たちの中で尊長の il ögasi「宰相」たる Alp Qutluγ に，tegin「王子」の名称を与えた．そして彼自身は(2)誕生のとき[から]すべての人たちとは区別され別格(4)であった．そして世界の[…]自分の[＜ある程度破損＞(6)]そして内部では宗教においてその時から[<大きな破損> (Frag.Rus.)]そしてまた[(7)…]教団(?)．<次行に続く>

17 行　(1) […]牟羽帝王の時に”xw’š（不明語）があったように，その時に宗教のモニュメントをもう一度”xw’š（不明語）しようと欲した．そして自らは勇猛な(2)帝王であって，天使ヤコブの特徴で自分(4)自身を飾り立てていた(?)．そして富と財[産]を以て[＜ある程度破損＞(6)]のそばにいた．相談役の時(?) [<大きな破損> (Frag.Rus./7)]支配者の座に就いていなかった．<次行に続く>

18 行　(1) 天使ヤコブのように至るところで大きな技倆と男らしさを示した．40 万の数のキルギス（族）の可汗を(2)自らの手で（放つ）すばらしい矢によって放り飛ばした．そして彼の領土を取った．（その国は）空虚で[(4) …]がなく，そこには人は[...]しない[＜ある程度破損＞ (6)[キマ]クの(?)]可汗を降伏させた[<大きな破損> (7)賠償]金(?)と富の蓄積(?)を，彼らは（今も）与えている．また<次行に続く>

19 行　(1) 何度もクチャからチベットの大軍を撃破し，４トグリの地と多くの奪取されていた国々（と）その人々の(2)領土を自ら手にした．そしてまた三（姓）のカルルクの人々は邪悪な(4)[敵]であるチベットのせいで[＜ある程度破損＞(6)]何度も技倆[と男らしさ(?)<大きな破損> (7)]彼は[…]をした．（そして）マニ教の僧侶と聴者（＝一般信者）たちに大きな安寧を<次行に続く>

20 行　(1) もたらした．そして自分自身を差し出したカルルクの大臣の Alp Inčü Bilgä を葉護に任命し，纛（＝旌節）と称号を与えた．そしてこの本来の(2)トゥルギシュの領主である可汗で 10 の矢の 3 つのトゥルギシュ（＝十箭三姓突騎施）の支配者であった者[…(4)]から[＜ある程度破損＞ (6)]可汗[<大きな破損> (7)]彼らの大臣に据えた．そしてまた全大食の<次行に続く>

21 行　(1) 領土に，弾圧と迫害があった．それで栄光ある帝王は下方へ（＝西方へ）赴かれたときに，ホラーサーンのアミールと[他]の(2)[多]くの国々のアミール及び支配者たちに命令を発した．彼ら[＜ある程度破損＞ (6)]聴者たち（＝マニ教の一般信者たち）[<大きな破損> (7)]カリフまでもが栄光ある帝王に対する，<次行に続く>

22 行　(1) [尊敬]と畏敬から何度も有力な貴人と莫大な貢ぎ物を送ってきた．栄光ある(2)帝王は，下方（＝西方）の国々に計り知れないほど偉大な宗教の[モニュメントを（？）＜ある程度破損＞ (6)] へ[<大きな破損> (7)彼は…]をした．そして全領土において，神である<次行に

続く>

23 行　(1) [マール・マーニーの宗教]において[喜]びと満足が生じた．なぜならこの領土において宗教のどんなモニュメントが[＜ある程度破損＞(2) この世界]を（出て）行ってはおられなかった（＝お隠れになっていなかった）．それから神（のごとき）帝王は[…した]とき [＜ある程度破損＞(6)]した．[<大きな破損> (7)][. . .]

24 行　[<大きな破損>] (2) 下方（＝西方）の四方に[<大きな破損>]

Fragment 9 = ビチェース報告書断片 No. 7b

推定*32 行　…

推定*33 行　…神と…

推定*34 行　…といっしょに偉大な…

推定*35 行　…完全に説明した…

推定*36 行　…[宝]物と財産を多く，1000(?)…祝福(?) . . .

推定*37 行　…かくして偉大な智慧によって内側の宗教に関して…

推定*38 行　…葉護は全大食の領土…

推定*39 行　…四方に広まった名声（の内容）は次のようで…

推定*40 行　…そしてまた四方の領土から…

推定*41 行　…⑧ Alp Bilgä 可汗（＝第 8 代保義可汗）…

推定*42 行　…彼らはここにいる…

推定*43 行　…

Fragment 8（位置不明）

1　判読不可能

2　…神と宗教が…したとき…

3　…多くのグループの［救済者たち(?)]…

4　…大きな満足が生じた．その全[員か]ら…

5　…へ持ち上げたそして拂多誕の位(?)において…

6　…広範な (?)敵対…

7　判読不可能

8　判読不可能

附録２　大阪大学所蔵ビチェース隊収集カラバルガスン碑文拓本画像データ一覧

1996〜1998 年のビチェース隊によるモンゴル国現地調査で収集された拓本の一部は，大阪大学に所蔵されている．そこに含まれる KB 碑文の拓本の画像データは，オンラインデータベース Osaka Univesrity Knowledge Archive (OUKA) で公開されているので，参照の便のために URL を併記して一覧しておく（ただし，オンライン上の画像データは，上下が逆転していることもあるので閲覧の際には注意を要する）

以下，拓本の No. については，森安／吉田／片山 1999, p. 212 参照.

Bichees No. Kara-Balgasun	言語・文字	OUKA URL
No. 5	漢文面（中段）	http://hdl.handle.net/11094/20838
No. 6	ソグド語面（中段）	http://hdl.handle.net/11094/20860
No. 7a, 7b*	ソグド語面（中段）	http://hdl.handle.net/11094/20813
		http://hdl.handle.net/11094/20815
No. 7c**	ルーン文字面	http://hdl.handle.net/11094/20807
No. 8	漢文面	http://hdl.handle.net/11094/20849
No. 9a	漢文面右端・ソグド語面左端（中段）	http://hdl.handle.net/11094/20830
No. 10a	ソグド語面（左端，No. 13 と接合）	http://hdl.handle.net/11094/20825
No. 10b	ルーン文字面（ただし文字無し）	http://hdl.handle.net/11094/20808
No. 12	ルーン文字面（位置不明）	http://hdl.handle.net/11094/20805
No. 13	ソグド語面（下端，No. 10a と接合）	http://hdl.handle.net/11094/20796
No. 14	ルーン文字面（位置不明）	http://hdl.handle.net/11094/20819

* 2 種類の画像データは同一の拓本を撮影したもの.

** 画像データに添付されたキャプションに「Kara-Balgasun No. 7b, 7c」とあるのは誤記.

参考文献（abc 順）

安部 健夫　Abe, Takeo

1954 “Where Was the Capital of the West Uighurs?” In: *Silver Jubilee Volume of the Zinbun-kagaku-kenkyūsyo*, Kyoto: Kyoto University, pp. 435–450.

1955 『西ウィグル国史の研究』京都，彙文堂書店.

Arden-Wong, L.

2012 “The Architectural Relationship between Tang and Eastern Uighur Imperial Cities.” In: Zs. Rajkai / I. Bellér-Hann (eds.), *Frontiers and Boundaries: Encounters on China's Margins*, (Asiatische Forschungen, 156), Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, pp. 11–47.

2015 “Preliminary Thoughts on the Marble Inscriptions from Karabalgasun.” *Journal of Inner Asian Art and Archaeology* 6 (2011), pp. 75–100, incl. 5 pls. + 2 pls. in colour.

2016 “Some Thoughts on Manichaean Architecture and Its Applications in the Eastern Uighur Khaganate.” In: S. N. C. Lieu / G. B. Mikkelsen (eds.), *Between Rome and China: History, Religions and Material Culture of the Silk Road*, (Silk Road Studies, 18), Turnhout: Brepols, pp. 181–253.

Beckwith, Ch. I.

1987 *The Tibetan Empire in Central Asia: A History of the Struggle for Great Power among Tibetans, Turks, Arabs, and Chinese during the Early Middle Ages*. Princeton: Princeton University Press.

Bemmann, J. et al.

2014 “Biomarkers in Archaeology: Land Use around the Uyghur Capital Karabalgasun, Orkhon Valley, Mongolia.” *Praehistorische Zeitschrift* 89-2, pp. 337–370.

Chavannes, Éd.

1897 “Le nestorianisme et l'inscription de Kara-Balgassoun.” *Journal Asiatique* 1897 jan.-fév., pp. 43–85.

1903 *Documents sur les Tou-kiue (Turcs) Occidentaux*. (*Сборникъ трудовъ Орхонской экспедиціи,* VI). St. Pétersbourg: Commissionnaires de l'Académie impériale de sciences. (Repr.: Paris, 1941 & Taipei, 1969.)

Chavannes, Édouard / Pelliot, P.

1913 “Un traité manichéen retrouvé en Chine (Deuxième partie).” *Journal Asiatique* 1913 jan.-fév., pp. 99–199 & mar.-avr., pp. 261–394.

程 溯洛　Cheng, Suluo

1993 「釈漢文《九姓回鶻毗伽可汗碑》中有関回鶻和唐朝的関係」，程遡洛『唐宋回鶻史論集』北京，人民出版社，pp. 102–114.

Clark, L. V.

1997 “The Turkic Manichaean Literature.” In: P. Mirecki / J. BeDuhn (eds.), *Emerging from Darkness: Studies in the Recovery of Manichaean Sources*, (Nag Hammadi and Manichaean Studies, 43), Leiden / New York / Köln: Brill, pp. 89–141.

2000 “The Conversion of Bügü Khan to Manichaeism.” In: R. E. Emmerick, W. Sundermann and P. Zieme (eds.), *Studia Manichaica: IV. Internationaler Kongress zum Manichäismus, Berlin, 14.–18. Juli 1997*, (Berichte und Abhandlungen der Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften, Sonderband 4), Berlin: Akademie Verlag, pp. 83–123, incl. 3 pls.

2009 “Manichaeism among the Uygurs: The Uygur Khan of the Bokug Clan.” In: J. D. BeDuhn (ed.), *New Light on Manichaeism: Paper from the Sixth International Congress on Manichaeism*, Leiden / Boston: Brill, pp. 61–71.

Clauson, G.

1972 *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*. Oxford: Clarendon Press.

Dähne, B.

2016 “Karabalgasun: City Layout and Building Structures.” In: L. Russell-Smith / I. Konczak-Nagel (eds.), *The Ruins of Kocho: Traces of Wooden Architecture on the Ancient Silk Road*, Berlin: Museum für Asiatische

Kunst, pp. 35–41, incl. figs. in colour.

2017 *Karabalgasun: Stadt der Nomaden. Die archäologischen Ausgrabungen in der frühuigurischen Hauptstadt 2009–2011*. Wiesbaden: Reichert Verlag.

Dähne, B. / U. Erdenebat

2012 "Archaeological Excavations in Karabalgasun by K. Maskov during Kotwicz's Expedition of 1912: A New Contribution to the Research History of the Capital of the Eastern Uighur Khaganate." In: J. Tulisow et al. (eds.), *In the Heart of Mongolia: 100th Anniversary of W. Kotwicz's Expedition to Mongolia in 1912,* Cracow: Polish Academy of Arts and Sciences, pp. 245–263.

De Lacoste, B.

1911 *Au pays sacré des anciens Turcs et des Mongols*. Paris: Emile-Paul.

De la Vaissière, É.

2007 *Samarcande et Samarra: Elites d'Asie Centrale dans l'Empire Abbasside.* (Studia Iranica, cahier 35), Paris: Association pour l'avancement des études iraniennes.

Devéria, G.

1892 "Transcription, analyse et traduction des fragments chinois du second et du troisième monument." In: Société Finno-Ougrienne 1892, pp. XXVII–XXXVIII.

Elverskog, J.

1997 *Uygur Buddhist Literature*. (Silk Road Studies, 1), Turnhout: Brepols.

Franken, Ch.

2016 "Excavations in the Old Uygur Capital Karabalgasun: Some New Results." In: L. Russell-Smith / I. Konczak-Nagel (eds.), *The Ruins of Kocho: Traces of Wooden Architecture on the Ancient Silk Road*, Berlin: Museum für Asiatische Kunst, pp. 27–34, incl. figs. in colour.

Franken, Ch. / U. Erdenebat / T. Batbayar

2014 "Erste Ergebnisse der Grabungen des Jahres 2013 in Karabalgasun und Karakorum / Mongolei." *Zeitschrift für Archäologie Außereuropäischer Kulturen* 6, pp. 355–372.

福島 恵　Fukushima, Megumi

2018 「国立国会図書館蔵「無慮山荘旧蔵拓本」」『学習院大学国際研究教育機構研究年報』4, pp. 47–69.

Gabain, A. von

1952 "Die Frühgeschichte der Uiguren: 607–745." *Nachrichten der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens* 72, pp. 18–32, 48–49.

1954 "Buddhistische Türkenmission." In: J. Schubert / U. Schneider (eds.), *Asiatica: Festschrift Friedrich Weller,* Leipzig: Otto Harrassowitz, pp. 161–173.

1961 "Der Buddhismus in Zentralasien." In: B. Spuler et al. (eds.), *Handbuch der Orientalistik,* Abt. 1, Bd. 8, Absch. 2, *Religions-geschichte des Orients in der Zeit der Weltreligionen,* Leiden / Köln, pp. 496–514.

Gulácsi, Zs.

2001 *Manichaean Art in Berlin Collections. A Comprehensive Catalogue of Manichaean Artifacts Belonging to the Berlin State Museums of the Prussian Cultural Foundation, Museum of Indian Art, and the Berlin-Brandenburg Academy of Sciences*. Turnhout (Belgium): Brepols.

Hamilton, J.

1986 *Manuscrits ouïgours du IXe-Xe siècle de Touen-houang*. 2 vols., Paris: Peeters.

1990 "L'inscription trilingue de Qara Balgasun d'après les estampages de Bouillane de Lacoste." In: A. Haneda (ed.), *Documents et archives provenant de l'Asie Centrale*, Kyoto: Association franco-japonaise des études orientales, pp. 125–133.

羽田 亨　Haneda, Tōru

1957a 「唐代回鶻史の研究」『羽田博士史学論文集　上巻　歴史篇』京都，京都大学文学部東洋史研究会，pp. 157–324.

1957b 「九姓回鶻と Toquz Oγuz との関係を論ず」『羽田博士史学論文集　上巻　歴史篇』京都，京都大学文学部東洋史研究会，pp. 325–394.（初出：『東洋学報』9-1, 1919）
1958 「回鶻文字考」『羽田博士史学論文集　下巻　言語・宗教篇』京都，京都大学文学部東洋史研究会，pp. 1–38.

Hansen, O.
1930 "Zur soghdischen Inschrift auf dem drei sprachigen Denkmal von Karabalgasun." *Journal de la Société Finno-Ougrienne* 44-3, 39 p.

Hayashi, Toshio
2010 "Karabalgasun i. The Site." In: *Encyclopædia Iranica*, vol. 15-5, New York: Encyclopædia Iranica Foundation, pp. 529–530.

林 俊雄／森安 孝夫　Hayashi, Toshio / Moriyasu, Takao
1999 「カラ=バルガスン宮城と都市遺址」，森安／オチル（編）1999, pp. 199–208.

華 濤　Hua, Tao
1996 「北庭之戦前后回鶻与大食的関係」，南京大学元史研究室（編）『内陸亜州歴史文化研究：韓儒林先生紀念文集』南京，南京大学出版社, pp. 457–465.
2000a 『西域歴史研究（八至十世紀）』上海，上海古籍出版社.
2000b 「北庭之戦后的回鶻・吐蕃和葛邏禄」『中亜学刊』5 (1996), 2000, pp. 141–151.

Hüttel, H.-G. / B. Dähne
2012 "Ausgrabungen in Karabalgasun 2009 und 2010." *Zeitschrift für Archäologie Außereuropäischer Kulturen* 4, pp. 419–432.
2013 "Die Ausgrabungen in Harbalgas/Karabalgasun 2011." *Zeitschrift für Archäologie Außereuropäischer Kulturen* 5, pp. 341–358.

Hüttel, H.-G. / U. Erdenebat
2010 *Karabalgasun and Karakorum: Two Late Nomadic Urban Settlements in the Orkhon Valley: Archaeological Excavation and Research of the German Archaeological Institute (DAI) and the Mongol Academy of Sciences 2000–2009*. Ulan Bator: Botschaft der Bundesrepublik Deutschland.

石田 幹之助　Ishida, Mikinosuke
1925 「敦煌発見『摩尼光仏教法儀略』に見えたる二三の言語に就いて」，池内宏（編）『白鳥博士還暦記念東洋史論叢』東京，岩波書店，pp. 157–172.［再録：石田 1973, pp. 285–298.］
1973 『東亜文化史叢考』東京，（財）東洋文庫.

Камалов, А. К.
2001 *Древние уйгуры VIII–IX вв.* Алматы: Наш мир.

Karev, Y.
2015 *Samarqand et le Sughd à l'époque 'Abbāsside. Histoire politique et sociale*. (Studia Iranica, cahier 55), Paris: Association pour l'avancement des études iraniennes.

Karlgren, B.
1957 *Grammata Serica Recensa*. Stockholm. (Repr.: 1961.)

片山 章雄　Katayama, Akio
1981 「Toquz Oγuz と「九姓」の諸問題について」『史学雑誌』90-12, 1981, pp. 39–55.

Klimkeit, H.-J.
1982 "Manichaean Kingship: Gnosis at Home in the World." *Numen* 29-1, pp. 17–32.
1993 *Gnosis on the Silk Road: Gnostic Texts from Central Asia*. San Fancisco: Harper Collins.

Koch, E. (Tr. by M. P. Lemosof)
1891 "Deux pierres avec inscriptions chinoises." *T'oung Pao* 2, pp. 113–124.

Le Coq, A. von
1912 *Türkische Manichaica aus Chotscho,* I. (*Abhandlungen der Preußischen Akademie der Wissenschaften*,

Phil.-hist. Klasse, Berlin, 1911, No. 6). Berlin.

林 梅村　Lin, Meicun
2010　「蒙古高原與天山東麓的回鶻古城」，朱鳳玉／汪娟（編）『張廣達先生八十華誕祝壽論文集』台北，新文豊出版公司, pp. 677–712.

林 梅村／陳 凌／王 海城　Lin, Meicun / Chen, Ling / Wang, Haicheng
1999　「九姓回鶻可汗碑研究」『欧亜学刊』1, pp. 151–171.

馬 小鶴　Ma, Xiaohe
2012　「摩尼教耶倶孚考：福建霞浦文書研究」『中華文史論叢』2012-2, pp. 285–308.

Mackerras, C.
1972　*The Uighur Empire According to the T'ang Dynastic Histories: A Study in Sino-Uighur Relations 744–840*. Canberra: Australian National University Press.
1990　"The Uighurs." In: D. Sinor (ed.), *The Cambridge History of Early Inner Asia*, Cambridge &c.: Cambridge University Press, pp. 317–342.
2000　"Relations between the Uygur State and China's Tang Dynasty, 744–840." In: D. Christian / C. Benjamin (eds.), *Realms of the Silk Roads: Ancient and Modern*, (Silk Road Studies, 4), Turnhout (Belgium): Brepols, pp. 195–207.

松田 壽男　Matsuda, Hisao
1970　『古代天山の歴史地理学的研究（増補版）』東京，早稲田大学出版部.

Minorsky, V.
1948　"Tamīm ibn Baḥr's Journey to the Uyghurs." *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 12-2, pp. 275–305.

護 雅夫　Mori, Masao
1974　「モンゴリア出土五銖銭の突厥文字銘文考」『考古学ジャーナル』92, 1974, pp. 2–5.（改題再録：「モンゴル高原出土の五銖銭の突厥文字銘文について」，護雅夫『古代トルコ民族史研究』II，東京，山川出版社, 1992, pp. 177–186.）
1977　「古代トルコ民族と仏教」『現代思想』5-14, pp. 114–124.

森安 孝夫　Moriyasu, Takao
1972　「書評：C. マッケラス『両唐書より見たウイグル帝国』」『東洋学報』55-3, pp. 123–133.
1979　「増補：ウイグルと吐蕃の北庭争奪戦及びその後の西域情勢について」，流沙海西奨学会（編）『アジア文化史論叢』第 3 巻，東京，山川出版社，pp. 199–238.（修訂版：森安 2015a, pp. 230–274）
1991　『ウイグル=マニ教史の研究』（『大阪大学文学部紀要』31/32 合併号）豊中，大阪大学文学部.
1997　「大英図書館所蔵ルーン文字マニ教文書 Kao. 0107 の新研究」『内陸アジア言語の研究』12, pp. 41–71, +4 pls.
2002　「ウイグルから見た安史の乱」『内陸アジア言語の研究』17, pp. 117–170, +2 pls.（修訂版：森安 2015a, pp. 2–48）
2003　"Four Lectures at the Collège de France in May 2003. History of Manichaeism among the Uighurs from the 8th to the 11th Centuries in Central Asia."「コレージュ=ド=フランス講演録」In: 森安孝夫 T. Moriyasu (ed.),『シルクロードと世界史』*World History Reconsidered through the Silk Road*,（大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」報告書，第 3 巻），Osaka, Osaka University, pp. 23–111, +15 pls. in colour, +8 maps, +3 figs.
2013　「東ウイグル=マニ教史の新展開」『東方学』126, pp. 142–124（逆頁）.（改題再録：「東ウイグル帝国マニ教史の新展開」，森安 2015a, pp. 536–557）
2015a　『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋，名古屋大学出版会.
2015b　「東ウイグル帝国カリチョル王子墓誌の新研究」『史艸』56, pp. 1–39（横組み頁）.
2019　*Corpus of the Old Uighur Letters from the Eastern Silk Road*. (Berliner Turfantexte 46), Turnhout: Brepols.

森安 孝夫／A. オチル（共編）　Moriyasu, Takao / A. Ochir (eds.)
1999　『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』豊中，中央ユーラシア学研究会.

森安 孝夫／吉田 豊 Moriyasu, Takao / Yoshida, Yutaka
1998 「モンゴル国内突厥ウイグル時代遺蹟・碑文調査簡報」『内陸アジア言語の研究』13, pp. 129–170.

森安 孝夫／吉田 豊／片山 章雄 Moriyasu, Takao / Yoshida, Yutaka / Katayama, Akio
1999 「カラ=バルガスン碑文」，森安／オチル（編）1999, pp. 209–224.

村井 恭子 Murai, Kyoko
2018 「ウイグル可汗の系譜と唐宋漢籍史料：懐信と保義の間」『東洋学報』100-2, pp. 33–65.

Müller, F. W. K.
1912 "Der Hofstaat eines Uiguren-Königs." In: *Festschrift für Vilhelm Thomsen,* Leipzig, pp. 207–213. (Repr.: *Sprachwissenschaftliche Ergebnisse der deutschen Turfan-Forschung*, III, Leipzig: Zentralantiquariat der Detchen Demokratischen Republik, 1985, pp. 191–197.)
1913 *Ein Doppelblatt aus einem manichäischen Hymnenbuch (Maḥrnâmag)*. Abhandlungen der Preußischen Akademie der Wissenschaften, Phil.-hist. Klasse, 1912, No. 5, 40 pp. + 2 pls. (Repr.: *Sprachwissenschaftliche Ergebnisse der deutschen Turfan-Forschung*, III, Leipzig: Zentralantiquariat der Detchen Demokratischen Republik, 1985, pp. 151–190, pls. VII-VIII.)

根本 誠 Nemoto, Makoto
1968 「唐代の天可汗に就いて」『遊牧社会史探究』第 36 冊, pp. 1–10.

野村 栄三郎 Nomura, Eizaburō
1937 「蒙古新疆旅行日記」，上原芳太郎（編）『新西域記』下巻，東京，有光社, pp. 439–555.

小野川 秀美 Onogawa, Hidemi
1943 「蒙古史中世（突厥回鶻時代）」，支那地理歴史大系刊行会（編）『支那周辺史（上）』東京，白揚社, pp. 335–427.

Palumbo, A.
2003 "La versione cinese dell'inscrizione trilingue di Karabalgasun." In: G. Gnoli (ed.), *Il Manicheismo,* Vol. I: *Mani e il Manicheismo*, Milano: Fondazione Lorenzo Valla / Arnoldo Mondadori Editore, pp. 249–277.

Pelliot, P.
1914 "La version ouigoure de l'histoire des Princes Kalyāṇaṃkara et Pāpaṃkara." *T'oung Pao* 15, pp. 225–272.
1929 "Neuf notes sur des questions d'Asie Centrale." *T'oung Pao* 26, pp. 201–266.

Provasi, E.
2003 "La versione sogdiana dell'inscrizione trilingue di Karabalgasun." In: G. Gnoli (ed.), *Il Manicheismo,* Vol. I: *Mani e il Manicheismo*, Milano: Fondazione Lorenzo Valla / Arnoldo Mondadori Editore, pp. 235–242.

Radloff, W. (Радлов, В. В.)
1892 *Atlas der Alterthümer der Mongolei: Arbeiten der Orchon-Expedition,* 1. Lieferung, St. Petersburg: Buchdruckerei der Akademie der Wissenschaften.
1895 "Das uigurische Denkmal von Kara-Balgassun." In: W. Radloff, *Die alttürkischen Inschriften der Mongolei,* 3. Lieferung, St. Petersburg: Commissionaires de l'Académie impériale des sciences, (Repr.: Osnabrück 1987), pp. 283–298.

Rybatzki, V.
2000 "Titles of Türk and Uigur Rulers in the Old Turkic Inscriptions." *Central Asiatic Journal* 44-2, pp. 205–292.

佐口 透 Saguchi, Tōru
1972 「回鶻伝（旧唐書・新唐書）」，佐口透他（訳注）『騎馬民族史』2（東洋文庫 223），東京，平凡社, pp. 299–462.

Schlegel, G.
1891 "Notes sur les inscriptions chinoises de Kara Balgasoun." *T'oung Pao* 2, pp. 125–126.
1896 Die chinesische Inschrift auf dem uigurischen Denkmal in Kara Balgassun. (Mémoires de la Société Finno-Ougrienne 9), Helsingfors.

白石 典之　Shiraishi, Noriyuki
2005　「カラ・バルガスン（オルド・バリク）」，黒田日出男（編）『歴史学事典 12 王と国家』東京，弘文堂，pp. 144–145.

Société Finno-Ougrienne
1892　*Inscriptions de l'Orkhon recueillies par l'expédition finnoise 1890 et publiées par la Société Finno-Ougrienne*. Helsingfors: Société de la Littérature Finnoise.

Sundermann, W.
2001　"Der Manichäismus an der Seidenstraße: Aufstieg, Blüte und Verfall." In: U. Hübner et al. (eds.), *Die Seidenstraße: Handel und Kulturaustausch in einem eurasiatischen Wegenetz*, Hamburg: EB-Verlag, pp. 153–168.
2016　"Manichaeism on the Silk Road: Its Rise, Flourishing and Decay." In: S. N. C. Lieu / G. B. Mikkelsen (eds.), *Between Rome and China: History, Religions and Material Culture of the Silk Road*, (Silk Road Studies, 18), Turnhout: Brepols, pp. 75–90.

鈴木 宏節／齊藤 茂雄　Suzuki, Kōsetsu / Saitō, Shigeo
2014　「オルホン渓谷調査簡報」『遼金西夏史研究会 News Letter』6, pp. 14–19.

田坂 興道　Tazaka, Kōdō
1940a　「回紇に於ける摩尼教迫害運動」『東方学報（東京）』11-1, pp. 223–232.
1940b　「中唐に於ける西北辺疆の情勢に就いて」『東方学報（東京）』11-2, pp. 171–211.

田 衛疆　Tian, Weijiang
2000　「漠北回鶻汗国在西域諸地域的活動及其後果」『西域研究』2000-2, pp. 14–25.

Tremblay, X.
2001　*Pour une histoire de la Sérinde. Le manichéisme parmi les peuples et religions d'Asie centrale d'après les sources primaires*. (Sitzungsberichte der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Phil.-hist. Klasse, 690), Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

王 国維　Wang, Guowei
1919　「唐回鶻毗伽可汗聖文神武碑圖」(宣統己未年＝1919 年作成)，『古石圖録』(上海・廣倉學窘印行『芸術叢編』）所収.
1923　「九姓迴鶻可汗碑跋」『観堂集林』巻 20（再刊：中華書局香港分局，1973 年，pp. 989–997.）

薛 宗正　Xue, Zongzheng
1997　「《九姓回鶻可汗碑》：回鶻阿跌汗朝崛興的紀功碑」『新疆文物』1997-4, pp. 29–33.
2001　「吐蕃・回鶻・葛邏禄的多辺関係考述：関于唐安史乱后的西域角逐」『西域研究』2001-3, pp. 7–20.

Ядринцев, Н. М.
1892　"Предварительныи отчетъ об исследованнях по р. Толе, Орхону и в Южном Хангае." In: *Сборникъ трудовъ Орхонской экспедиціи,* I, Санкт-Петербург, pp. 27–40.
1901　"Отчетъ и дневникъ о путешествіи по Орхону и въ Южный Хангай въ 1891 году." In: *Сборникъ трудовъ Орхонской экспедиціи,* V, Санкт-Петербург, pp. 1–54.

山田 信夫　Yamada, Nobuo
1951　「九姓回鶻可汗の系譜」『東洋学報』33-3/4, pp. 90–113.（再録：山田 1989, pp. 107–127.）
1974　「書評：C. Mackerras, *The Uighur Empire according to the T'ang Dynastic Histories*」『東方学』48, pp. 109–114.
1989　『北アジア遊牧民族史研究』東京，東京大学出版会.

吉田 豊　Yoshida, Yutaka
1988　「カラバルガスン碑文のソグド語版について」『西南アジア研究』28, pp. 24–52.
1990　"Some New Readings of the Sogdian Version of the Karabalgasun Inscription." In: A. Haneda (ed.), *Documents et archives provenant de l'Asie Centrale*, Kyoto: Association franco-japonaise des études orientales, pp. 117–123.
1993　"Review of N. Sims-Williams / J. Hamilton, *Documents turco-sogdiens du IXe-Xe siècle de Touen-houang*,

London 1990.” *Indo-Iranian Journal* 36-4, pp. 362–371.

1995 「無常を説くマニ教ソグド語文書」『オリエント』37-2 (1994), pp. 16–32, incl. 1 pl.

2000a “Further Remarks on the Sino-Uighur Problem.”『アジア言語論叢』3, pp. 1–10.

2000b 「粟特文考釈」，新疆吐魯番地区文物局（編）『吐魯番新出摩尼教文献研究』北京，文物出版社, pp. 3–199.

2006 『コータン出土 8–9 世紀のコータン語世俗文書に関する覚え書き』(神戸市外国語大学研究叢書 38)，神戸，神戸市外国語大学.

2007 「ソグド人とトルコ人の関係についてのソグド語資料 2 件」『西南アジア研究』67, pp. 48–56.

2009 “The Karabalgasun Inscription and the Khotanese Documents.” In: D. Durkin-Meisterernst et al. (eds.), *Literarische Stoffe und ihre Gestaltung in mitteliranischer Zeit: Kolloquium anlässlich des 70. Geburtstages von Werner Sundermann*, Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag, pp. 349–362.

2010 “Karabalgasun ii. The Inscription.” In: *Encyclopædia Iranica*, vol. 15-5, New York: Encyclopædia Iranica Foundation, pp. 530–533.

2011a 「ソグド人と古代のチュルク族との関係に関する三つの覚え書き」『京都大学文学部研究紀要』50, pp. 1–41, incl. 2 pls.

2011b “Some New Readings in the Sogdian Version of Karabalgasun Inscription.” In: M. Ölmez / E. Aydın / P. Zieme / M. S. Kaçalin (eds.), *Ötüken’den İstanbul’a: Türkçenin 1290 Yılı (720-2010) Sempozyumu (3-5 Aralık 2010, İstanbul) Bildiriler*, İstanbul: İstanbul Büyükşehir Belediyesi, pp. 77–86.

2013 「バクトリア語文書研究の近況と課題」『内陸アジア言語の研究』28, pp. 39–65.

2016 「于闐的粟特人」，栄新江／羅豊（編）『粟特人在中国：考古発現与出土文献的新印証』北京，科学出版社, pp. 621–629.

2017 「コータンのユダヤ・ソグド商人？」，土肥義和／氣賀澤保規（編）『敦煌・吐魯番文書の世界とその時代』東京，東洋文庫，pp. 263−285.

2018 “Farewell to the «Teacher of Four *Twγryst’n*».” In: Zs. Gulácsi (ed.), *Language, Society, and Religion in the World of the Turks: Festschrift for Larry Clark at Seventy-Five*, (Silk Road Studies, 19), Turnhout: Brepols, pp. 267–279.

2019a *Three Manichaean Sogdian Letters Unearthed in Bäzäklik, Turfan*. Kyoto: Rinsen shoten.

2019b 「ブグト碑文のソグド語版について」『京都大学文学部研究紀要』58, pp. 1–33.

(forthcoming) “Bögü Qaghan, Zieme, Clark, and Moriyasu: On Some Aspects of the Early Phase of the Uighur Manichaeism.”

Zhang, Tieshan 張 鉄山 / P. Zieme

2011 “A Memorandum about the King of the *On Uygur* and His Realm.” *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 64-2, pp. 129–159, incl. 2 pls.

張 湛／時 光 Zhang, Zhan / Shi, Guang

2008 「一件発現猶太波斯語信劄的断代与釈読」『敦煌吐魯番研究』11, pp. 71–99.

Zieme, P.

2003 “Il testo antico-turco dell’inscrizione trilingue di Karabalgasun.” In: G. Gnoli (ed.), *Il Manicheismo, Vol. I: Mani e il Manicheismo*, Milano: Fondazione Lorenzo Valla / Arnoldo Mondadori Editore, pp. 243–247.